

Oracle9i Database for Windows

インストール・ガイド

リリース 2 (9.2.0.1.0)

2002 年 7 月

部品番号 : J06477-01

ORACLE®

Oracle9i Database for Windows インストレーション・ガイド, リリース 2 (9.2.0.1.0)

部品番号 : J06477-01

原本名 : Oracle9i Database Installation Guide, Release 2 (9.2.0.1.0) for Windows

原本部品番号 : A95493-01

原本著者 : Janelle Simmons

原本協力者 : Toby Close, Jonathan Creighton, Raj Gupta, Clara Jaeckel, Stephen Lee, Mark Kennedy, Helen Slattery, Debbie Steiner, Linus Tanaka, Alice Watson

Copyright © 2001, 2002, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、**Oracle Corporation**（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である **Oracle Corporation**（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『**Restricted Rights**』と共に提供してください。この場合次の **Notice** が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	vii
対象読者	viii
このマニュアルの構成	viii
関連文書	ix
表記規則	x
 Oracle9i for Windows の新機能	xv
Oracle9i for Windows リリース 2 (9.2) の新機能	xvi
Oracle9i for Windows リリース 1 (9.0.1) の新機能	xviii
 1 Oracle9i for Windows の概要	
Oracle9i for Windows の概要	1-2
インストールの計画	1-2
Optimal Flexible Architecture の使用方法	1-2
複数の Oracle ホームを使用するメリット	1-3
異なるリリースにおける複数の Oracle ホームの機能	1-3
Oracle8 リリース 8.0.4 より前	1-3
Oracle8 リリース 8.0.4 からリリース 8.0.6 まで	1-3
Oracle8i リリース 8.1.5 から Oracle9i リリース 2 (9.2) まで	1-4
Oracle Universal Installer の概要	1-4
Oracle Universal Installer の制限事項	1-5
インストール対象の Oracle9i 製品	1-5
Oracle9i Database	1-6
Oracle9i Client	1-6
Oracle9i Management and Integration	1-7

インストールの開始	1-8
2 インストール前の要件	
単一 Oracle ホーム・コンポーネント	2-2
最上位コンポーネントのシステム要件	2-3
FAT および NTFS ファイル・システムのシステム要件	2-3
Oracle9i のシステム要件	2-4
オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件	2-4
プロトコル・サポート	2-5
プロセッサ要件	2-5
ハードウェア要件	2-5
領域要件	2-6
Web ブラウザの要件	2-7
コンポーネントのサポート	2-7
Windows Terminal Server	2-7
Windows XP	2-8
個々のコンポーネントの必須要件	2-9
データベースのアップグレード要件	2-14
アプリケーションのリンクおよび再リンクの方針	2-15
リリース 7.3.4 および 8.0.6 のアップグレード	2-15
Migration Utility と Oracle のコマンドライン・ツール	2-15
必要な Oracle7 Server SQL*Net パッチのリリース	2-16
データベースのダウングレード	2-16
Oracle Real Application Clusters のアップグレード要件	2-16
3 データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択	
データベースの作成およびネットワークの構成方法	3-2
データベース環境のタイプ	3-4
データベースの作成方法の選択	3-5
ネットワークの構成	3-8
サーバー・ネットワークの構成	3-8
クライアント・ネットワークの構成	3-11

4 Oracle コンポーネントのインストール

Windows と UNIX でのインストールの相違	4-2
最小メモリー要件を満たすインストール	4-2
Oracle9i をインストールする前に	4-4
Oracle9i のインストールの開始	4-5
インストール・タイプの選択	4-7
「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」のインストール	4-8
Oracle9i Database の「カスタム」インストール	4-12
Oracle9i Client の「管理者」または「ランタイム」インストール	4-15
Oracle9i Client の「カスタム」インストール	4-16
Oracle Management Server のインストール	4-18
Oracle Internet Directory のインストール	4-21
Oracle Internet Directory の最初のインストール	4-22
Oracle Internet Directory のアップグレード	4-24
Oracle9i Management and Integration の「カスタム」インストール	4-28
インストール・セッション・ログの確認	4-33
Oracle のコンポーネントとサービスの削除	4-34
Windows プラットフォームでの Oracle サービスの停止	4-35
Oracle Internet Directory サービスの停止および削除	4-35
Oracle Management Server サービスの停止およびレジストリ・エントリの削除	4-36
Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除	4-36
Windows NT、Windows 2000 および Windows XP のレジストリからの Oracle キーの削除	4-37
システム変数パスの更新	4-39
「スタート」メニューからの Oracle の削除	4-39
Windows 98 のレジストリからの Oracle キーの削除	4-40
システム変数パスの更新	4-40
「スタート」メニューからの Oracle の削除	4-41

5 インストールされた初期データベースの内容の表示

ユーザー名およびパスワードの概要	5-2
パスワードのロック解除および変更	5-3
制限付き SYS データベース・ロール権限の付与	5-4
ユーザー名およびパスワードの確認	5-4
データベースの識別の概要	5-7
Windows での Oracle9i サービスの概要	5-8
表領域とデータ・ファイルの概要	5-9

初期化パラメータ・ファイルの概要	5-11
REDO ログ・ファイルの概要	5-11
制御ファイルの概要	5-12
ロールバック・セグメントの概要	5-12
データ・ディクショナリの概要	5-13

6 インストール後の構成タスク

NTFS ファイル・システムと Windows レジストリ権限	6-2
ファイル権限	6-2
Oracle Universal Installer により設定されるファイル権限	6-2
Database Configuration Assistant により設定されるファイル権限	6-3
Database Upgrade Assistant により設定されるファイル権限	6-3
NTFS ファイル・システムのセキュリティの設定	6-4
Windows レジストリのセキュリティの設定	6-5
パッチ・セット情報	6-5
無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック	6-6
コンポーネント別インストール後の構成タスク	6-7

A インストール可能な個々のコンポーネント

Oracle9i Database のコンポーネント	A-2
Oracle9i Client のコンポーネント	A-8
Oracle9i Management and Integration のコンポーネント	A-11
コンポーネントの説明	A-16

B Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク

Real Application Clusters のインストール要件	B-2
Real Application Clusters の概要	B-3
Real Application Clusters インストール前のタスク	B-5
タスク 1: 拡張パーティションおよび論理ドライブの作成	B-5
Windows NT	B-5
Windows 2000	B-8
タスク 2: シンボリック・リンク名の割当て	B-10
Oracle Cluster Setup Wizard の使用	B-10
Object Link Manager の使用	B-10
ImportSYMLinks ユーティリティの使用	B-11
タスク 3: クラスタの作成	B-12

RAW デバイス管理ユーティリティの概要	B-15
RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール	B-16
Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの削除	B-17
Real Application Clusters インストールのトラブルシューティング	B-18

C Oracle Transparent Gateways

Oracle Transparent Gateways のシステム要件	C-2
ゲートウェイのシステム要件	C-2
Microsoft SQL Server ゲートウェイのシステム要件	C-3
Sybase ゲートウェイのシステム要件	C-4
Teradata ゲートウェイのシステム要件	C-5
テスト済ゲートウェイ構成	C-6
Microsoft SQL Server ゲートウェイの構成	C-6
Sybase ゲートウェイの構成	C-7
Teradata ゲートウェイの構成	C-7
ゲートウェイ・インストール・ワークシート	C-8
Microsoft SQL Server ワークシート	C-8
Sybase ワークシート	C-9
Teradata ワークシート	C-9
Oracle Transparent Gateways のインストール	C-10
Oracle Transparent Gateways の削除	C-10

D 拡張インストール

非対話形式モードでの Oracle コンポーネントのインストール	D-2
レスポンス・ファイルのコピーおよび変更	D-3
複数 CD からの単一インストール・ステージの作成	D-3
Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定	D-4
サイレント・モードでの Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の実行	D-4
異なる言語の Oracle コンポーネント	D-8
異なる言語での Oracle Universal Installer の実行	D-8
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用方法	D-9
Web ベースのインストール	D-10

E **グローバル化・サポート**

NLS_LANG パラメータ	E-2
一般的に使用される NLS_LANG の値	E-3
MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定	E-5

用語集

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle9i for Windows の概要、インストール前、インストールおよびインストール後の作業について説明します。

このマニュアルでは、Windows NT、Windows 2000、Windows XP および Windows 98 オペレーティング・システムに適用できる Oracle9i for Windows ソフトウェアの機能についてのみ説明します。

次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連文書](#)
- [表記規則](#)

対象読者

『Oracle9i Database for Windows インストール・ガイド』は、Enterprise Edition、Standard Edition および Personal Edition のデータベース・タイプでインストールまたは構成を行うユーザーを対象としています。「Oracle9i for Windows」という用語は、このマニュアルではこれらすべてのタイプの説明に使用されます。

このマニュアルを使用するには、次のことに精通している必要があります。

- Windows NT、Windows 2000、Windows XP および Windows 98。また、これらをコンピュータ・システムにインストールし、テスト済であること。
- オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概念。

関連資料：

- オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概念の詳細は、『Oracle9i データベース概要』を参照してください。

このマニュアルの構成

このマニュアルは次のように構成されています。

第1章「Oracle9i for Windows の概要」

Oracle9i for Windows の概要を示し、インストールの計画について説明します。

第2章「インストール前の要件」

対応するオペレーティング・システム、Oracle9i for Windows のインストール・タイプと個別のコンポーネントの要件、アップグレード情報、およびサポートされているプロトコルについて説明します。

第3章「データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択」

インストール中に使用可能な Oracle9i データベースの作成および Oracle Net クライアント / サーバー・ネットワーク構成方法について説明します。

第4章「Oracle コンポーネントのインストール」

Oracle コンポーネントのインストールおよび削除方法について説明します。

第5章「インストールされた初期データベースの内容の表示」

インストールされた初期データベースの内容について説明します。

第6章「インストール後の構成タスク」

インストール後の構成タスクについて説明します。

付録 A 「インストール可能な個々のコンポーネント」

3 つの最上位コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能な個々のコンポーネントおよびそのコンポーネントの説明を記載します。

付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」

Windows でのクラスタ・ソフトウェアおよび Oracle Real Application Clusters に対するインストール前の必須のタスクについて説明します。

付録 C 「Oracle Transparent Gateways」

Oracle Transparent Gateways のシステム要件について説明し、インストール・ワークシートを提供します。

付録 D 「拡張インストール」

第 4 章で説明していない拡張インストールについて説明します。

付録 E 「グローバル化・サポート」

グローバル化・サポートについて説明します。

用語集

関連文書

詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』
- 『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』
- 『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』
- Oracle Enterprise Manager のドキュメント

ドキュメント・セット内の多くのドキュメントで、シード・データベースのサンプル・スキーマが使用されています。これらのスキーマは、Oracle をインストールするときにデフォルトでインストールされます。これらのスキーマの作成方法および使用方法の詳細は、『Oracle9i サンプル・スキーマ』を参照してください。

リリース・ノート、インストール・ドキュメント、ホワイト・ペーパー、またはその他の関連資料を無償でダウンロードするには、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) にアクセスしてください。OTN-J を利用する前に、オンライン登録が必要です。次の URL で登録できます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

OTN-J のユーザー名およびパスワードをすでにお持ちの場合は、次の OTN-J の Web サイトのドキュメント・セクションに直接アクセスできます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

ここでは、このマニュアルの本文およびサンプル・コードで使用される表記規則について説明します。表記規則は次の 3 種類です。

- [本文の表記規則](#)
- [サンプル・コードの表記規則](#)
- [Windows オペレーティング・システムの表記規則](#)

本文の表記規則

本文中では、特定の用語をより簡単に識別できるように、様々な表記規則を使用しています。次の表は、本文中で使用される表記規則とその使用例を説明したものです。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語、または用語集で説明されている用語、あるいはその両方を示します。	この句を指定する場合、 索引構成表 を作成します。
大文字（固定幅） フォント	大文字固定幅フォントは、システムによって指定される要素を示します。これらの要素には、パラメータ、権限、データ型、Recovery Manager のキーワード、Structured Query Language (SQL) のキーワード、SQL*Plus またはユーティリティのコマンド、パッケージ、メソッドの他に、システムで表示される列名、データベースのオブジェクトおよび構造、ユーザー名およびロールがあります。	この句は NUMBER 列に対してのみ指定できます。 BACKUP コマンドを使用して、データベースをバックアップできます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビューの TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
小文字（固定幅） フォント	<p>小文字固定幅フォントは、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名、およびサンプルのユーザー指定要素を示します。これらの要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名、および接続識別子の他に、ユーザー指定のデータベースのオブジェクトおよび構造、列名、パッケージおよびクラス、ユーザー名およびロール、プログラム・ユニット、およびパラメータ値があります。</p> <p>注意： 一部のプログラム要素には、大文字と小文字の両方が使用されます。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。</p>	<p>sqlplus を入力して、SQL*Plus を開きます。</p> <p>パスワードは、orapwd ファイルで指定されます。</p> <p>¥disk1¥oracle¥dbs ディレクトリのデータ・ファイルと制御ファイルをバックアップします。</p> <p>department_id、department_name および location_id 列は、hr.departments 表にあります。</p> <p>QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。</p> <p>oe ユーザーとして接続します。</p> <p>JRepUtil クラスは、これらのメソッドを実装します。</p>
小文字イタリック （固定幅） フォント	小文字イタリック固定幅フォントは、レースホルダまたは変数を示します。	<p>parallel_clause を指定できます。</p> <p>Uold_release.SQL を実行します。</p> <p>old_release は、アップグレード前にインストールしたリリースを表します。</p>

サンプル・コードの表記規則

サンプル・コードは、SQL、PL/SQL、SQL*Plus またはその他のコマンドライン文を示します。これらは固定幅フォントで示され、次の例のように、通常の本文とは区別されています。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表は、サンプル・コードで使用される表記規則とそれらの使用例を説明したものです。

規則	意味	例
[]	大カッコは、1 つ以上のオプション項目を囲みます。大カッコは入力しないでください。	DECIMAL (digits [, precision])
{ }	中カッコは複数の項目を囲み、そのうちの 1 つが必要であることを示します。中カッコは入力しないでください。	{ENABLE DISABLE}
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内にある複数のオプションの選択肢を区切るために使用します。オプションの 1 つを入力します。縦線は入力しないでください。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]

規則	意味	例
...	水平の省略記号は、次のいずれかを示します。 <ul style="list-style-type: none">■ 例に直接関係のないコードの一部を省略■ コードの一部の繰り返しが可能	<pre>CREATE TABLE ...AS subquery; SELECT col1, col2, ..., coln FROM employees;</pre>
. . . .	垂直の省略記号は、例に直接関係のないコードの数行を省略したことを示します。	<pre>SQL> SELECT NAME FROM V\$DATAFILE; NAME ----- /fs1/dbs/tbs_01.dbf /fs1/dbs/tbs_02.dbf . . . /fs1/dbs/tbs_09.dbf 9 rows selected.</pre>
その他の表記規則	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、示されているとおりに入力してください。	<pre>acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;</pre>
イタリック	イタリックの文字は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダまたは変数を示します。	<pre>CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name</pre>
大文字	大文字は、システムによって指定される要素を示します。ユーザーが定義する語句と区別するために、大文字で示しています。語句が大カッコ内に表示されている場合を除き、記載されているとおりの順序とスペルで入力します。ただし、これらの語句には大文字と小文字の区別がないため、小文字で入力できます。	<pre>SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;</pre>
小文字	小文字は、ユーザーが指定するプログラム要素を示します。たとえば、小文字は表、列またはファイルの名前を示します。 注意： 一部のプログラム要素には、大文字と小文字の両方が使用されます。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	<pre>SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;</pre>

Windows オペレーティング・システムの表記規則

次の表は、Windows オペレーティング・システムの表記規則とその使用例を説明したものです。

規則	意味	例
「スタート」→を選択	プログラムの起動方法。たとえば、Database Configuration Assistant を起動するには、タスクバーの「スタート」ボタンをクリックし、「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Database Configuration Assistant」を選択します。	「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Database Configuration Assistant」を選択します。
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名には、大文字と小文字の区別がありません。＜、＞、：、"、/、 、および - の特殊文字は使用できません。特殊文字 ¥ は、引用符に囲まれている場合でも、要素の区切り文字として扱われます。ファイル名が ¥¥ で始まる場合、Windows では汎用命名規則を使用しているものと認識されます。	c:¥winnt"¥"system32 は、C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。
C:¥>	現行のハード・ディスク・ドライブの Windows コマンド・プロンプトを示します。コマンド・プロンプトのエスケープ文字は、カレット (^) です。プロンプトは、現在作業中のサブディレクトリを示しています。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	特殊文字の円記号 (¥) は、Windows コマンド・プロンプトで特殊文字の二重引用符 (") のエスケープ文字として必要な場合があります。カッコおよび特殊文字の一重引用符 (') は、エスケープ文字を必要としません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600¥" C:¥>imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホーム名を示します。 ホーム名は、英数字 16 文字までです。ホーム名で利用できる特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_NAME_TNSListener

規則	意味	例
ORACLE_HOME および ORACLE_BASE	<p>Oracle8 リリース 8.0 以下のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールすると、サブディレクトリはすべて、最上位の ORACLE_HOME ディレクトリ（デフォルトでは次のとおり）の下に置かれました。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Windows NT の場合は C:¥orant■ Windows 98 の場合は C:¥orawin98 <p>あるいは、Oracle ホームと呼ばれるディレクトリの下に置かれました。</p> <p>今回のリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) に準拠しています。すべてのサブディレクトリが最上位の ORACLE_HOME ディレクトリの下にあるわけではありません。ORACLE_BASE という最上位ディレクトリがあり、デフォルトは C:¥oracle です。コンピュータに最新の Oracle リリースをインストールし、他の Oracle ソフトウェアをインストールしない場合、最初の Oracle ホーム・ディレクトリのデフォルト設定は、C:¥oracle¥orann です。nn は、最新のリリース番号です。Oracle ホーム・ディレクトリは、ORACLE_BASE の直下に置かれます。</p> <p>このマニュアルでは、ディレクトリ・パスの例は、すべて OFA 表記規則に準拠しています。</p>	<p>%ORACLE_HOME%¥rdbms¥admin ディレクトリに移動します。</p>

Oracle9i for Windows の新機能

この項では、Oracle9i for Windows リリース 2 (9.2) の新機能について説明し、追加情報の参照先を示します。

次の項では、Oracle9i の新機能について説明します。

- [Oracle9i for Windows リリース 2 \(9.2\) の新機能](#)
- [Oracle9i for Windows リリース 1 \(9.0.1\) の新機能](#)

関連資料：

- Oracle9i の新機能、オプションおよび拡張機能の一覧は、『Oracle9i データベース新機能』を参照してください。

Oracle9i for Windows リリース 2 (9.2) の新機能

次の内容について説明します。

- クラスタ・ファイル・システム
- 拡張されたセキュリティ
- Oracle Provider for OLE DB
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server
- User Migration Utility
- 大容量メモリー (VLM) のサポート
- Oracle9i リリース 2 (9.2) でサポートされないコンポーネント

クラスタ・ファイル・システム

この機能は、今後の Oracle9i リリース 2 (9.2) CD パックで使用可能になります。

クラスタ・ファイル・システムは、Windows NT および Windows 2000 プラットフォームで Real Application Clusters の Oracle ホーム・ファイルおよび Oracle データ・ファイルを格納するために使用される共有ファイル・システムです。Oracle Cluster Setup Wizard は、OracleClusterFileSystem サービスをインストールして起動し、1 つまたは 2 つの共有ファイル・システムを作成します。

関連資料：

- B-3 ページの「[Real Application Clusters の概要](#)」
- 『Oracle9i Real Application Clusters 概要』の「共有ディスク・ストレージとクラスタ・ファイル・システムのメリット」

拡張されたセキュリティ

SYS パスワードと SYSTEM パスワードの変更要件

Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成する場合は、構成プロセスの最後に SYS パスワードと SYSTEM パスワードを変更する必要があることに注意してください。これは、データへのアクセスを保護するために設計された新しいセキュリティ手順です。

Oracle Provider for OLE DB

ADO.NET アプリケーション開発者は、OLE DB .NET データ・プロバイダを介して Oracle Provider for OLE DB (OraOLEDB) を使用できます。接続時に接続属性 OLEDB.NET を設定して、OraOLEDB を OLE DB .NET データ・プロバイダと互換にすることができます。

関連資料：『Oracle Provider for OLE DB 開発者ガイド』

Oracle Services for Microsoft Transaction Server

Oracle Services for Microsoft Transaction Server は、Oracle Provider for OLE DB を介した OLE DB .NET および Oracle ODBC ドライバを介した ODBC .NET を使用して、.NET トランザクション・アプリケーションをサポートします。

User Migration Utility

新しいコマンドライン・ツールである User Migration Utility は、ローカルまたは外部データベース・ユーザーからエンタープライズ・ユーザーへの変換を簡略化します。

関連資料：

- 『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「データベース・ツールの概要」
- 『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「ユーザーの手動による移行」
- 『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』の「ローカルまたは外部ユーザーからエンタープライズ・ユーザーへの移行」

大容量メモリー（VLM）のサポート

Oracle9i for Windows リリース 2 (9.2) は、Windows 2000 および Windows XP での大容量メモリー（VLM）構成をサポートします。これにより、Oracle9i リリース 2 (9.2) は、Windows アプリケーションでこれまで使用可能だった 4 ギガバイト（GB）を超える RAM にアクセスできます。

関連資料：『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「Windows での Oracle9i の拡張性」

Oracle9i リリース 2 (9.2) でサポートされないコンポーネント

リリース 1 (9.0.1) に含まれていた次の Oracle9i データベース・コンポーネントは、リリース 2 (9.2) ではインストールできません。

- Remote Method Invocation (RMI) /Internet Inter-ORB Protocol (IIOP)
- General Inter-ORB Protocol (GIOP)
- Oracle Servlet Engine (OSE)
- Common Object Request Broker Architecture (CORBA) フレームワークおよび J2EE コンテナ
- Java 2 Enterprise Edition (J2EE)
- Java Transaction API (JTA)
- Java Naming and Directory Interface (JNDI)

- CosNaming
- サブレット
- Oracle Java Server Pages (OSJP)
- EJB コンテナ

次のコンポーネントは、今後のリリースでサポートされなくなります。

- INTYPE File Assistant (IFA)。
- Oracle Trace。オラクル社では、かわりに SQL トレースおよび TKPROF を使用することを強くお勧めします。

Oracle9i for Windows リリース 1 (9.0.1) の新機能

- Windows NT および Windows 2000 との統合
 - Oracle9i は、Windows 2000 および Windows NT を含む複数バージョンの Microsoft Windows をサポートします。
 - Oracle9i は、Microsoft Transaction Services および Internet Information Services との拡張された統合をサポートします。Oracle9i の公開鍵インフラストラクチャ (PKI) およびシングル・サインオン機能は、Windows 2000、Active Directory および Microsoft 証明書ストアとも統合されています。
 - Oracle9i は、Oracle データベースが Microsoft Transaction Server および COM+ Transactions 環境にリソース・マネージャとして関与できるようにする拡張ソリューションも提供し、パフォーマンスおよび拡張性を高めています。
 - Windows セキュリティにより、レジストリおよび Active Directory で Oracle Wallets をサポートし、Oracle 製品で Microsoft 証明書ストアが使用できるようになります。

Active Directory と Oracle Internet Directory の同期により、Oracle およびサード・パーティ製メタディレクトリ・コンポーネントのスケジューリングおよび構成が集中化されます。

 - Oracle Internet Directory を中央のディレクトリとして実装する一方でデスクトップ環境をサポートするために Active Directory を使用するカスタマは、Microsoft Active Directory Service Interfaces (ADSI) を使用して Windows デスクトップ環境から Oracle Internet Directory にアクセスできます。
 - Active Directory と Oracle Internet Directory の間のメタディレクトリ同期により、Oracle およびサード・パーティ製メタディレクトリ・コンポーネントの集中化されたスケジューリングおよび構成が容易になります。Active Directory と Oracle Internet Directory の間の同期は、Oracle Directory Integration Platform および Siemens 社の Active Directory Synchronization エージェントを配置することで実現できます。

- 今後の CD パックで出荷される Oracle Fail Safe は、Windows NT および Windows 2000 で構成されているすべての Microsoft Cluster Server クラスタに配置される Oracle データベースおよびアプリケーションの可用性を高めます。
- Windows 開発者に対し、Oracle9i は拡張されたネイティブ OLE DB プロバイダを提供します。XML、データベース・イベントおよび Oracle9i 拡張機能は、Oracle Objects for OLE を通じてサポートされます。COM Automation は、Java ストアド・プロシージャもサポートするようになりました。

■ **iSQL*Plus**

iSQL*Plus は、SQL*Plus のブラウザベースの実装です。iSQL*Plus をインターネット上で使用して Oracle データベースに接続し、SQL*Plus コマンドラインを使用する場合と同じアクションを実行できます。iSQL*Plus の実装では、Web ブラウザ、iSQL*Plus サーバーを伴う Oracle HTTP Server、および Oracle データベース・サーバーを使用します。

■ **Microsoft Transaction Server (MTS)**

次の表に、Oracle9i と Microsoft Transaction Server の連携における新機能の一部を示します。

パフォーマンスの改善	Microsoft Transaction Server アプリケーションと Oracle Service for MTS の間の通信は、必要なくなりました。
高可用性	Oracle データベースは、Oracle Service for MTS に依存しなくなりました。これまでは、Oracle Service for MTS が停止すると、Microsoft Transaction Server トランザクションで Oracle データベースを使用できませんでした。
拡張性の改善	現在、Oracle データベースを Microsoft Transaction Server トランザクションで使用可能にするコードが、各 Microsoft Transaction Server アプリケーション・プロセスに埋め込まれています。
より簡単な構成	以前のバージョンでは、データベースを Microsoft Transaction Server トランザクションで使えるようにし、Oracle Service for MTS という Windows サービスを各 Oracle データベースに対して作成する必要がありました。さらに、各 Oracle データベースでサポートされる Oracle Service for MTS は 1 つにかぎられていました。このリリースでは、このサービスは必要なくなりました。

関連資料：『Oracle Services for Microsoft Transaction Server 開発者ガイド』

■ Oracle COM Automation

Oracle COM Automation は、PL/SQLにかぎらず Java でも使用可能になりました。一般的な機能は同様ですが、開発者ガイドには、機能、設定およびアーキテクチャが異なる領域が示されています。

このリリースでは、Oracle は com81.dll の名前を orawpcom.dll に変更しました。Oracle8i から移行するユーザーは、PL/SQL 用の Oracle COM Automation の使用を継続するには comwrap.sql を再実行する必要があります。

関連資料：『Oracle COM Automation 機能 開発者ガイド』

■ Database Configuration Assistant の改良

Database Configuration Assistant は、テンプレートとして保存されたデータベース定義を含むよう再設計されました。テンプレートで、データベースを生成できます。ユーザーは、新規テンプレートを定義、既存のテンプレートを変更またはオラクル社が提供しているテンプレートを使用できます。Database Configuration Assistant でデータベースを作成する際に、ユーザーは Oracle の新しいサンプル・スキーマを含めることができます。

■ Oracle DBA Studio と Enterprise Manager コンソールの統合

Oracle DBA Studio は、単独のアプリケーションとしては使用できなくなりました。このコンポーネントの機能は、Oracle Enterprise Manager コンソールと統合されました。

関連資料：『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

■ Oracle Internet Directory 管理の改良

Oracle Internet Directory レプリケーション・サーバーの管理は、新しいレプリケーション・キュー管理および調整ツールの追加によって改良されました。

■ Oracle Objects for OLE

Oracle Objects for OLE は、一時的なバイナリ・ラージ・オブジェクト (BLOB) またはキャラクタ・ラージ・オブジェクト (CLOB) の作成をサポートします。これらのオブジェクトを操作すると、SQL 文または PL/SQL ブロックへのバインドや永続 LOB へのコピーが可能です。

Oracle Objects for OLE はデータベース・イベントをサポートします。この非同期通知はフェイルオーバー・ハンドラと同じ方法でモデル化されるため、クライアントは 1 つ以上のデータベース・イベントにサブスクライブし、その他の処理を続行できます。クライアントに関係がある各データベース・イベントは、Oracle Objects for OLE によりサブスクリプションとして保存されます。

関連資料：「Oracle Objects for OLE」オンライン・ヘルプ

■ Oracle OLAP Services

Oracle OLAP Services は、Java OLAP API および分析エンジンを提供します。開発者は、OLAP Services を使用して、予測、モデル化、統合、割当て、シナリオ管理などの予測的分析機能とともに複雑な統計、数学および財務の計算をサポートする分析アプリケーションを構築できます。OLAP API はすべて Java であるため、OLAP Services を使用すると、インターネット上の幅広い地域に分散する多数のユーザーに分析アプリケーションを配布できます。Oracle OLAP Services は、Oracle9i Enterprise Edition でインストールされます。

関連資料：『Oracle9i OLAP Services Concepts and Administration Guide』

■ Oracle Personal Edition for Windows 98

Oracle9i リリース 1 (9.0.1.1.1) が、Oracle Personal Edition for Windows 98 の最終リリースです。

■ Oracle Real Application Clusters

Oracle Real Application Clusters は、新しい画期的なソフトウェア・アーキテクチャであり、以前の Oracle クラスタ対応ソフトウェア・リリースの機能を超越する拡張性以及び高可用性機能を備えています。

次の表に、Oracle9i での Oracle Real Application Clusters の機能の一部を示します。

キャッシュ・フュージョン	ディスク I/O コストを課さずに、複数のクラスタ・ノード間でのキャッシュ一貫性を保証するテクノロジー。
クラスタ構成	<p>Windows 上の Oracle Real Application Clusters の Oracle9i リリースでは、クラスタ構成がより簡単になります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ このリリースでは、Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェア (Oracle OSD) が提供されています。Oracle OSD は、オペレーティング・システムと Oracle Real Application Clusters ソフトウェア間の通信リンクとして機能します。■ Oracle Cluster Setup Wizard は、クラスタの作成または既存のクラスタへのノードの追加を行います。

集中化された ノード情報

集中化されたクラスタ・データベースの構成情報。

- 集中化された構成情報リポジトリを介した簡単な構成。
- Oracle Enterprise Manager または `srvctl` ユーティリティを使用して、静的構成情報の追加や削除などのインスタンスの管理を行います。
- Database Configuration Assistant を使用して、クラスタ・データベースのインスタンスの追加または削除を動的に行います。

関連資料：

- その他の新機能については、Oracle Real Application Clusters のドキュメント・セットを参照してください。
- 別途インストール可能な、Oracle Real Application Clusters に対する Windows 固有の拡張機能の詳細は、Oracle Real Application Clusters Guard for Windows のドキュメント・セットを参照してください。このドキュメントは、今後の CD パックで出荷される Oracle Fail Safe および Oracle Real Application Clusters Guard のコンポーネント CD に含まれています。

■ Oracle Ultra Search

Oracle Ultra Search は、Oracle9i の新機能であり、あらゆる場所に存在する情報を検索できる、すぐに使用可能なソリューションを提供します。Ultra Search には、次の機能ががあります。

- Oracle および Oracle 以外のデータベース、Web サーバー、ディスク上のファイル、企業のメール・サーバーなど、存在する場所に関係なく内容を検索できます。
- Crawler を使用して、企業イントラネットをクロールし、索引を付け、検索可能にします。ドキュメントは自身のリポジトリ内にとどまり、クロールされた情報によって、指定された Oracle9i データベースのファイアウォール内に索引が作成されます。
- 直観的な検索メニューおよびセルフサービス・アクセス機能を使用して Web スタイルの検索を実行できます。使用が難しい低レベル Application Program Interface (API) に対してコーディングする必要はありません。ただし、高度なユーザーには API も公開されます。
- ポータル・アプリケーションで使用できる貴重なメタデータを抽出することにより、内容を編成および分類します。
- より関連性の高いヒットを返すことにより、効果的な検索機能を提供します。

■ Oracle Workflow

Oracle Workflow は、ビジネス・イベント・システムを提供しています。ビジネス・イベント・システムは、Oracle Advanced Queuing のインフラストラクチャを利用して、企業内のシステム間および企業間でビジネス・イベントを伝達する新しいアプリケーション・サービスです。ビジネス・イベント・システムには、重要なイベントのサブスクリプションを登録するためのイベント・マネージャ、およびワークフロー・プロセス内のビジネス・イベントをモデル化するイベント・アクティビティが含まれます。このサポートにより、Oracle Workflow ユーザーは、コア・アプリケーションへの介入を最小限にして、ビジネス・オブジェクトおよび E-Business 統合フローを強力かつ柔軟に扱うことができます。

■ Windows 2000 上の Oracle9i

Windows 2000 上と Windows NT 4.0 上の Oracle9i には、いくつかの違いがあります。

関連資料：『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の
「Windows 2000 での Oracle9i の使用」

■ Windows XP のサポート

Oracle9i for Windows リリース 1 (9.0.1.1.1) は、Windows XP Professional で動作保証されています。

オラクル社では、様々なプラットフォームでのコンポーネントのサポート情報を提供し、互換性のあるクライアントとデータベースのバージョンをリストし、パッチと対処方法に関する情報を確認しています。

■ Workspace Manager

Workspace Manager は、作業領域管理システムに構築された長時間トランザクション・フレームワークを提供します。Workspace Manager は、一連の短時間トランザクションと複数のデータ・バージョンを使用して、原子性および同時実行性をメンテナンスする完全な長時間トランザクション・イベントを実装します。変更は、異なる作業領域としてデータベースに格納されます。ユーザーは、更新する新しいデータ・バージョンを作成する一方で、古いデータのコピーをメンテナンスできます。長時間トランザクションの継続中の結果は永続的に格納され、同時実行性および一貫性が確保されます。

関連資料：『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド -Workspace Manager』

Oracle9i リリース 1 (9.0.1) でサポートされないコンポーネント

リリース 8.1.7 に含まれていた次のコンポーネントは、リリース 1 (9.0.1) ではインストールできません。

■ INTERNAL データベース・ユーザー

CONNECT INTERNAL および CONNECT INTERNAL/*password* は、Oracle9i ではサポートされていません。かわりに次のように使用します。

CONNECT / AS SYSDBA

CONNECT *username*/*password* AS SYSDBA

関連資料：『Oracle9i データベース管理者ガイド』

■ LU6.2 プロトコル・サポート

LU6.2 プロトコルは、Oracle9i ではサポートされません。TCP/IP ベースのプロトコルに移行またはアップグレードしてください。

■ Server Manager

Server Manager は使用できません。かわりに SQL*Plus を使用します。ほとんどの Server Manager スクリプトは SQL*Plus 環境で動作しますが、変更の必要なスクリプトもあります。

関連資料： Server Manager スクリプトの変更の詳細は、『Oracle9i データベース移行ガイド』を参照してください。

■ Windows 95

Windows 95 は、Oracle9i ではサポートされていません。

■ 大容量メモリー (VLM)

大容量メモリー (VLM) 構成は、このリリースではサポートされていません。

Oracle9i for Windows の概要

この章では、Oracle9i for Windows の概要を示し、インストールの計画を支援します。

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle9i for Windows の概要](#)
- [インストールの計画](#)
- [インストールの開始](#)

Oracle9i for Windows の概要

Oracle9i for Windows は、インターネット用の開発および実行プラットフォームです。Oracle9i for Windows の機能には、次のものが含まれます。

- Oracle9i データベース内に Java コードを格納し実行できる組込み Java Virtual Machine (JVM)
- Java プログラムに埋め込まれた SQL 文をサポートするプログラミング構文である SQLJ のサポート
- Component Object Model (COM) や Microsoft Transaction Server との統合
- Oracle Enterprise Manager コンソールやクライアントから完全にアクセスできるフロントエンドの管理アプリケーション (Web ブラウザを含む) との統合

関連資料：

- 『Oracle9i データベース概要』
- 『Oracle9i データベース新機能』
- 『Oracle Enterprise Manager 概説』

インストールの計画

ここでは、Oracle Universal Installer、インストール・タイプ、データベース構成、およびインストールの計画で注意すべき概念について説明します。

- [Optimal Flexible Architecture の使用方法](#)
- [Oracle Universal Installer の概要](#)
- [インストール対象の Oracle9i 製品](#)

Optimal Flexible Architecture の使用方法

Oracle9i データベースをインストールおよび構成する際に、Optimal Flexible Architecture (OFA) 規格を使用することをお薦めします。OFA 規格は、高速で可用性および信頼性が高く、メンテナンスがほとんど必要ない Oracle データベースを作成するための、一連の構成ガイドラインです。最も重要な特長は、次のとおりです。

- ディレクトリやファイルの構造化された編成およびデータベース・ファイルに使用される整合性のあるネーミングにより、データベース管理が簡略化されます。
- I/O を複数のディスクへ分散することにより、同時に単一ドライブへ発行される複数の読み取り / 書き込みコマンドが原因のパフォーマンス・ボトルネックを防止します。
- アプリケーションを複数のディスクへ分散することにより、データベース障害から保護します。

- データベース管理者が Oracle ホーム・ディレクトリを追加、移動または削除するとき、ホーム・ディレクトリに安全にログオンできます。
- 複数のバージョンのアプリケーション・ソフトウェアを同時に実行できます。
- 本番データベースがある Oracle ホームとは別のディレクトリの Oracle ホームで、ソフトウェアのアップグレードをテストできます。

注意： Oracle Universal Installer は OFA をサポートしていますが、OFA は必須ではありません。

複数の Oracle ホームを使用するメリット

複数の Oracle ホームを使用する主なメリットは、複数のリリースの同一製品を同時に実行できることです。たとえば、本番データベースの Oracle9i リリース 2 (9.2) を実行する前に、Oracle9i リリース 2 (9.2) のデータベース・パッチをテストできます。

異なるリリースにおける複数の Oracle ホームの機能

Oracle8 リリース 8.0.4 での導入以降、複数の Oracle ホームの機能には変更が加えられました。使用しているリリースの Oracle ホームにはどのような機能があるのかを判断するのに役立ちます。

Oracle8 リリース 8.0.4 より前

Oracle8 リリース 8.0.4 より前の Oracle for Windows NT/Windows 95 のリリースは、単一 Oracle ホームしかサポートしないため、単一の Oracle ホームに Oracle 製品をインストールして実行します。リリース番号の 1 桁目または 2 桁目が異なる Oracle 製品を同じ Oracle ホームにインストールできます。たとえば、Oracle7 リリース 7.2 製品、Oracle7 リリース 7.3 製品または Oracle7 リリース 7.x、および Oracle8 リリース 8.x 製品を同じ Oracle ホームにインストールできます。ただし、リリース番号の 3 桁目が異なる複数の同一製品をインストールすることはできません。たとえば、Oracle7 リリース 7.3.2 製品と Oracle7 リリース 7.3.3 製品を同じコンピュータにインストールできません。一方のインストールによって他方は上書きされます。

Oracle8 リリース 8.0.4 からリリース 8.0.6 まで

1 つ以上のリリースの Oracle 製品を複数の Oracle ホームにインストールできます。たとえば、複数の Oracle ホームを使用して、Oracle8 リリース 8.0.x 製品、Oracle8i リリース 8.1.5 製品または Oracle7 リリース 7.x、および Oracle8 リリース 8.0.x 製品を同じコンピュータ上の異なる Oracle ホームにインストールできます。

さらに、リリース番号の 1 桁目または 2 桁目が異なる Oracle 製品を同じ Oracle ホームにインストールできます。たとえば、Oracle7 リリース 7.2 製品と Oracle8 リリース 8.0.x 製品は同じ Oracle ホームにインストールできます。

Oracle8i リリース 8.1.5 から Oracle9i リリース 2 (9.2) まで

これらのリリースには、Oracle8 リリース 8.0.4 からリリース 8.0.6 までと同じ複数の Oracle ホーム機能が備わっていますが、次の制限事項が適用されます。

- Oracle8i リリース 8.1.5 から Oracle9i リリース 2 (9.2) までのリリースは、旧インストーラを使用して作成した Oracle ホームにインストールできません。(旧インストーラは Oracle Installer という名前で、Oracle8i リリース 8.1.5 より前のインストールに使用されていました。新しい Java ベースのインストーラは Oracle Universal Installer という名前です。)
- Oracle8i リリース 8.1.5 より前のリリースは、Oracle8i リリース 8.1.5 から Oracle9i リリース 2 (9.2) までのリリースで作成された Oracle ホームにインストールできません。
- Oracle8i リリース 8.1.5 から Oracle9i リリース 2 (9.2) までのリリースは、別々の Oracle ホームにインストールする必要があります。各 Oracle ホームには、複数のリリースをインストールできません。

関連資料：『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「複数の Oracle ホームおよび Optimal Flexible Architecture」

Oracle Universal Installer の概要

Oracle Universal Installer は、CD から Oracle コンポーネントをインストールするための Java ベースの Graphical User Interface (GUI) です。Oracle Universal Installer には、次の機能があります。

- コンポーネントおよびコンポーネント・セットのインストール
- Web ベースのインストール
- National Language Support (NLS) およびグローバリゼーション・サポート
- 分散インストールのサポート
- レスポンス・ファイルを使用した（対話を必要としない）サイレント・インストール
- インストール済コンポーネントの削除
- 複数の Oracle ホームのサポート

関連項目： Web ベース・インストールおよびサイレント・インストールの詳細は、[付録 D「拡張インストール」](#)を参照してください。

Oracle Universal Installer の制限事項

- (リリース 7.x やリリース 8.0.x とともに出荷された) 旧 Oracle Installer を使用した、Oracle9i リリース 2 (9.2) の Oracle ホーム・ディレクトリへのコンポーネントのインストールは、サポートされません。同様に、リリース 2 (9.2) のコンポーネントは、リリース 7.x、8.0.x または 8.1.5 の Oracle ホームにインストールできません。
- Oracle Universal Installer により、Java Runtime Environment (JRE) の Oracle バージョンが自動的にインストールされます。このバージョンは、Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle アシスタントの実行に必要です。
- Oracle Universal Installer は、Oracle 製品のインストールを非対話形式で実行でき、オプションでサイレント・モードに設定できます。サイレント・モードはバックグラウンド・プロセスであるため、ウィンドウに表示されません。
- Oracle Universal Installer は、Web ベースのインストールを実行できます。このインストーラの機能の詳細は、『Oracle Universal Installer Concepts Guide』を参照してください。
- リモートの Terminal Services Client から、[Terminal Server Service](#) を実行している Windows 2000 Server または Windows NT 4.0 Terminal Server への Oracle9i データベース・コンポーネントのインストールは、サポートされていません。この方法で Oracle9i のインストールを試行すると、多数のデータベース構成ツールがハングします。すべての構成ツールは Terminal Server コンソールから開始し、Terminal Services Client からは開始しないでください。

関連資料：『Oracle Universal Installer Concepts Guide』

このガイドは、Oracle9i データベース・ドキュメント CD に含まれており、インストール時に自動的にハード・ディスク・ドライブにインストールされます。このマニュアルを表示するには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。

インストール対象の Oracle9i 製品

インストール時に、3 つの最上位コンポーネントの 1 つを選択するよう求められます。これらの製品は次のとおりです。

- [Oracle9i Database](#)
- [Oracle9i Client](#)
- [Oracle9i Management and Integration](#)

個々の最上位コンポーネントには、いくつかのインストール・タイプが含まれており、各タイプには一連の個々のコンポーネントが含まれています。ここでは、3 つの最上位コンポーネントと、そのインストール・タイプを示します。

Oracle9i Database

Oracle9i データベースは、オブジェクト指向リレーショナル・データベース管理システムであり、Oracle データベースおよび Oracle インスタンスから構成されています。4 つのインストール・タイプがあります。

- **Enterprise Edition:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、事前に構成されたシード・データベース、ネットワーキング・サービス、Oracle Option、データベース環境ツール、管理ツール（コンソール、Management Server、Intelligent Agent など）の Oracle Enterprise Manager フレームワーク、Oracle ユーティリティおよびオンライン・ドキュメントをインストールします。データ・ウェアハウス環境およびトランザクション処理環境で最もよく使用される製品もインストールします。
- **Standard Edition:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、事前に構成されたシード・データベース、ネットワーキング・サービス、管理ツール（コンソール、Management Server、Intelligent Agent など）の Oracle Enterprise Manager フレームワークおよび Oracle ユーティリティをインストールします。
- **Personal Edition:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、「Enterprise Edition」インストール・タイプと同じソフトウェアをインストールしますが、Enterprise Edition および Standard Edition との完全な互換性を必要とする単一ユーザーの開発および配布環境のみサポートします。

注意： Oracle9i リリース 1 (9.0.1.1.1) が、Windows 98 における Personal Edition の最終リリースです。

- **カスタム：** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer から、「Enterprise Edition」、「Standard Edition」および「Personal Edition」のインストールで使用可能なコンポーネントのうち、インストールする個々のコンポーネントを選択するよう求められます。

Oracle9i Client

Oracle9i クライアントは、フロントエンド・データベース・アプリケーションで、1 つ以上のアプリケーション・サーバーを介してデータベースに接続します。3 つのクライアント・インストール・タイプがあります。

- **管理者：** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、エンタープライズ管理ツール、ネットワーキング・サービス、ユーティリティおよび基本クライアント・ソフトウェアを含め、Oracle Enterprise Manager コンソールをインストールします。
- **ランタイム：** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer はネットワーキング・サービスおよびサポート・ファイルをインストールします。
- **カスタム：** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer から、「管理者」および「ランタイム」で使用可能なコンポーネントのうちインストールする個々のコンポーネントを選択するよう求められます。

Oracle9i Management and Integration

Oracle Management Server は、管理タスク用の集中処理および分散システムです。クライアント・ノードと管理対象ノード間の分散制御を使用可能にします。

3 つの Management and Integration インストール・タイプがあります。

- **Oracle Management Server:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は Oracle Enterprise Manager コンソールおよび Oracle Management Server をインストールします。Oracle Management Server は、Enterprise Manager コンソールからすべてのシステム管理タスクを処理し、企業全体の管理対象ノードにある Intelligent Agent へのこれらのタスクの分散を管理します。また、Oracle Universal Installer は基本的なクライアント・ソフトウェアもインストールします。
- **Oracle Internet Directory:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 対応の Oracle Internet Directory データベース、LDAP 対応のクライアント・ツールおよび Oracle Internet Directory データベース・スキーマをインストールします。
- **カスタム:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer から、「Oracle Management Server」、「Oracle Internet Directory」および「Oracle Integration Server」で使用可能なコンポーネントのうちインストールする個々のコンポーネントを選択するよう求められます。

関連項目: 各インストール・タイプでインストールされる個々のコンポーネントのリストは、[付録 A 「インストール可能な個々のコンポーネント」](#)を参照してください。

インストールの開始

インストールを開始する準備ができました。迅速に作業を開始するには、次に示された順序で各章を参照し、その指示に従います。

目的	参照先
次の事項のインストール要件を調べる。 <ul style="list-style-type: none">■ 個々のインストール・タイプ■ Oracle データベースの移行■ 個々のコンポーネント■ 単一 Oracle ホーム・コンポーネント■ Oracle Enterprise Manager のコンポーネント■ ネットワーク・プロトコルおよびベンダー	第 2 章「インストール前の要件」
Oracle9i データベースの作成方法および Oracle Net クライアント / サーバー環境の構成方法を選択する。	第 3 章「データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択」
Oracle Real Application Clusters のクラスタ化データベースに対してインストール前のタスクを実行する。	付録 B「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」
Oracle コンポーネントをインストールおよび削除する。	第 4 章「Oracle コンポーネントのインストール」
Oracle コンポーネントを非対話形式でインストールする。	D-2 ページの「非対話形式モードでの Oracle コンポーネントのインストール」

インストール前の要件

この章では Oracle9i for Windows のインストールの要件を説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- 単一 Oracle ホーム・コンポーネント
- 最上位コンポーネントのシステム要件
- 個々のコンポーネントの必須要件
- データベースのアップグレード要件

単一 Oracle ホーム・コンポーネント

ほとんどの Oracle コンポーネントは、同じコンピュータに複数回インストールできます。ただし、次のコンポーネントは、各コンピュータに 1 回しかインストールできません。

- Oracle for Windows NT Performance Monitor
- Oracle Objects for OLE
- Oracle Provider for OLE DB

注意： すべての Oracle7 コンポーネントおよびすべての Oracle8 リリース 8.0.3 コンポーネントは、単一 Oracle ホーム製品です。

関連項目： 1-2 ページの「[Optimal Flexible Architecture の使用方法](#)」

これらのコンポーネントを 2 回目にインストールしようとすると、Oracle Universal Installer は、これらの製品が別の Oracle ホームにインストール済であることを検出し、これらの製品をインストール・プロセスから自動的に削除します。

C:\Program Files\Oracle\Inventory\logs ディレクトリの installActions.log ファイルに次の情報が記録されます。

product_name は単独の Oracle ホーム製品です。すでに *currently_installed_location* にインストールされています。

インストールを実行しているときに、1 つ以上の単一 Oracle ホーム・コンポーネントが現行のセッションでインストールできないことに気づいた場合は、これらのコンポーネントのいずれか、またはこれらのコンポーネントの古いバージョンが、別の Oracle ホームにインストールされていないかをチェックします。これらのコンポーネントを現在選択している Oracle ホームにインストールする場合は、まず競合するバージョンを削除します。

関連項目： これらのコンポーネントのインストール・タイプは、[付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」](#) を参照してください。

最上位コンポーネントのシステム要件

ここでは、最上位コンポーネントごとのシステム要件を示します。個々の最上位コンポーネントには、いくつかのインストール・タイプが含まれており、各タイプには一連の個々のコンポーネントが含まれています。一部のコンポーネントには、インストール前に満たす必要のある要件もあります。これらの要件は、2-9 ページの「[個々のコンポーネントの必須要件](#)」で説明します。

- [FAT および NTFS ファイル・システムのシステム要件](#)
- [Oracle9i のシステム要件](#)
- [コンポーネントのサポート](#)

重要： Oracle9i の各最上位コンポーネントのハード・ディスク要件には、オペレーティング・システムがインストールされているパーティションに Java Runtime Environment (JRE) および Oracle Universal Installer をインストールするために必要な 32MB が含まれています。十分な領域が検出されないと、インストールは失敗し、エラー・メッセージが表示されます。

FAT および NTFS ファイル・システムのシステム要件

この章では、File Allocation Table (FAT) および NT File System (NTFS) の両方のファイル・システムのシステム要件を示します。両方のファイル・システムは領域割当てが異なるので、ハード・ディスク要件は異なります。

Windows NT、Windows 2000 および Windows XP には NTFS、Windows 98 には FAT32 を使用することをお勧めします。

関連項目： 6-2 ページの「[NTFS ファイル・システムと Windows レジストリ権限](#)」

注意： この項に記載されている FAT および NTFS システム要件を確認してください。これらの値は、Oracle Universal Installer の「サマリー」ウィンドウでレポートされるハード・ディスク値よりも正確です。これらのウィンドウには、次の情報が含まれていません。

- 正確な FAT ディスク容量の値
 - データベースの作成に必要な領域
 - ハード・ディスク・ドライブ上に展開される圧縮ファイルのサイズ
-
-

Oracle9i のシステム要件

次の内容について説明します。

- [オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件](#)
- [プロトコル・サポート](#)
- [プロセッサ要件](#)
- [ハードウェア要件](#)
- [領域要件](#)
- [Web ブラウザの要件](#)

関連項目：

- 2-9 ページの「[個々のコンポーネントの必須要件](#)」を参照してください。
- 各インストール・タイプでインストールされる個々のコンポーネントのリストは、A-2 ページの「[Oracle9i Database のコンポーネント](#)」を参照してください。

オペレーティング・システムおよび Service Pack の要件

最上位の Oracle9i Client コンポーネントは、Windows 98、Windows NT、Windows 2000 および Windows XP Professional でサポートされています。

最上位の Oracle9i データベースおよび Oracle9i Management and Integration コンポーネントは、次のオペレーティング・システムでサポートされています。

- Service Pack 5 以上を適用した Windows NT
Windows NT には、Windows NT Workstation 4.0、Windows NT Server 4.0、Windows NT Server Enterprise Edition 4.0 および Windows NT Server 4.0 Terminal Server Edition が含まれます。
- Service Pack 1 以上を適用した Windows 2000
Windows 2000 には、Windows 2000 Professional、Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server、Windows 2000 Datacenter Server および Terminal Services が含まれます。
- Windows XP Professional

関連項目： 2-7 ページの「[コンポーネントのサポート](#)」

プロトコル・サポート

Oracle Net Foundation レイヤーは、Oracle プロトコル・サポートを使用して、次の業界標準ネットワーク・プロトコルと通信します。

- TCP/IP
- Secure Sockets Layer (SSL) 付き TCP/IP
- Named Pipes

プロセッサ要件

表 2-1 に、各インストール・タイプのプロセッサ要件をリストします。

表 2-1 プロセッサ要件

インストール・タイプ	プロセッサ要件
「Enterprise Edition」、「Standard Edition」、「Personal Edition」、「管理者」および「ランタイム」	<ul style="list-style-type: none">■ 動作可能プロセッサ: Pentium 166MHz■ 推奨プロセッサ: Pentium 266MHz
Oracle Management Server	<ul style="list-style-type: none">■ 動作可能プロセッサ: Pentium 266MHz■ 推奨プロセッサ: Pentium 300MHz
Oracle Internet Directory	<ul style="list-style-type: none">■ 動作可能プロセッサ: Pentium 166MHz■ 推奨プロセッサ: Pentium 300MHz

ハードウェア要件

最上位の Oracle9i データベースおよび Oracle9i Management and Integration のコンポーネントには、次のハードウェア・コンポーネントが必要です。

- RAM: 128MB (256MB を推奨)
- 仮想メモリー: 初期サイズ 200MB、最大サイズ 400MB
- ビデオ・アダプタ: 256 色

関連項目: 4-2 ページの「最小メモリー要件を満たすインストール」

最上位の Oracle9i Client コンポーネントに必要な RAM は 128MB で、推奨 RAM サイズは 256MB です。

領域要件

「カスタム」の場合の要件は、インストール時に選択されたコンポーネントに依存します。
FAT 領域要件を表 2-2 に示し、NTFS 領域要件を表 2-3 に示します。

表 2-2 FAT のハード・ディスク領域要件

インストール・タイプ	システム・ドライブ	Oracle ホーム・ドライブ
Enterprise Edition	140MB	4.75GB
Standard Edition	140MB	4.5GB
Personal Edition	140MB	4.75GB
管理者	90MB	1.5GB
ランタイム	50MB	400MB
Oracle Management Server	100MB	1.5GB
Oracle Internet Directory	50MB	4GB

表 2-3 NTFS のハード・ディスク領域要件

インストール・タイプ	システム・ドライブ	Oracle ホーム・ドライブ
Enterprise Edition	140MB	2.85GB
Standard Edition	140MB	2.8GB
Personal Edition	140MB	2.75GB
管理者	90MB	790MB
ランタイム	50MB	150MB
Oracle Management Server	100MB	945MB
Oracle Internet Directory	50MB	2.3GB (データベースを含む)

Web ブラウザの要件

次の Web ブラウザは、ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager のコンソール、Enterprise Manager Repository Web Site および iSQL*Plus に対してサポートされています。

- Netscape Navigator 4.76 以上
- Microsoft Internet Explorer 5.0 以上
- Microsoft Internet Explorer 6.0 (Windows XP では必須)

関連項目：

- 2-7 ページの「[コンポーネントのサポート](#)」を参照してください。
- 各インストール・タイプでインストールされる個々のコンポーネントのリストは、[付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」](#)を参照してください。

コンポーネントのサポート

オラクル社では、様々なプラットフォームでのコンポーネントのサポート情報を提供し、互換性のあるクライアントとデータベースのバージョンをリストし、パッチと対処方法に関する情報を確認しています。

次の項では、Windows Terminal Server および Windows XP でサポートされていないコンポーネントおよび機能をリストします。

- [Windows Terminal Server](#)
- [Windows XP](#)

Windows Terminal Server

Oracle は、Windows 2000 Server、Windows 2000 Advanced Server および Windows 2000 Datacenter Server 上で Terminal Services をサポートします。

次の製品および機能は、Windows Terminal Server または Windows XP Remote Desktop ではサポートされていません。

- リモートの Terminal Services Client から、Terminal Server Service を実行している Windows 2000 Server または Windows NT 4.0 Terminal Server への Oracle9i データベース・コンポーネントのインストールは、サポートされていません。この方法で Oracle9i のインストールを試行すると、多数のデータベース構成ツールがハングします。たとえば、Oracle Database Upgrade Assistant、Database Configuration Assistant、Oracle Internet Directory Configuration Assistant および Oracle Workflow Configuration Assistant などがハングします。すべての構成ツールは Terminal Server コンソールから開始し、Terminal Services Client からは開始しないでください。
- Connection Manager

- Oracle Fail Safe
- Oracle HTTP Server
- Oracle Migration Workbench
- Oracle Names
- Oracle Object Link Manager
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server
- Server Management (SRVM)

関連資料：

- Terminal Server の詳細は、<http://www.microsoft.com/japan/> の Microsoft 社の Web サイトを参照してください。
- 最新の Terminal Server のサポート情報は、リリース・ノートを参照してください。

Windows XP

次のコンポーネントは、Windows XP ではサポートされません。

- DCE Adapter Support
- Entrust PKI Support
- Generic Connectivity
- Legato NetWorker
- Oracle Dynamic Services
- 次のコンポーネントを含む Oracle Enterprise Integration Gateways
 - Procedural Gateway for APPC
 - Procedural Gateway for IBM MQSeries
 - Transparent Gateway for IBM DRDA
 - Oracle Visual Workbench for Oracle Procedural Gateways for IBM MQSeries
- Oracle Enterprise Manager Paging Server
- Oracle Enterprise Manager Web Site

- Oracle Fail Safe

Windows XP は、Microsoft Cluster Server (MSCS) にあるクラスタリング・テクノロジーをサポートしていません。したがって、MSCS と統合される Oracle Fail Safe Server は、Windows XP ではサポートされません。ただし、Oracle Fail Safe Manager はサポートされます。
- Oracle Messaging Gateway
- 次のコンポーネントを含む Oracle Open System Gateways
 - Transparent Gateway for Sybase
 - Transparent Gateway for Teradata
 - Transparent Gateway for Microsoft SQL Server
- Cluster File System および Server Management を含む Oracle Real Application Clusters
- Oracle Real Application Clusters Guard
- Oracle Syndication Server
- NCIPHER Accelerator Support

個々のコンポーネントの必須要件

次のコンポーネントには、インストール前の必須要件があります。

- [Oracle Advanced Security](#)
- [Oracle Enterprise Manager](#)
- [Oracle Internet Directory](#)
- [Oracle Managed Files](#)
- [Oracle Real Application Clusters](#)
- [Microsoft 管理コンソールに対する Oracle Snap-In](#)
- [Oracle Transparent Gateways](#)
- [Oracle Workflow](#)
- [Active Directory との Oracle9i の統合](#)

Oracle Advanced Security

Oracle コンポーネントで認証サポートを使用するには、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たします。また、Oracle Advanced Security を SSL および PKI とともに使用するには、コンポーネント CD で提供されている Oracle Internet Directory などの LDAP ディレクトリが事前にインストールされている必要があります。

関連資料：『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』

Oracle Enterprise Manager

すべての Oracle Enterprise Manager 製品は同じリリースである必要があります。すべての Oracle Enterprise Manager ユーザーがソフトウェアを Oracle9i リリース 2 (9.2) にアップグレードするまでは、Oracle Management Server およびリポジトリをアップグレードしないでください。旧バージョンの Enterprise Manager は、新規リリースではサポートされません。

Oracle Enterprise Manager コンポーネントのインストールを開始する前に、次の要件を検討します。

- [Oracle Management Server の要件](#)
- [Oracle Enterprise Manager Web Site の要件](#)
- [Oracle Enterprise Manager Paging Server の要件](#)

関連資料： Enterprise Manager のシステム要件およびサポートの追加情報は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Management Server の要件

Oracle Management Server のインストールの前に、既存の Oracle Enterprise Manager **リポジトリ** を使用するか、新しい Oracle Enterprise Manager リポジトリを作成するかを決定します。

既存のリポジトリの使用 既存のリポジトリがリリース 2 (9.2) の場合は、この他のインストール前の手順は不要です。

既存のリポジトリがリリース 2.x の場合は、インストール後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を実行して、旧リポジトリを最新リリースにアップグレードします。

新しいリポジトリの作成 新しいリリース 2 (9.2) リポジトリを作成する場合は、新しいリポジトリを作成するデータベースをインストールして起動（またはアクセスできる既存の稼働中のデータベースを選択）します。オプションとして、Oracle Management Server がインストールされている Oracle ホームでデータベース・ソフトウェアが検出された場合は、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の開始時に、このアシスタントで新しいデータベース・インスタンスを作成してそのインスタンスにリポジトリを自動的に作成することを選択します。リリース 9.2、9.0.1 および 8.1.7 のデータベースは、リリース 2 (9.2) のリポジトリで認定されています。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は、Oracle9i データベースの「カスタム」インストール・タイプ、「Oracle Management Server」インストール・タイプおよび Oracle9i Management and Integration の「カスタム」インストール・タイプの構成フェーズ中に自動的に起動します。他のインストール・タイプではすべて、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で起動して Oracle Management Server を構成します。インストール後は、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を「スタート」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Enterprise Manager Configuration Assistant」から使用できます。

関連資料： リポジトリの作成、リリース 2 (9.2) のリポジトリの初期サイズおよびその拡張ガイドラインは、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』の「一般的なりポジトリのガイドライン」を参照してください。

Oracle Enterprise Manager Web Site の要件

Oracle Enterprise Manager Web Site をインストールして、Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager のコンソールおよびサポートされる管理アプリケーションを実行します。これにより管理者は、Reporting Web Site から、Enterprise Manager コンソールにより発行されたレポートにアクセスすることもできます。Oracle Enterprise Manager Web Site には、820MB のハード・ディスク空き領域が必要です。デフォルトでは、Oracle Enterprise Manager Web Site には、Web リスナーとして機能するように事前に構成された Oracle HTTP Server がバンドルされています。ただし、Web 対応の Oracle Enterprise Manager は、次の Web サーバーも追加サポートします（標準の Common Gateway Interface (CGI) を使用している Web サーバーは、Oracle Enterprise Manager リリース 2 (9.2) をサポートできません）。

- Windows NT および Windows 2000 上の Oracle Internet Application Server リリース 1.0 以上
- Windows NT 上の Microsoft Internet Information Server (IIS) リリース 4.0 以上および Windows 2000 上の IIS リリース 5.0 以上
- Windows NT、Windows 2000 および Windows XP 上の Oracle HTTP Server リリース 1.3.22 以上
- Windows NT および Windows 2000 上の Apache リリース 1.3.22 以上

関連資料：

- Oracle Enterprise Manager Web Site の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。
- システム要件については、該当する Web サーバーのドキュメントを参照してください。

Oracle Enterprise Manager Paging Server の要件

Oracle Enterprise Manager Paging Server を、モデムが搭載されたコンピュータにインストールします。モデムは、Oracle Enterprise Manager 管理者のポケットベルにイベントやジョブ・ステータスの変更を送信するために必要です。

Oracle Internet Directory

次の内容について説明します。

- [Oracle Internet Directory のアップグレード](#)
- [既存のデータベースへの Oracle Internet Directory のインストール](#)
- [Oracle Internet Directory リリース 9.2 のインストール](#)
- [Oracle Internet Directory のダウングレード](#)

Oracle Internet Directory のアップグレード

Oracle Internet Directory のアップグレードは、Oracle Internet Directory リリース 2.1.1.x および 3.0.1.x からサポートされています。Oracle Internet Directory のアップグレードを実行する Oracle ホームに完全な Enterprise Edition もインストールされている場合は、Enterprise Edition をアップグレードする前に Oracle Internet Directory のアップグレードを実行する必要があります。

一度に 1 つのノードをアップグレードする場合、複数ノード・レプリケーション環境での Oracle Internet Directory のアップグレード中に、ネットワーク停止時間は発生しません。あるノードのアップグレードの実行中でも、他のノードは使用できます。

既存のデータベースへの Oracle Internet Directory のインストール

Oracle9i リリース 2 (9.2) が、Oracle Internet Directory リリース 9.2 をインストールしようとしているコンピュータ上の同じ Oracle ホームにインストールされている場合は、データベースとリスナーの両方が稼働していることを確認します。

Oracle Internet Directory リリース 9.2 のインストール

Oracle Internet Directory リリース 9.2 をインストールする場合は、最上位の Oracle9i Management and Integration コンポーネントから「Oracle Internet Directory」インストール・タイプを選択します。このインストール・タイプでは、Oracle Internet Directory リリース 9.2 インストールの一環として基礎となる適切な Oracle9i データベースが作成されます。

Oracle Internet Directory のダウングレード

Oracle Internet Directory リリース 9.2 を 3.0.1.x または 2.1.1.x にダウングレードすることはできません。

関連資料：

- 4-21 ページの「[Oracle Internet Directory のインストール](#)」
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

Oracle Managed Files

Oracle Managed Files を使用可能にするには構成手順が必要です。

関連資料：『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「Oracle Managed Files の使用」

Oracle Real Application Clusters

ハードウェア要件、ソフトウェア要件およびインストール前の要件は、[付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」](#)を参照してください。これらのタスクは、Oracle Universal Installer を使用する前に完了する必要があります。

Oracle Real Application Clusters のアップグレード

インストールの前に、すべてのアップグレードの問題を検討します。

関連資料：

- 2-16 ページの「[Oracle Real Application Clusters のアップグレード要件](#)」
- 『Oracle9i データベース移行ガイド』

Microsoft 管理コンソールに対する Oracle Snap-In

Oracle9i には、Microsoft 管理コンソール（MMC）用のスナップインがいくつか付属しています。MMC は、Windows 2000 に標準で組み込まれています。Windows NT では、Windows NT 4.0 Option Pack が必要です。Windows NT Option Pack をインストールした後で、インストール済の Service Pack を再適用してください。

Oracle Snap-In をインストールする前に、Internet Explorer バージョン 5.0（IE5.0）以上をインストールします。IE5.0 をインストールする前に Oracle Snap-In をインストールした場合は、Oracle Snap-In を再インストールします。

この依存性を持つ Oracle Snap-In コンポーネントは次のとおりです。

- Oracle Administration Assistant for Windows NT
- Oracle for Windows NT Performance Monitor

注意： Oracle Administration Assistant for Windows NT をインストールすると、各 Oracle Snap-In コンポーネントが自動的にインストールされます。

次の Web サイトから、MMC アドオンをダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/>

Oracle Transparent Gateways

ハードウェア要件、ソフトウェア要件およびインストール前の要件は、[付録 C「Oracle Transparent Gateways」](#)を参照してください。

Oracle Workflow

必要なハードウェアおよびソフトウェアが構成されていることを確認します。

関連資料：

- 『Oracle Workflow Server インストレーション・ノート』
- 『Oracle Workflow Client インストレーション・ノート』

Active Directory との Oracle9i の統合

正常に統合するためのインストール前の要件を実行する必要があります。

関連資料：『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「Active Directory での Oracle9i ディレクトリ・サーバー機能の使用方法」

データベースのアップグレード要件

オラクル社では、Oracle9i リリース 2 (9.2) を新しい Oracle ホーム・ディレクトリにインストールすることをお勧めします。以前にインストールした Oracle8i などが含まれている Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle9i リリース 2 (9.2) をインストールする必要がある場合は、新規インストールを開始する前に、Oracle Universal Installer を使用してこれらのコンポーネントを削除します。

既存のデータベースのアップグレードを決定する前に、『Oracle9i データベース移行ガイド』を参照してください。Windows でのアップグレード手順は、『Oracle9i データベース移行ガイド』に記載されています。ただし、ここでは『Oracle9i データベース移行ガイド』の手順を実行する前に理解しておくべき Windows 固有の問題について説明します。

ここでは、特定のアップグレード要件について説明します。

- [アプリケーションのリンクおよび再リンクの方針](#)
- [リリース 7.3.4 および 8.0.6 のアップグレード](#)
- [データベースのダウングレード](#)
- [Oracle Real Application Clusters のアップグレード要件](#)

アプリケーションのリンクおよび再リンクの方針

クライアント・ソフトウェアをアップグレードして、現在のデータベースと一致させることをお勧めします。たとえば、Oracle データベースをリリース 2 (9.2) にアップグレードした場合、クライアント・ソフトウェアも同様にリリース 2 (9.2) にアップグレードすることをお勧めします。データベースおよびクライアントのソフトウェアのリリース番号を同じにしておくと、アプリケーションの安定性を最大限に確保できます。また、Oracle クライアントの最新ソフトウェアには、以前のリリースでは使用できなかった追加機能およびパフォーマンス強化が提供されています。

関連資料： クライアント・ソフトウェアの機能リリース・アップグレードを実行するときのアプリケーションのリンクおよび再リンクに関するルールは、『Oracle9i データベース移行ガイド』を参照してください。

リリース 7.3.4 および 8.0.6 のアップグレード

Migration Utility または Oracle Database Upgrade Assistant を使用して最新リリースにアップグレードするには、Oracle7 データベースがリリース 7.3.4 以上、Oracle8 データベースがリリース 8.0.6 以上である必要があります。前のリリースのデータベースに付属のドキュメントを参照し、リリース 7.3.4 または 8.0.6 へのアップグレード方法を確認してください。

Migration Utility と Oracle のコマンドライン・ツール

Migration Utility を使用して Oracle データベースをアップグレードする場合、『Oracle9i データベース移行ガイド』では Oracle ツールのコマンド・プロンプトで情報を入力するよう指示されています。使用するコマンド・ツール (SQL*DBA、Server Manager または SQL*Plus) は、アップグレード前のデータベースのリリースに依存します。表 2-4 に、使用するツールおよびその起動方法を示します。

表 2-4 Oracle コマンドライン・ツール

アップグレード前の Oracle のリリース	使用するユーティリティ	入力するコマンド
7.3.4	Server Manager	C:¥> SVRMGR23
8.0.6	Server Manager	C:¥> SVRMGR30
8.1.7	Server Manager または SQL*Plus	C:¥> SVRMGRL または C:¥> SQLPLUS
9.0.1	SQL*Plus	C:¥> SQLPLUS

Migration Utility を使用して Oracle データベースをアップグレードする場合、『Oracle9i データベース移行ガイド』ではコマンド・プロンプトでの ORADIM ユーティリティの使用も指示されます。ORADIM ユーティリティは、Windows NT 上でデータベース・インスタンスを作成、開始、停止および変更します。表 2-5 に、アップグレード前のデータベースのリリースに依存する ORADIM ユーティリティの起動方法を説明します。

表 2-5 ORADIM バージョン

アップグレード前の Oracle のリリース	使用するユーティリティ	入力するコマンド
7.3.4	ORADIM73	C:¥> ORADIM73 OPTIONS
8.0.6	ORADIM80	C:¥> ORADIM80 OPTIONS
8.1.7	ORADIM	C:¥> ORADIM OPTIONS
9.0.1	ORADIM	C:¥> ORADIM OPTIONS

関連資料： ORADIM ユーティリティの使用方法的詳細は、『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「インストール後のデータベース作成」を参照してください。

必要な Oracle7 Server SQL*Net パッチのリリース

Oracle7 Server リリース 7.3.4 から最新リリースにアップグレードする場合、Oracle Database Upgrade Assistant または Migration Utility でアップグレードする前に、7.3.4 の Oracle ホームに適切な SQL*Net パッチをインストールします。適切な SQL*Net パッチをインストールしていない場合、アップグレードは失敗します。

リリース 7.3.4 からアップグレードする場合は、最終パッチセット 7.3.4.5 を使用します。

データベースのダウングレード

詳細は、『Oracle9i データベース移行ガイド』の第 7 章を参照してください。

Oracle Real Application Clusters のアップグレード要件

Database Upgrade Assistant を使用して Oracle Real Application Clusters をアップグレードするには、各クラスタ・ノードでアップグレードするデータベース・インスタンスを開始します。

関連資料：

- 『Oracle9i データベース移行ガイド』
- 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』

データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択

この章では、インストール中に使用できる Oracle9i データベースの作成および Oracle Net Services の構成方法を説明します。少なくとも、作成とネットワーキングの方法について理解してから、インストールを実行する必要があります。

この章の項目は次のとおりです。

- [データベースの作成およびネットワークの構成方法](#)
- [データベース環境のタイプ](#)
- [データベースの作成方法の選択](#)
- [ネットワークの構成](#)

関連資料：

- この章で使用される用語の定義は、「[用語集](#)」を参照してください。
- この章のネットワーキング概念の詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照してください。

データベースの作成およびネットワークの構成方法

Oracle Universal Installer は、インストール中に Oracle9i データベースの作成方法および Oracle Net Services ネットワーク環境の構成方法をいくつか提供しています。

インストール中に選択する方法は、次の条件に依存します。

- データベース作成とネットワーク構成に関するユーザー自身の知識
- データベースおよびネットワーク環境の要件

インストールを開始する前に、これらの方法を理解する必要があります。この章の情報に目を通すことで、必要に応じた最善のデータベースおよびネットワーク環境を最初から作成、構成することが可能です。

Oracle9i および Oracle Net Services コンポーネントは、いくつかのインストール・タイプでインストールされます。表 3-1 のインストール・タイプで、インストール中にデータベース作成およびネットワーク構成に関して入力が必要となるかについて確認してください。自動的に作成される情報および入力が必要な情報に関する詳細は、この章の後述の項を参照してください。

表 3-1 各インストール・タイプに必要なユーザー入力

インストール・タイプ	データベースの作成に必要なユーザー入力量	Oracle Net Services の構成に必要なユーザー入力量
Oracle9i Database		
■ Enterprise Edition	最小	なし
■ Standard Edition	最小	なし
■ Personal Edition	最小	なし
■ カスタムで次を選択：	-	-
Oracle Net Services	該当せず	なし ² または多量 ²
または Oracle9i	多量 ¹	該当せず
Oracle9i Client³		
■ 管理者	該当せず	最小
■ ランタイム	該当せず	最小
Oracle9i Management and Integration		
■ Oracle Management Server	該当せず	最小
■ Oracle Internet Directory	最小	最小
■ カスタムで次を選択：		
Oracle9i	多量 ¹	該当せず
または Oracle Net Services	該当せず	最小または多量

¹ 「カスタム」インストール・タイプで選択すると、ユーザー入力を多量に必要とする完全カスタム作成から最小限のユーザー入力を必要とする作成まで、複数のデータベース作成選択肢が提供されます。詳細は、3-5 ページの「[データベースの作成方法の選択](#)」を参照してください。

² 「カスタム」インストール・タイプで選択すると、ユーザー入力を必要としない構成を作成するか、ユーザー入力を多量に必要とする構成を作成するかを尋ねられます。詳細は、3-8 ページの「[ネットワークの構成](#)」を参照してください。

³ Oracle9i データベースは、最上位の Oracle9i Client コンポーネントからはインストールできません。

注意： 表 3-1 で説明した「Oracle Internet Directory」インストール・タイプを選択すると、Oracle9i データベースが同じ Oracle ホームに現在インストールされていない場合は、データベースが自動的にインストールされます。このデータベースは、Oracle Internet Directory 情報を格納する目的のみに使用してください。

データベース環境のタイプ

Oracle Universal Installer では、表 3-2 に示す環境のいずれかで稼働する Oracle9i データベースを作成できます。Oracle9i データベースに適した環境を確認してください。

表 3-2 データベース構成タイプ

環境	説明
汎用目的	ユーザーは、単純なトランザクションから複雑な問合せまで、様々なデータベース・タスクを実行します。このデータベース環境は、汎用的な用途に選択します。
トランザクション処理	ユーザーは、多数の同時トランザクションを実行します。各トランザクションは、少量のデータを処理する比較的単純な操作です。トランザクションは、データベース表のデータの読み込み、書き込みおよび削除から構成されています。 インターネット・コマース・サイトでよく見られるような請求データベースは、このデータベース構成の最も一般的な例です。これらのデータベースは、オンライン・トランザクション処理 (OLTP) データベースとも呼ばれます。
データ・ウェアハウス	ユーザーは、大量のデータを処理する複雑な問合せを大量に実行します。応答時間、正確さおよび可用性が重要な問題となります。 これらの問合せ（通常は読取り専用）は、数レコードの単純なフェッチから、多数の異なる表の数千レコードをソートする複雑な問合せにまで及びます。データ・ウェアハウス環境は、意思決定支援システム (DSS) 環境としても知られています。
カスタマイズ	特殊な要件を満たす、カスタマイズされたデータベース構成または Oracle コンポーネントのカスタム・インストールを作成できます。 この構成方法は、詳細なコンポーネントおよびデータベース環境情報を提供する用意ができている場合のみ選択します。このオプションを選択すると、事前構成データベースを選択する場合よりもインストール・セッションの時間が長くなります。
ソフトウェアのみ	データベースを作成せずに Oracle コンポーネントをインストールできます。 この構成方法は、データベースの作成時に詳細なデータベース構成情報を提供する用意ができている場合のみ選択します。オラクル社では、データベース構成のテンプレートとして機能するシード・データベースを少なくとも 1 つはインストールすることをお勧めします。

関連資料： データベースの選択に影響される初期化ファイル・パラメータの詳細は、「Database Configuration Assistant」オンライン・ヘルプを参照してください。

データベースの作成方法の選択

Database Configuration Assistant は、[トランザクション処理](#)、[データ・ウェアハウス](#)または[汎用目的](#)の環境用に Oracle9i データベースを作成できるツールです。Database Configuration Assistant は、インストール手順の一環として Oracle9i データベースを作成することを選択した場合に、Oracle Universal Installer により自動的に起動されます。インストール後にスタンドアロン・ツールとして手動で実行することもできます。

Oracle Universal Installer を実行し、「使用可能な製品」ウィンドウで「Oracle9i Database」を選択すると、「インストール・タイプ」ウィンドウに 4 種類のインストール・タイプが表示されます。各インストール・タイプで、[表 3-2](#) に示すデータベース構成タイプを作成できます。

関連資料：

- スタンドアロン・モードでの Database Configuration Assistant の実行の詳細は、『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「インストール後のデータベース作成」を参照してください。
- スタンドアロン・モードでのこのツールの起動手順は、『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「データベース・ツールの概要」を参照してください。

「Enterprise Edition」、「Standard Edition」、「Personal Edition」および「カスタム」インストール・タイプで作成されるデータベース構成タイプ（「汎用目的」、「トランザクション処理」、「データ・ウェアハウス」、「カスタマイズ」および「ソフトウェアのみ」と、必要なユーザー入力量を、[表 3-3](#)、[表 3-4](#) および [表 3-5](#) に示します。これらの選択肢を確認して、データベース要件やデータベース作成知識に最も適したデータベースを特定してください。

表 3-3 データベース構成 - 「Enterprise Edition」 および 「Personal Edition」

実行手順	結果
「Enterprise Edition」または「Personal Edition」インストール・タイプを選択します。	<p>インストールの最後に Database Configuration Assistant が自動的に起動し、選択したデータベース構成タイプに従ってデータベースを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ デフォルトの初期化パラメータ■ Oracle JVM や Oracle Spatial コンポーネントなどの様々なデータベース・オプションの自動的なインストールおよび構成¹■ Advanced Replication 機能■ 専用サーバー・モードに構成されたデータベース²■ NOARCHIVELOG に設定されたアーカイブ・モード <p>Database Configuration Assistant の起動前に入力を要求されるグローバル・データベース名と SID 以外は、ユーザーが入力する必要はありません。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。</p> <p>注意： Personal Edition では、Oracle Real Application Clusters は提供されません。</p>

¹ Database Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer でインストールされたコンポーネントのみを構成します。
² 専用サーバー・モードおよび共有サーバー・モードの説明は、『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「インストール後のデータベース作成」を参照してください。

注意：「Enterprise Edition」インストール・タイプで作成される Oracle9i データベースは、「Oracle Internet Directory」インストール・タイプを選択し、指定した Oracle ホームに Oracle9i データベースが現在インストールされていない場合にも作成されます。

表 3-4 データベース構成 - 「Standard Edition」

実行手順	結果
「Standard Edition」 インストール・タイプを選択します。	インストールの最後に Database Configuration Assistant が自動的に起動し、選択したデータベース構成タイプに従ってデータベースを構成します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。 「Standard Edition」 インストール・タイプの一部でないコンポーネントのリストは、 付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」 を参照してください。

表 3-5 データベース構成 - 「カスタム」

実行手順	結果
<p>1. 「カスタム」 インストール・タイプを選択します。</p> <p>2. 「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで Oracle9i および追加の製品を選択します。</p> <p>3. 初期データベースを作成するかどうかを尋ねられたら「はい」を選択します。</p> <p>Database Configuration Assistant により、データベース環境を選択するよう要求されます。</p> <p>トランザクション処理</p> <p>データ・ウェアハウス</p> <p>汎用目的</p>	<p>Database Configuration Assistant は、選択した環境（「トランザクション処理」、「データ・ウェアハウス」または「汎用目的」）および構成モード（専用サーバーまたは共有サーバー）に即し、カスタマイズされたデータベースの作成手順を示します。Oracle JVM、Oracle Spatial、Advanced Replication などのデータベース・オプション（インストールされている場合）が自動的に構成されます。このオプションは、次に示す設定のカスタマイズなどの高度なデータベース作成手順の経験がある場合にのみ、選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ データ、制御および UNDO ログ・ファイル設定■ 表領域およびエクステンツのサイズ■ データベース・メモリー・パラメータ■ アーカイブのモード、形式および宛先■ トレース・ファイルの宛先■ キャラクタ・セットの値 <p>データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。</p>

ネットワークの構成

Oracle Net Configuration Assistant は、Oracle クライアントが Oracle9i データベースに接続できるような Oracle Net Services 環境の構成を可能にするツールです。Oracle Net Configuration Assistant は、ほとんどのインストール・タイプで Oracle Universal Installer から自動的に起動され、スタンドアロン・ツールとして手動でも起動できます。

選択したインストール・タイプに応じて、Oracle Net Configuration Assistant は、次のいずれかの方法でネットワークを構成します。

- 最小限のユーザー入力で標準のデータベース接続用にネットワークを自動的に構成
- 多量のユーザー入力を要求して、カスタマイズされたネットワークを作成

構成は、デフォルトの %ORACLE_HOME%\network\admin ディレクトリにあるネットワーク構成ファイルを作成、変更します。

関連資料：

- スタンドアロン・モードでの Oracle Net Configuration Assistant の実行については、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』または「Oracle Net Configuration Assistant」オンライン・ヘルプを参照してください。
- スタンドアロン・モードでの Oracle Net Configuration Assistant の起動手順は、『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「データベース・ツールの概要」を参照してください。

サーバー・ネットワークの構成

次の表に、サーバーのインストール・タイプで作成されるネットワーク構成の種類と、必要とされるユーザー入力を示します。表 3-6 および表 3-7 を確認して、要件やネットワーク構成の知識に最も適したネットワーク構成を特定してください。

表 3-6 Net Services 構成 - 「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」

実行手順	結果
1. 「Oracle9i Database」を選択します。	Oracle Net Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、Oracle Net Services 環境を自動的に作成します。
2. 「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」インストール・タイプを選択します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ listener.ora ファイル <p>Oracle9i データベース用（オペレーティング・システムの推奨プロトコル、通常はポート 1521 上の TCP/IP を使用）と外部プロシージャ用（IPC プロトコルを使用）の両方のプロトコル・アドレスを持つ LISTENER という名前のリスナーを構成します。</p> <p>外部プロシージャ用のサービス情報を構成します。</p> ■ sqlnet.ora ファイル <p>オペレーティング・システム認証による接続（OPSS）を受け入れるようデータベースを構成します。詳細は、『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「Windows のシステム固有の認証の概要」を参照してください。</p> <p>サーバーのネットワーク・ドメインをデフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれている TCP/IP ドメイン）として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。</p> <p>サーバーが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。</p> ■ tnsnames.ora ファイル <p>外部プロシージャ接続に使用するネット・サービス名のファイルを作成します。</p> <p>注意：「Enterprise Edition」、「Standard Edition」および「Personal Edition」インストール・タイプでは、LDAP 準拠のディレクトリ・サーバー構成は実行できません。ディレクトリ・サーバーの構成は、「カスタム」インストール・タイプでしか実行できません。</p> <p>Oracle9i データベースの作成が正常に実行された場合、Database Configuration Assistant は追加の Oracle Net Services 情報を次のファイルに自動的に構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ listener.ora ファイル <p>Oracle9i データベース用のサービス情報を構成します。</p> ■ tnsnames.ora <p>データベースが自身に接続するためのネット・サービス名を構成します。</p> <p>注意： Database Configuration Assistant は、Oracle Real Application Clusters インストール用の追加情報を構成します。詳細は、『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。</p>

表 3-7 Net Services 構成 - 「カスタム」

選択するインストール・タイプ	結果
1. 「Oracle9i Database」を選択します。	Oracle Net Configuration Assistant から、まず、Oracle9i データベースへの接続用の接続記述子に対するネーミング・メソッドの選択を要求されます。
2. 「カスタム」を選択します。	<ul style="list-style-type: none">ディレクトリ・サーバーの使用構成を入力します。ディレクトリ・サーバーがある場合はそのタイプと場所を入力し、この Oracle ホームに対してデフォルトで使用する Oracle コンテキスト を指定する必要があります。この情報は、Oracle ホームのディレクトリ使用構成を設定していない場合に入力を要求されます。データベース接続に使用するリスナーを作成します。ローカル・データベースに接続する際に使用するネーミング・メソッドを選択します。デフォルトでは、ローカル・ネーミング・メソッドが選択されます。ほとんどの状況では、オラクル社はこのデフォルトを推奨します。ディレクトリ・ネーミング（ディレクトリ使用構成が完了している場合）、ローカル・ネーミング、Oracle Names、ホスト・ネーミング、外部ネーミングのいずれかのネーミング・メソッドの使用を選択するオプションもあります。
3. 「Oracle Net Services」を選択します。	<p>続いて Oracle Net Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、Oracle Net Services 環境を自動的に作成します。</p> <ul style="list-style-type: none">listener.ora ファイル 選択した名前とプロトコル・アドレスを持つリスナーを構成します。さらに、外部プロシージャ用のプロトコル・アドレスおよび静的サービス情報が構成されます。sqlnet.ora ファイル オペレーティング・システム認証による接続 (OPSS) を受け入れるようデータベースを構成します。詳細は、『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「Windows のシステム固有の認証の概要」を参照してください。 サーバーのネットワーク・ドメインをデフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれている TCP/IP ドメイン）として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。 サーバーが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。tnsnames.ora ファイル 外部プロシージャ接続用のネット・サービス名エントリを作成します。ldap.ora ファイル ディレクトリ・サーバーへのアクセスを構成します。

表 3-7 Net Services 構成 - 「カスタム」(続き)

選択するインストール・タイプ	結果
	<p>Oracle9i データベースの作成が正常に実行された場合、Database Configuration Assistant は追加の Oracle Net Services 情報を次のファイルに自動的に構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ listener.ora ファイル Oracle9i データベース用のサービス情報を構成します。 ■ tnsnames.ora データベースが自身に接続するためのネット・サービス名を構成します。

クライアント・ネットワークの構成

次の表に、クライアントのインストール・タイプで作成されるネットワーク構成の種類と、必要とされるユーザー入力を示します。表 3-8 および表 3-9 を確認して、要件やネットワーク構成の知識に最も適したネットワーク構成を特定してください。

表 3-8 Net Services 構成 - 「管理者」または「ランタイム」

実行手順	結果
1. 「Oracle9i Client」を選択します。	<p>Oracle Net Configuration Assistant は、ディレクトリ・サーバーを使用するかどうかの選択に基づいて、ディレクトリ・ネーミング・メソッドまたはローカル・ネーミング・メソッドを構成するよう要求します。</p> <p>ディレクトリ・サーバーの使用を選択する場合は、Oracle Net Configuration Assistant により、ディレクトリ・サーバーの使用構成を入力するよう要求されます。ディレクトリ・サーバーの使用を選択しない場合は、Oracle Net Configuration Assistant により、tnsnames.ora ファイルにネット・サービス名を構成するよう要求されます。</p> <p>続いて Oracle Net Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、クライアント環境を自動的に作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ sqlnet.ora ファイル クライアントのドメインをデフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれている TCP/IP ドメイン）として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。 クライアントが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。 ■ tnsnames.ora ファイル ローカル・ネーミング・メソッドが選択された場合は、データベースに接続するためのネット・サービス名を構成します。 ■ ldap.ora ファイル ディレクトリ・サーバーへのアクセスを構成します。
2. 「管理者」または「ランタイム」を選択します。	

表 3-9 Net Services 構成 - 「カスタム」

実行手順	結果
1. 「Oracle9i Client」を選択します。	<p>Oracle Net Configuration Assistant により、名前を Oracle9i データベースへの接続用の接続記述子に解決するネーミング・メソッドの構成を要求されます。Oracle Net Configuration Assistant には、1 つ以上のネーミング・メソッド（ディレクトリ・ネーミング、ローカル・ネーミング、Oracle Names、ホスト・ネーミング、外部ネーミング）を選択するオプションがあります。また、「標準構成の実行」オプションを使用することもできます。</p> <p>「標準構成の実行」オプションは、既存のディレクトリ使用構成に基づいて、ローカル・ネーミング・メソッドまたはディレクトリ・ネーミング・メソッドを自動的に選択します。</p> <p>選択内容に応じて、追加情報を入力するよう要求されます。ローカル・ネーミング・メソッドの場合は、使用するネット・サービス名、データベース・サービス名、ネットワーク・プロトコルの入力要求されます。デフォルトでは、データベース・サービス名はグローバル・データベース名です。</p> <p>続いて Oracle Net Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、Oracle Net クライアント環境を自動的に作成します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ sqlnet.ora ファイル <p>オペレーティング・システム認証による接続（OPSS）を要求するようクライアントを構成します。詳細は、『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「Windows のシステム固有の認証の概要」を参照してください。</p> <p>クライアントのドメインをデフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれている TCP/IP ドメイン）として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。</p> <p>クライアントが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ tnsnames.ora ファイル <p>ローカル・ネーミング・メソッドが選択された場合は、データベースに接続するためのネット・サービス名を構成します。</p>
2. 「カスタム」を選択します。	
3. 「Oracle Net Services」を選択します。	

Oracle コンポーネントのインストール

この章では、コンポーネント CD から Oracle コンポーネントをインストールする方法を説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [Windows と UNIX でのインストールの相違](#)
- [最小メモリー要件を満たすインストール](#)
- [Oracle9i をインストールする前に](#)
- [Oracle9i のインストールの開始](#)
- [インストール・タイプの選択](#)
- [Oracle のコンポーネントとサービスの削除](#)

関連資料：

- 1-2 ページの「[Optimal Flexible Architecture の使用方法](#)」を参照してください。
- 1-5 ページの「[Oracle Universal Installer の制限事項](#)」を参照してください。
- レスポンス・ファイルの使用や、様々な言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用などの詳細は、[付録 D 「拡張インストール」](#)を参照してください。

Windows と UNIX でのインストールの相違

UNIX 環境で Oracle コンポーネントをインストールした経験のあるデータベース管理者は、UNIX で必要な手動セットアップ・タスクの多くが、Windows では必要ないことに注意する必要があります。表 4-1 に、UNIX と Windows でのインストールの主な相違点を示します。

表 4-1 UNIX と Windows でのインストールの主な相違点

対象	UNIX プラットフォーム	Windows プラットフォーム
PATH、ORACLE_BASE、ORACLE_HOME、ORACLE_SID などの環境変数	手動による設定が必要	Oracle Universal Installer によりレジストリに設定
データベース管理者の DBA アカウント	手動による作成が必要	Oracle Universal Installer により作成
Oracle Universal Installer を実行するためのアカウント	手動による作成が必要	不要
Oracle コンポーネントのインストールおよびアップグレード専用のアカウント	手動による作成が必要	不要

関連資料：『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「Oracle9i の Windows と UNIX での違い」

最小メモリー要件を満たすインストール

128MB の RAM および 200MB の仮想メモリーを搭載したコンピュータへの Oracle9i のインストールには、次の制限があります。

- 128MB のメモリーを搭載したコンピュータは、Oracle Universal Installer インストール・セッション中に Oracle Database Upgrade Assistant、Database Configuration Assistant または Oracle Net Services Configuration Assistant を実行できません。
- コンピュータで実行しているアプリケーションの数によっては、仮想メモリーが不足した場合に、ページング・ファイル・サイズを増やすかシステム・グローバル領域 (SGA) のサイズを減らすことが必要な場合があります。一時ファイルとページング・ファイルの両方が同一物理ドライブに格納されている場合は、一方の領域要件によりもう一方のサイズが制限される場合があります。システムに限られた空き領域しかない場合は、最初に Oracle9i ソフトウェアをインストールします。インストールの終了後、Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成します。

128MB 以上のメモリー要件および 200MB 以上の仮想メモリー要件を最小で満たすコンピュータ・システムでは、次の操作を実行します。

■ **Oracle9i Database のインストールの場合：**

1. Oracle9i Database のインストール時に、「[ソフトウェアのみ](#)」データベース構成方法を選択します。
2. インストール後に、Oracle Net Configuration Assistant を実行します。「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Net Configuration Assistant」を選択します。
3. インストール後に、ニーズに適した構成アシスタントを実行します。
 - － 新規データベースを作成するには、「スタート」メニューから Database Configuration Assistant を実行します。「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Database Configuration Assistant」を選択します。
 - － 既存のデータベースをアップグレードするには、「スタート」メニューから Oracle Database Upgrade Assistant を実行します。「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Database Upgrade Assistant」を選択します。

■ **Oracle9i Management and Integration のインストールの場合：**

「構成ツール」ウィンドウで、次の構成アシスタントを選択し、「中止」を選択します。

- OiD Configuration Assistant
- Oracle Workflow Configuration Assistant

関連資料：

- [第 3 章「データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択](#)」を参照してください。
- 特定のインストール手順は、4-5 ページの「[Oracle9i のインストールの開始](#)」を参照してください。
- インストール後の Oracle Internet Directory の起動の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle9i をインストールする前に

Oracle コンポーネントをインストールする前に、次のタスクを実行します。

1. 第2章「インストール前の要件」に示されている、該当のシステムおよびコンポーネント要件を確認し、満たしてから、インストールを開始してください。システムが最小メモリ要件のみ満たしている場合は、4-2 ページの「最小メモリ要件を満たすインストール」を参照してください。
2. Oracle Real Application Clusters をインストールする場合は、Oracle Universal Installer を実行する前に、付録 B「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」を完了する必要があります。
3. 「Administrators」グループのメンバーとして、Oracle コンポーネントをインストールするコンピュータにログオンします。プライマリ・ドメイン・コントローラ（PDC）またはバックアップ・ドメイン・コントローラ（BDC）上にインストールする場合は、「Domain Admins」グループのメンバーとしてログオンします。
4. 環境変数 ORACLE_HOME が存在する場合は、これを削除します。環境変数の削除の詳細は、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

注意： 環境変数 ORACLE_HOME は、レジストリに自動的に設定されます。この変数を手動で設定した場合は、インストールを実行できません。

5. アップグレードするデータベースをバックアップします。2-14 ページの「データベースのアップグレード要件」を確認します。
6. 既存の Oracle9i リリース 1 (9.0.1) またはリリース 2 (9.2) の Oracle ホームにインストールする場合は、すべての Oracle サービスを停止します。
 - Windows NT では、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。
 - Windows 2000 では、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - Windows XP では、「スタート」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - a. 「開始」の状態の Oracle サービス（「Ora」で始まる名前）がある場合は、そのサービスを選択します。

- b. Windows NT では「停止」を選択し、Windows 2000 では「操作」→「停止」を選択します。

特に、Oracle リスナー・サービスが停止していることを確認してください。このサービスの名前は、リリース 8.1 のデータベースでは OracleHOME_NAMETNSListener、リリース 8.0 のデータベースでは OracleTNSListener80、リリース 7.3 のデータベースでは OracleTNSListener です。

- c. 「閉じる」を選択して、「サービス」ウィンドウを閉じます。

- 7. 「[Oracle9i のインストールの開始](#)」の項に進みます。

Oracle9i のインストールの開始

(リリース 7.x やリリース 8.0.x とともに出荷された) 旧 Oracle Installer を使用した、Oracle9i リリース 2 (9.2) の Oracle ホーム・ディレクトリへのコンポーネントのインストールは、サポートされません。同様に、リリース 2 (9.2) のコンポーネントは、リリース 7.x、8.0.x または 8.1.x の Oracle ホームにインストールできません。

関連項目：

- 1-2 ページの「[インストールの計画](#)」
- 付録 B「[Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク](#)」
- 付録 D「[拡張インストール](#)」

Oracle9i コンポーネントをインストールするには、次の手順に従います。

ハード・ディスク・ドライブから Oracle コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. ハード・ディスクの同じレベルに、Disk1、Disk2 および Disk3 という名前の 3 つのディレクトリを作成します。これらの名前を必ず使用してください。次に例を示します。

```
d:\¥install¥Disk1
```

```
d:\¥install¥Disk2
```

```
d:\¥install¥Disk3
```

2. 各コンポーネント CD の内容を該当するディレクトリにコピーします。
3. Disk1¥setup.exe を実行します。
「ようこそ」ウィンドウが表示されます。
4. 次の項の手順 [3](#) に進みます。

CD から Oracle コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. 最初のコンポーネント CD を挿入します。

「Autorun」ウィンドウが自動的に表示されます。「Autorun」ウィンドウが表示されない場合は、次の操作を行います。

- a. 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 次のコマンドを入力します。

< ドライブ文字 >:¥autorun¥autorun.exe

「Autorun」ウィンドウが表示されます。

2. 「Autorun」ウィンドウから「インストールを開始」を選択します。

「ようこそ」ウィンドウが表示されます。

3. 「次へ」を選択します。

- Oracle Universal Installer がクラスタ上で実行されている場合は、「クラスタ・ノードの選択」ウィンドウが表示されます。Oracle ソフトウェアをインストールするノードを選択します。ローカル・ノードは常にデフォルトで選択されます。
 - 「ファイルの場所」ウィンドウが表示されます。「ソース」フィールド内のディレクトリ・パスは変更しないでください。このパスは、インストール・ファイルの場所を示します。
4. 「インストール先」フィールドに、Oracle コンポーネントをインストールする Oracle ホーム名とディレクトリ・パスを入力します。

注意： Oracle9i リリース 2 (9.2) ソフトウェアは、Oracle8i 以下のソフトウェアが格納されている既存の Oracle ホームにはインストールしないでください。

Oracle Real Application Clusters をインストールする場合は、クラスタ内のすべてのノードが同じ Oracle ホーム名を持つ必要があります。

Oracle ホーム名の長さは最大 16 文字で、英数字とアンダースコアのみ使用できます。空白を含めることはできません。Oracle Universal Installer では、数字で始まる文字を「名前」フィールドに入力できません。デフォルトのディレクトリ・パスは、< 空き領域が最大のドライブ >:¥oracle¥ora92 です。

注意：すでに Oracle9i リリース 2 (9.2) のクライアント・ソフトウェアが格納されている Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle9i をインストールする場合、リスナーは作成されません。リスナーを作成するには、Oracle Net Configuration Assistant をインストールして実行します。管理者クライアントを Oracle9i より前にインストールした場合は、Oracle Net Configuration Assistant がすでにインストールされています。

5. 「次へ」を選択します。
- 「使用可能な製品」ウィンドウが表示されます。「インストール・タイプの選択」の項に進みます。

インストール・タイプの選択

ニーズを最もよく満たす最上位の Oracle コンポーネントおよびインストール・タイプを表 4-2 から選択します。「次へ」を選択します。選択に基づいて、次の項のいずれかに進みます。

表 4-2 最上位コンポーネント

最上位コンポーネント	含まれるインストール・タイプ
Oracle9i Database	<ul style="list-style-type: none">「Enterprise Edition」、「Standard Edition」 または 「Personal Edition」 のインストールOracle9i Database の「カスタム」インストール
Oracle9i Client	<ul style="list-style-type: none">Oracle9i Client の「管理者」または「ランタイム」インストールOracle9i Client の「カスタム」インストール
Oracle9i Management and Integration	<ul style="list-style-type: none">Oracle Management Server のインストールOracle Internet Directory のインストールOracle9i Management and Integration の「カスタム」インストール

関連項目：

- 1-2 ページの「[インストールの計画](#)」を参照してください。
- 選択するインストール・タイプが不明な場合は、[付録 A「インストール可能な個々のコンポーネント」](#)を参照してください。

「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」のインストール

「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」を選択した場合に表示されるインストール・ウィンドウは、使用しているコンピュータの構成および現在インストールされている Oracle コンポーネントによって異なります。

- 1. 「データベース構成」ウィンドウから、要求に合うデータベース構成を選択します。
表 4-3 に、使用可能な構成環境を説明します。

表 4-3 データベース構成環境

選択したオプション	Oracle Universal Installer の動作
汎用目的	Database Configuration Assistant を自動的に起動し、汎用的な用途に最適化した事前構成データベースをインストールします。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。
トランザクション処理	Database Configuration Assistant を自動的に起動し、トランザクション処理環境用に最適化した事前構成データベースをインストールします。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。
データ・ウェアハウス	Database Configuration Assistant を自動的に起動し、データ・ウェアハウス環境用に最適化した事前構成データベースをインストールします。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。
カスタマイズ	Database Configuration Assistant を自動的に起動し、カスタマイズしたデータベースの作成を可能にします。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。 このオプションは、事前構成オプションよりも時間が多くかかります。手順 3 に進みます。
ソフトウェアのみ	ソフトウェアのみをインストールし、構成ツールは実行しません。このオプションは、コンピュータがメモリー要件を最小で満たしている場合に選択します。 インストール後に Database Configuration Assistant および Oracle Net Configuration Assistant を手動で起動し、データベースおよび Oracle Net Services 環境をインストールおよび構成します。手順 10 に進みます。 関連項目： 4-2 ページの「最小メモリー要件を満たすインストール」

- 2. Microsoft Transaction Server が検出された場合は、「Oracle Services for Microsoft Transaction Server」ウィンドウが表示されます。このサービスのポート番号を入力します。

3. 「次へ」を選択します。

次に表示されるウィンドウは、既存のデータベースが検出されたかどうかによって異なります。

- リリース 9.2 より前の Oracle データベースがコンピュータで検出された場合は、「既存データベースのアップグレード」ウィンドウが表示されます。オプションとして、Oracle Database Upgrade Assistant でのデータベースのアップグレードを選択します。手順 4 に進みます。
- Oracle データベースがコンピュータ上で検出されない場合は、「データベースの識別」ウィンドウが表示され、グローバル・データベース名および SID を入力するよう要求されます。手順 5 に進みます。

注意： Oracle Internet Directory で使用するために構成された Oracle9i データベースは、このインストール・タイプではアップグレードしないでください。Oracle9i データベースおよび Oracle Internet Directory のアップグレードは、4-21 ページの「[Oracle Internet Directory のインストール](#)」の手順に従って実行する必要があります。

4. データベースを最新リリースにアップグレードするかどうかを選択します。

既存のデータベースをアップグレードするには、次のようにします。

- a. 「既存のデータベースをアップグレードします」チェックボックスを選択し、最新の Oracle9i データベースのリリースにアップグレードするデータベースの SID を選択します。
- b. 「次へ」を選択します。
「サマリー」ウィンドウが表示されます。
- c. 手順 11 に進みます。

新規データベースをインストールするには、次のようにします。

- a. 「既存のデータベースをアップグレードします」チェックボックスの選択を解除します。
- b. 「次へ」を選択します。
「データベースの識別」ウィンドウが表示されます。
- c. 手順 5 に進みます。

5. **グローバル・データベース名**および **SID** を、表示されたフィールドに入力します。「**カスタマイズ**」データベース環境の構成を選択した場合は、手順 10 に進みます。既存のデータベースをアップグレードする場合は、手順 8 に進みます。

この情報は、インストール後に Database Configuration Assistant によってデータベースが作成される際に使用されます。

注意： Oracle Real Application Clusters では、入力した SID の末尾に識別子が自動的に追加されます。たとえば、入力値が DB の場合、クラスタの最初のインスタンスには DB1 という SID、2 番目のインスタンスには DB2 という SID が設定されます。

6. 「次へ」を選択します。
「データベース・ファイルの場所」ウィンドウが表示されます。
7. データベース・ファイルのディレクトリ位置を入力します。ディレクトリ位置はマップされたドライブである必要があります。
8. 「次へ」を選択します。
「データベース・キャラクタ・セット」ウィンドウが表示されます。
9. 使用可能なオプションから、データベース・キャラクタ・セットを選択します。デフォルトでは、データベース・キャラクタ・セットは、オペレーティング・システムのロケール設定に基づいて自動的に選択されます。
10. 「次へ」を選択します。
「サマリー」ウィンドウが表示されます。
11. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」を選択します。
12. CD からインストールしている場合は、後続のディスクを挿入してインストールを継続するよう要求されます。
13. 選択したコンポーネントがインストールされるのを待ちます。
インストールの最後に「構成ツール」ウィンドウが表示されます。

関連項目： コンピュータの RAM が 128MB の場合は、4-2 ページの「**最小メモリ要件を満たすインストール**」を参照してください。

表 4-4 に、データベースおよび Oracle Net Services 環境の作成および構成を自動的に開始するアシスタントをリストします。

表 4-4 データベース・インストール・タイプでの構成アシスタント

ツール	起動する条件	動作
Oracle Cluster Configuration Assistant	Oracle Universal Installer がクラスタで起動した場合。「ソフトウェアのみ」オプションが選択されている場合は表示されません。	インストールで選択されたすべてのノードでグローバル・サービス・デーモン (GSD) を起動します。 関連項目： 付録 B「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」
Oracle Net Configuration Assistant	<ul style="list-style-type: none"> 「ソフトウェアのみ」構成タイプが選択されている場合を除くすべての場合。 現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services リリース 2 (9.2) がインストールされていない場合。 	Oracle Net Services 環境を自動的に構成します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-8 ページの「サーバー・ネットワークの構成」を参照してください。
Database Configuration Assistant	<ul style="list-style-type: none"> 現在指定されている Oracle ホームに Oracle データベースがインストールされていない場合。 4-9 ページの手順 4 のプロンプトで、検出されたデータベースをアップグレードするよう選択しなかった場合。 関連項目： パスワード管理の詳細は、5-2 ページの「ユーザー名およびパスワードの概要」を参照してください。	Oracle9i リリース 2 (9.2) データベースを自動的に作成します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-5 ページの「データベースの作成方法の選択」を参照してください。
Oracle HTTP Service の起動	「ソフトウェアのみ」構成タイプが選択されている場合を除くすべての場合。	HTTP リスナーを現在のセッションのスタンドアロン・プロセスとして非 SSL モードで作成し、起動します。ポート設定を確認し、「インストールの終了」ウィンドウの URL にアクセスします。 OracleHOME_NAMEHTTPServer サービスは、コンピュータの再起動後に起動します。
Oracle Database Upgrade Assistant	手順 4 のプロンプトで、検出されたデータベースをアップグレードするよう選択した場合。	選択されたデータベースを Oracle9i リリース 2 (9.2) にアップグレードします。
Oracle Intelligent Agent	データベースおよび Intelligent Agent がインストールされている場合。	Agent サービスを自動的に開始します。

「構成ツール」ウィンドウには、これらのアシスタントの実行結果が表示されます。

注意： Database Configuration Assistant と Oracle Database Upgrade Assistant は、同一インストール・セッションで実行されることはありません。

14. 「次へ」を選択して操作を続行します。

「インストールの終了」ウィンドウが表示されます。

15. 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。

「Enterprise Manager コンソール、スタンドアロン」が表示されます。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-33 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照してください。
- 第 6 章「[インストール後の構成タスク](#)」を参照してください。

Oracle9i Database の「カスタム」インストール

Oracle9i Database の「カスタム」インストール・タイプを選択した場合は、「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウが表示されます。「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウの「インストール状況」列には、インストールに使用できるすべてのコンポーネントの状態が表示されます。

1. インストールする各コンポーネントのチェックボックスを選択します。

注意： チェック・マークの付いたコンポーネントのみがインストールされます。

2. 「次へ」を選択します。

「コンポーネントの場所」ウィンドウが表示されます。ここで、Oracle ホーム以外に置けるコンポーネントをインストールする場所を選択できます。

3. デフォルトの場所を受け入れるには、「次へ」を選択します。それ以外の場合は、リスト・ボックスからコンポーネントを選択し、デフォルトの場所を変更します。

4. 「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで次のコンポーネントのいずれかを選択した場合は、要求に応じて適切な応答を入力します。大部分のコンポーネントは、追加情報の入力を要求されることなくインストールされることに注意してください。

表 4-5 Oracle9i Database を「カスタム」でインストールした場合のコンポーネントからの要求

選択したオプション	要求される内容
Oracle Net Services	ディレクトリ使用、リスナーおよびネーミング・メソッドなどの情報を入力します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-8 ページの「 サーバー・ネットワークの構成 」を参照してください。
Oracle Management Server	既存のリポジトリと新規のリリース 2 (9.2) リポジトリのどちらを使用するかを選択します。表示されるウィンドウの説明は、4-18 ページの「 Oracle Management Server のインストール 」を参照してください。 関連資料： 詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。
Oracle Procedural Gateways for IBM MQSeries	<ul style="list-style-type: none"> ■ MQSeries Queue Manager の場所を選択します。 ■ ローカル MQSeries Queue Manager の名前を入力します。
Oracle Real Application Clusters	ソフトウェアをインストールするクラスタ・ノードを選択します。 注意： このコンポーネントは、使用しているコンピュータがクラスタの一部として検出されている場合にのみ選択項目として表示されます。
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	<ul style="list-style-type: none"> ■ インストール後、現在インストールされていない場合は Microsoft Transaction Server をインストールします。 ■ Oracle MTS Recovery Service がリスニングするポートを入力します。
Oracle Transparent Gateway for IBM DRDA	DRDA サーバーとの通信に使用するネットワーク・プロトコルを選択します。
Oracle9i	<ul style="list-style-type: none"> ■ データベースを作成します（アップグレードを選択していない場合）。インストールの最後に Database Configuration Assistant が起動し、データベースの作成を順を追って指示します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。 ■ 作成するデータベースの グローバル・データベース名 および SID を入力します。 <p>関連項目： 実行できるデータベース構成手順の説明は、3-5 ページの「データベースの作成方法の選択」を参照してください。</p> <p>注意： ハード・ディスク・ドライブで以前のリリースの Oracle データベースが検出された場合は、Oracle9i データベースのリリース 2 (9.2) にアップグレードするよう要求されます。インストールの最後に Oracle Database Upgrade Assistant が起動し、データベースのアップグレードを順を追って指示します。</p>

表 4-5 Oracle9i Database を「カスタム」でインストールした場合のコンポーネントからの要求 (続き)

選択したオプション	要求される内容
Microsoft SQL Server Transparent Gateway	Microsoft SQL Server 名および Microsoft SQL Database 名を入力します。
Sybase Server Transparent Gateway	Sybase サーバー名、Sybase データベース名および Sybase がインストールされているディレクトリ・パスを入力します。
Teradata Transparent Gateway	ODBC データ・ソース名を入力します。

「サマリー」 ウィンドウが表示されます。

- 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」を選択します。
- 選択したコンポーネントがインストールされ、構成ツールが実行を完了するまで待ちます。構成アシスタントが失敗した場合は、エラーの原因を修正して「再試行」を選択します。

「インストールの終了」 ウィンドウが表示されます。
- 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。

Enterprise Manager のインストールを選択した場合は、「Enterprise Manager コンソール、スタンドアロン」が表示されます。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-33 ページの「インストール・セッション・ログの確認」を参照してください。
- 第 6 章「インストール後の構成タスク」を参照してください。

Oracle9i Client の「管理者」または「ランタイム」インストール

クライアントの「管理者」または「ランタイム」インストール・タイプを選択すると、「サマリー」ウィンドウが表示されます。

1. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」を選択します。
2. 選択したコンポーネントがインストールされるのを待ちます。

「構成ツール」ウィンドウが表示され、Oracle Net Configuration Assistant が起動します。現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Client リリース 2 (9.2) がインストールされていない場合は、Oracle Net Configuration Assistant から Oracle9i データベースへのクライアント・アクセスの構成方法を選択するよう要求されます。

関連項目：

- コンピュータの RAM が 128MB の場合は、4-2 ページの「[最小メモリー要件を満たすインストール](#)」を参照してください。
 - 3-11 ページの「[クライアント・ネットワークの構成](#)」を参照してください。
3. Oracle9i データベースへのクライアント・アクセスの構成方法を選択します。選択の詳細は、オンライン・ヘルプおよび 3-11 ページの「[クライアント・ネットワークの構成](#)」を参照してください。

「インストールの終了」ウィンドウが表示されます。
 4. 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。

「管理者」インストール・タイプを選択した場合は、「Enterprise Manager コンソール、スタンドアロン」が表示されます。

注意： Windows 98 への Oracle の最初のインストール後は、コンピュータを再起動します。その後のインストールでは、Oracle ホームを変更した場合にのみ停止および再起動する必要があります。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-33 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照してください。
- 第 6 章「[インストール後の構成タスク](#)」を参照してください。
- Oracle9i Client の各インストール・タイプでインストールされるコンポーネントのリストは、A-8 ページの「[Oracle9i Client のコンポーネント](#)」を参照してください。

Oracle9i Client の「カスタム」インストール

Oracle9i Client の「カスタム」インストール・タイプを選択した場合は、「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウが表示されます。「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウの「インストール状況」列には、インストールに使用できるすべてのコンポーネントの状態が表示されます。

1. インストールする各コンポーネントのチェックボックスを選択します。

注意： チェック・マークの付いたコンポーネントのみがインストールされます。

2. インストールするコンポーネントを選択し、「次へ」を選択します。
- 「コンポーネントの場所」ウィンドウが表示されます。ここで、コンポーネントをインストールする場所を選択できます。
3. デフォルトの場所を受け入れるには、「次へ」を選択します。それ以外の場合は、リスト・ボックスからコンポーネントを選択し、デフォルトの場所を変更します。
4. [表 4-6](#) に示されたコンポーネントのいずれかを選択した場合は、要求に応じて適切な応答を入力します。大部分のコンポーネントは、追加情報の入力を要求されることなくインストールされることに注意してください。

表 4-6 Oracle9i Client を「カスタム」でインストールした場合のコンポーネントからの要求

選択したオプション	要求される内容
Oracle Net Services	現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services がインストールされていない場合は、Oracle9i データベースにアクセスするようクライアントを構成します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-11 ページの「 クライアント・ネットワークの構成 」を参照してください。

表 4-6 Oracle9i Client を「カスタム」でインストールした場合のコンポーネントからの要求（続き）

選択したオプション	要求される内容
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	<ul style="list-style-type: none">■ インストール後、現在インストールされていない場合は Microsoft Transaction Server をインストールします。■ Oracle MTS Recovery Service がリスニングするポートを入力します。

「サマリー」ウィンドウが表示されます。

5. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」を選択します。
6. 選択したコンポーネントがインストールされ、構成ツールが実行を完了するまで待ちます。

「インストールの終了」ウィンドウが表示されます。

7. 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。

Enterprise Manager のインストールを選択した場合は、「Enterprise Manager コンソール、スタンドアロン」が表示されます。

注意： Windows 98 への Oracle の最初のインストール後は、コンピュータを再起動します。その後のインストールでは、Oracle ホームを変更した場合にのみ停止および再起動する必要があります。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-33 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照してください。
- [第 6 章「インストール後の構成タスク](#)」を参照してください。
- Oracle9i Client の各インストール・タイプでインストールされるコンポーネントのリストは、A-8 ページの「[Oracle9i Client のコンポーネント](#)」を参照してください。

Oracle Management Server のインストール

「Oracle Management Server」インストール・タイプを選択すると、「Oracle Management Server リポジトリ」ウィンドウが表示されます。

重要： Oracle Management Server とリポジトリのすべてのユーザーが Oracle Enterprise Manager ソフトウェア（コンソールや Management Pack など）をリリース 2（9.2）にアップグレードするまでは、これらのコンポーネントをアップグレードしないでください。すべての Oracle Enterprise Manager 製品は同じリリースである必要があります。旧コンポーネントは、新しいリリースと互換性がありません。

1. 表 4-7 をよく確認し、Oracle Management Server で使用するリポジトリ・タイプを選択します。

表 4-7 Oracle Management Server のリポジトリ・タイプ

タイプ	選択する状況
既存のリポジトリを使用	<ul style="list-style-type: none">■ 管理対象の環境に対してリリース 2（9.2）リポジトリを作成済みであり、この Oracle Management Server でそのリポジトリを使用する場合。インストールの最後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant が自動的に起動し、既存のリポジトリを使用するように Oracle Management Server を構成します。■ 既存のリリース 2.x リポジトリをリリース 2（9.2）にアップグレードする場合。インストールの最後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant が自動的に起動し、構成手順を実行します。ただし、リポジトリは自動的にアップグレードされません。インストールが完了している場合は、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を手動で起動して、既存のリリース 2.x リポジトリをリリース 2（9.2）にアップグレードします。次のように Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。 「スタート」→「プログラム」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Enterprise Manager Configuration Assistant」
新しいリポジトリが必要	既存のリリース 2（9.2）リポジトリが存在しない場合、またはまったく別の管理設定が必要な場合。インストールの最後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant が自動的に起動し、新しいリポジトリを作成します。

関連資料：

- Oracle Enterprise Manager リポジトリのアップグレードの詳細は、2-10 ページの「既存のリポジトリの使用」を参照してください。
- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

「サマリー」ウィンドウが表示されます。

2. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」を選択します。

インストールの最後に「構成ツール」ウィンドウが表示されます。

関連項目： コンピュータの RAM が 128MB の場合は、4-2 ページの「最小メモリー要件を満たすインストール」を参照してください。

表 4-8 に、Oracle Net Services およびデータベース・リポジトリ環境の作成および部分的な構成を自動的に開始するアシスタントをリストします。

表 4-8 「Oracle Management Server」インストール・タイプでの構成アシスタント

ツール	起動する条件	動作
Oracle Net Configuration Assistant	現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services がインストールされていない場合	Oracle Net Services 環境を構成するよう要求されます。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-11 ページの「クライアント・ネットワークの構成」を参照してください。
Oracle HTTP Service の起動	すべての場合	HTTP リスナーを現在のセッションのスタンドアロン・プロセスとして非 SSL モードで作成し、起動します。ポート設定を確認し、「インストールの終了」ウィンドウの URL にアクセスします。 また、Oracle Enterprise Manager および Oracle Enterprise Manager Repository Web Site をベースとするブラウザには、ポート 3339 を使用します。OracleHOME_NAMEHTTPServer サービスは、コンピュータの再起動後に起動します。
Enterprise Manager Configuration Assistant	すべての場合	リポジトリの作成と Oracle Management Server の構成を順を追って指示します。手順 3 に進みます。 関連資料： 詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Enterprise Manager Configuration Assistant の「ようこそ」ウィンドウが表示されます。

3. 「次へ」を選択します。

「リポジトリのデータベースの選択」ウィンドウが表示されます。

4-18 ページの「[Oracle Management Server のインストール](#)」の手順 1 で選択したリポジトリ・タイプに基づく適切な応答を表 4-9 に示します。

表 4-9 「リポジトリのデータベースの選択」ウィンドウのオプション

選択したオプション 入力を要求される情報	
既存のリポジトリを使用	<div>リリース 2 (9.2) リポジトリの接続情報：</div> <div><ul style="list-style-type: none">■ 既存のリリース 2 (9.2) リポジトリのユーザー名およびパスワード■ 次のように指定されるデータベース接続文字列 <code>hostname:port_number:SID</code> リリース 2.x リポジトリをリリース 2 (9.2) リポジトリにアップグレードする必要がある場合は、インストール後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant も起動してアップグレードを実行する必要があります。</div> <div>関連項目： 2-10 ページの「既存のリポジトリの使用」</div>
新しいリポジトリが必要	<div>リポジトリを作成するデータベースに関する情報：</div> <div><ul style="list-style-type: none">■ ユーザー名（DBA 権限付き）およびパスワード（たとえば、SYSTEM/MANAGER など）■ 次のように指定されるデータベース接続文字列 <code>hostname:port_number:SID</code>■ 接続に使用するロール（たとえば、SYSDBA など）</div> <div>Enterprise Manager Configuration Assistant がデータベースに接続した後で、次の情報を指定する必要があります。</div> <div><ul style="list-style-type: none">■ 新規リポジトリ所有者のデータベース・ユーザー名およびパスワード。（デフォルトを受け入れるか、新しい名前を選択します。）ネットワーク内の新しいリポジトリ所有者ごとに一意のユーザー名を入力する必要があります。■ リポジトリのデフォルト表領域。■ リポジトリの一時表領域。</div> <div>関連資料： 新規リポジトリの作成方法または既存のリポジトリの使用方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。</div>

注意： 大部分のデータベースで使用されるデフォルトのポート番号は 1521 です。

4. 残りの Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant ウィンドウに適宜応答します。
- 「インストールの終了」ウィンドウが表示されます。
5. 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。
6. リポジトリをアップグレードする場合は、4-18 ページの手順 1 で説明したように、インストール後に適切なツールを実行します。
- 「Enterprise Manager コンソール、スタンドアロン」が表示されます。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-33 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照してください。
- 第 6 章「[インストール後の構成タスク](#)」を参照してください。

Oracle Internet Directory のインストール

「Oracle Internet Directory」を選択した場合に表示されるインストール・ウィンドウは、使用しているコンピュータの構成および現在インストールされている Oracle コンポーネントによって異なります。表 4-10 に、Oracle Internet Directory をインストールするために実行する必要のある手順をまとめます。次の選択項目の 1 つに進みます。

表 4-10 Oracle Internet Directory のインストール・オプション

Oracle データベース	結果	次に進む手順
リリース 2 (9.2) が同じ Oracle ホームにインストールされているが、Oracle Internet Directory リリース 2 (9.2) はインストールされていない場合	「既存インスタンスを使用」ウィンドウが表示され、Oracle Internet Directory に使用する SID の入力を要求されます。	4-22 ページの「 Oracle Internet Directory の最初のインストール 」の手順 1
リリース 2 (9.2) および Oracle Internet Directory リリース 2 (9.2) がコンピュータにインストールされていない場合	「データベースの識別」ウィンドウが表示され、Oracle Internet Directory リリース 2 (9.2) と同じ Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle9i データベースが自動的にインストールされます。	4-22 ページの「 Oracle Internet Directory の最初のインストール 」の手順 2
Oracle Internet Directory リリース 2.1.1.x または 3.0.1.x が Oracle ホームにインストールされている場合	「既存の OID のアップグレード」ウィンドウが表示され、Oracle9i リリース 2 (9.2) および Oracle Internet Directory リリース 2 (9.2) へのアップグレードを要求されます。	4-24 ページの「 Oracle Internet Directory のアップグレード 」

Oracle Internet Directory の最初のインストール

「インストール・タイプ」ウィンドウで「Oracle Internet Directory」を選択した後で、「既存インスタンスを使用」ウィンドウが表示されます。Oracle Internet Directory をインストールするには、次のようにします。

1. 次のオプションのどちらかを選択します。
 - Oracle Internet Directory インストールの現在の Oracle ホームから既存のデータベースを使用するには、「はい」を選択します。「次へ」を選択します。
 - Oracle Internet Directory インストール用の新規データベースを作成するには、「いいえ」を選択します。「次へ」を選択します。
2. 「データベースの識別」ウィンドウが表示されます。
 - 既存のデータベースを使用している場合は、既存のデータベースの **SID** を入力し、「次へ」を選択します。このデータベースは、現在の Oracle ホーム・ディレクトリに存在する必要があることに注意してください。
 - 新規データベースを作成する場合は、適切なフィールドに **グローバル・データベース名** および **SID** の値を入力します。「次へ」を選択します。

「OID データベースの場所」ウィンドウが表示されます。
3. Oracle Internet Directory データベース・ファイルをインストールするディレクトリ位置を入力します。これらのデータベース・ファイルには、構成中に作成される Oracle Internet Directory に固有の表が含まれます。
4. 「次へ」を選択します。
 - Oracle9i リリース 2 (9.2) および Oracle Internet Directory リリース 9.2 がインストールされていない場合は、「データベース・キャラクタ・セット」ウィンドウが表示されます。デフォルト値を受け入れ、「次へ」を選択します。
 - それ以外の場合は、「サマリー」ウィンドウが表示されます。情報を検討して、十分なディスク領域があることを確認します。

5. 「インストール」を選択します。

「インストール」ウィンドウが表示されます。表 4-11 の値は、インストール中に自動的に設定されます。

表 4-11 インストール時に設定される Oracle Internet Directory の値

設定	値
暗号化パスワードの使用	Yes
暗号化スキーマ	MD4
Oracle Internet Directory に格納されるディレクトリのおおよそのエントリ数	10,000 エントリ未満
管理者識別名のパスワード (cn=orcladmin)	welcome

インストールの最後に「構成ツール」ウィンドウが表示されます。

関連項目： コンピュータの RAM が 128MB の場合は、4-2 ページの「[最小メモリー要件を満たすインストール](#)」を参照してください。

表 4-12 に、Oracle Net Services および Oracle Internet Directory 環境の作成および構成を自動的に開始するアシスタントを示します。

表 4-12 「Oracle Internet Directory」インストール・タイプでの構成アシスタント

ツール	起動する条件	動作
Oracle Net Configuration Assistant	現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services がインストールされていない場合	Oracle Net Services 環境を自動的に構成します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-8 ページの「 サーバー・ネットワークの構成 」を参照してください。
Oracle HTTP Service の起動	すべての場合	HTTP リスナーを現在のセッションのスタンドアロン・プロセスとして非 SSL モードで作成し、起動します。ポート設定を確認し、「インストールの終了」ウィンドウの URL にアクセスします。 OracleHOME_NAMEHTTPServer サービスは、コンピュータの再起動後に起動します。
Oracle Intelligent Agent	データベースおよび Intelligent Agent がインストールされている場合	Agent サービスを自動的に開始します。

表 4-12 「Oracle Internet Directory」インストール・タイプでの構成アシスタント（続き）

ツール	起動する条件	動作
Database Configuration Assistant	Oracle Internet Directory インストールで Oracle ホームの既存のデータベースを使用するケースを除くすべての場合	<p>Oracle9i データベースを自動的に作成します。</p> <p>Enterprise Edition がインストールされていない新規 Oracle ホームに Oracle Internet Directory をインストールする場合は、Oracle9i リリース 2 (9.2) データベースに Oracle Internet Directory の表領域およびスキーマを作成します。</p> <p>注意： 新規データベースがインストールされる場合は、Database Configuration Assistant が自動的に起動し、AL32UTF-8 キャラクタ・セットのデータベースを作成します。</p> <p>Oracle Internet Directory の「カスタム」インストールを実行している場合は、「データベースの識別」ウィンドウで グローバル・データベース名 または SID を変更しないでください。これらの値を変更した場合は、Oracle Internet Directory が正常にインストールされません。</p>
OiD Configuration Assistant	すべての場合	Oracle Internet Directory ディレクトリ・サーバーを自動的に起動し、デフォルト・スキーマおよびディレクトリ情報ツリー (DIT) を構成して様々な Oracle コンポーネントをサポートします。

「インストールの終了」ウィンドウが表示されます。

6. 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。

関連項目： インストール・セッションのサマリーは、4-33 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照してください。

Oracle Internet Directory のアップグレード

Oracle Internet Directory のアップグレードは、Oracle Internet Directory リリース 2.1.1.x および 3.0.1.x からサポートされています。Oracle Internet Directory のアップグレードを実行する Oracle ホームに完全な Enterprise Edition もインストールされている場合は、Enterprise Edition をアップグレードする前に Oracle Internet Directory のアップグレードを実行する必要があります。

単一ノード・アップグレード

次の手順を実行して、Oracle ホームにインストールされている OID をアップグレードします。

- [Oracle Internet Directory のアップグレードの準備](#)
- [Oracle Internet Directory のアップグレードの開始](#)

Oracle Internet Directory のアップグレードの準備

Oracle Internet Directory リリース 2.1.1.x または 3.0.1.x が Oracle ホームにインストールされている場合は、必ず次の手順を実行します。

1. Oracle リスナー・サービス、Oracle データベース・サービスおよび Oracle Internet Directory プロセス（OID モニター、OID Server、レプリケーション・サーバーおよび Directory Integration Server）を停止します。
2. アップグレードする Oracle8i または Oracle9i リリース 1（9.0.1）データベースに対するシステム識別子（SID）、Oracle ディレクトリ・サーバー（ODS）ユーザー・パスワードおよび Oracle Internet Directory 管理者パスワードを調べます。
3. 次のコマンドを実行して、既存の Oracle ホームに登録されている Oracle ディレクトリ・サービスを削除します。

```
oidmon remove
```

4. アップグレードの前に完全バックアップを実行します。完全バックアップを行う最適な方法は、データベースのバックアップを作成することです。

関連資料： Oracle Universal Installer を使用するかわりに、代替アップグレード手順を使用してアップグレードを手動で実行できます。この方法は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の付録 D に記載されています。

Oracle Internet Directory のアップグレードの開始

コンピュータに以前のバージョンの Oracle Internet Directory がインストールされている場合は、「既存の OID のアップグレード」ウィンドウが表示されます。Oracle Internet Directory をアップグレードするには、次のようにします。

1. 「既存データベースのアップグレード」ウィンドウが表示されます。アップグレードする Oracle Internet Directory の Oracle8i または Oracle9i リリース 1（9.0.1）データベースを選択します。
2. 既存のデータベースをアップグレードするには「はい」を選択します。
3. 「次へ」を選択します。
「Oracle SID」ウィンドウが表示されます。
4. 既存のデータベースの **SID** を入力します。

5. 「次へ」を選択します。

インストールの最後に「構成ツール」ウィンドウが表示されます。

関連項目： コンピュータの RAM が 128MB の場合は、4-2 ページの「[最小メモリ要件を満たすインストール](#)」を参照してください。

表 4-13 に、Oracle Net Services および Oracle Internet Directory 環境の作成および構成を自動的に開始するアシスタントを示します。

表 4-13 構成アシスタント

対象	アップグレード対象
Oracle Database Upgrade Assistant	Oracle8i または Oracle9i リリース 1 (9.0.1) から Oracle9i リリース 2 (9.2) データベースへ
OiD Upgrade Assistant	Oracle Internet Directory リリース 2.1.1.x または 3.0.1.x から 9.2.0 へ
	関連資料： 既存の Oracle Internet Directory データベースのアップグレードの詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の付録 D を参照してください。

6. 6-7 ページの「[コンポーネント別インストール後の構成タスク](#)」の「Oracle Internet Directory」の項に進み、必要なインストール後のタスクを実行します。

複数ノード環境での Oracle Internet Directory のアップグレード

複数ノードの Oracle Internet Directory システムは 2 通りの方法でアップグレードできます。

- [1 ノードずつアップグレード](#)
- [すべてのノードを同時にアップグレード](#)

1 ノードずつアップグレード

この方法では、あるノードでアップグレードを実行している間も、他のノードはすべて使用できます。この方法では、次のガイドラインに従う必要があります。

- レプリケーション・ネットワークを 1 ノードずつアップグレードする場合は、すべてのノードがアップグレードされるまでアップグレードは完了しません。ただし、この間、アップグレード対象ノード以外のネットワーク・ノードはすべて使用できます。
- アップグレードの実行中に、読取り / 書込みが行われるノードは 1 つのみです。他のノードは読取り専用にします。
- 他のサイトをアップグレードする前に、マスター定義サイト (MDS) でアップグレードを実行します。

1 ノードずつアップグレードする前に、次のタスクを実行します。

1. Oracle Internet Directory プロセスを停止します。
2. ASR プッシュ・ジョブを一時的に削除します。

%ORACLE_HOME%\ldap\admin ディレクトリにある delasrjobs.sql スクリプトを実行します。このスクリプトは、MDS に変更をプッシュする、他のマスター・サイトの Oracle9i レプリケーション・ジョブを削除します。これらのジョブを一時的に削除すると、レプリケーション環境からノードが削除され、変更を適用できなくなります。ただし、他のノードは稼働したままになり、変更のレプリケートを継続します。

3. 各ノードでアップグレードを実行します。詳細は、4-25 ページの「[単一ノード・アップグレード](#)」を参照してください。
4. ノードをアップグレードした後で、ASR プッシュ・ジョブを作成します。

アップグレードしたノードで creasrjobs.sql スクリプトを実行することにより、他のノードでジョブを作成します。スクリプトは、%ORACLE_HOME%\ldap\admin ディレクトリにあります。このスクリプトは、以前に削除されたジョブを他のノードに作成します。これらの新規作成されたジョブは、アップグレードしたノードに、他のノード上の既存の変更および新規変更のプッシュを開始します。

すべてのノードを同時にアップグレード

この方法を使用する場合、アップグレード・プロセス中はシステムを使用できません。すべてのノードを同時にアップグレードする前に、次のタスクを実行します。

1. ネットワーク上のすべてのノードを読み取り専用モードに設定します。
 - 入力ファイルを編集します。
 - dn:
 - changetype: modify
 - replace: orclservermode
 - orclservermode: r
 - レプリケーション・ネットワーク上のすべてのノードに対して、次のコマンドを実行します。


```
ldapmodify -D super_user_DN -w super_user_password -h host_name -p port_number -f input_file.ldif
```
2. 変更ログ・キュー内のすべての変更が適用されるまで待ちます。次の手順に進む前に、変更ログ・キューが空になるまで待ちます。

注意： この手順をスキップした場合は、ノードのアップグレード後に変更ログ・キュー内の変更が適用されます。

3. Oracle Internet Directory プロセスを停止し、データベースをシャットダウンしていることを確認します。
4. 各ノードでアップグレードを実行します。詳細は、4-25 ページの「[単一ノード・アップグレード](#)」を参照してください。

下位互換性

既存のレプリケーションのディレクトリ・レプリケーション・グループ (DRG) がアップグレードされている場合、アップグレードされた Oracle Internet Directory 9.2.0 に対して行われた更新の一部は、まだアップグレードされていないノードにレプリケートされません。これらのアップグレードは、コンシューマが 9.2.0 にアップグレードされた後で最終的に正常にレプリケートされます。次の注意事項にできるだけ留意します。

- DRG 内のすべてのノードがアップグレードされるまで、アップグレードされたノードで変更を行わないでください。
- アップグレードしたノードを更新する必要がある場合は、アップグレードされていない他のノードに変更をプッシュしないでください。レプリケーション・サーバーを特定のモード (-o FALSE) で起動することにより、変更のプッシュを一時的に無効にできます。レプリケーションをこのモードで開始するには、次のコマンドを実行します。

```
oidctl connect=connect_string server=server_name instance=1 flags="-p port -h  
host_name -o FALSE" start
```

Oracle9i Management and Integration の「カスタム」インストール

Oracle9i Management and Integration の「カスタム」インストール・タイプを選択した場合は、「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウに、インストール可能なすべてのコンポーネントが表示されます。

1. インストールする各コンポーネントのチェックボックスを選択します。

注意： チェック・マークの付いたコンポーネントのみがインストールされます。

2. 「次へ」を選択します。

「コンポーネントの場所」ウィンドウが表示されます。ここで、コンポーネントをインストールする場所を選択できます。

3. デフォルトの場所を受け入れるには、「次へ」を選択します。それ以外の場合は、コンポーネントを選択して、デフォルトの場所を変更するテキスト・ボックスを使用可能にします。続いて、「次へ」を選択します。

4. 表 4-14 に示されたコンポーネントのいずれかを選択した場合は、要求に応じて適切な応答を入力します。大部分のコンポーネントは、追加情報の入力を要求されることなくインストールされることに注意してください。

表 4-14 Oracle9i Management and Integration を「カスタム」でインストールした場合のコンポーネントからの要求

選択したオプション	結果
Oracle Management Server	インストール手順は、4-18 ページの「 Oracle Management Server のインストール 」に進みます。
Oracle Internet Directory	インストール手順は、4-21 ページの「 Oracle Internet Directory のインストール 」に進みます。

5. Oracle9i データベースの [グローバル・データベース名](#) および [SID](#) を入力し、「次へ」を選択します。
- データベースが現在インストールされていない場合は、「OID データベースの場所」ウィンドウが表示されます。
6. Oracle Internet Directory データベース・ファイルをインストールするディレクトリ位置を入力します。データベース・ファイルと Oracle ソフトウェアは、別のパーティションにインストールすることをお薦めします。これらのデータベース・ファイルは、構成中に作成される Oracle Internet Directory 固有の表とスキーマに対応します。
7. 「次へ」を選択します。
- 「OID ユーザー・パスワード暗号化」ウィンドウが表示されます。
8. パスワードの暗号化を有効にするかどうかを選択し、「次へ」を選択します。
- 「ユーザー・パスワード・ハッシュ・アルゴリズム」ウィンドウが表示されます。
9. 使用する暗号化スキーマを選択し、「次へ」を選択します。
- 「OID 管理者パスワード」ウィンドウが表示されます。
10. パスワードを入力します。
- このパスワードを使用して、Oracle Internet Directory におけるすべての変更を行うことができます。
11. 同じパスワードを再度入力し、「次へ」を選択します。
- 「OID サイズ構成」ウィンドウが表示されます。
12. Oracle Internet Directory に格納するディレクトリのおおよそのエントリ数を選択し、「次へ」を選択します。
- 「Oracle Management Server リポジトリ」ウィンドウが表示されます。

13. 既存のリポジトリを使用するか、新規リポジトリを作成するかを選択し、「次へ」を選択します。

「データベースの作成」ウィンドウが表示されます。

14. このインストール・セッション中に新規データベースを作成するかどうかを選択し、「次へ」を選択します。

データベースの作成を選択した場合は、「データベース・ファイルの場所」ウィンドウが表示されます。

- 「データベース・ファイルのディレクトリ」フィールドに、Oracle データベースをインストールするディレクトリ・パスを入力し、「次へ」を選択します。

注意： Oracle9i リリース 2 (9.2) ソフトウェアは、Oracle8i 以下のソフトウェアが格納されている既存の Oracle ホームにはインストールしないでください。

「データベース・キャラクタ・セット」ウィンドウが表示されます。

15. 使用可能なオプションから、データベース・キャラクタ・セットを選択します。デフォルトでは、データベース・キャラクタ・セットは、オペレーティング・システムのロケール設定に基づいて自動的に選択されます。

16. 「次へ」を選択します。

「サマリー」ウィンドウが表示されます。

17. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「インストール」を選択します。

インストールの最後に「構成ツール」ウィンドウが表示されます。

関連項目： コンピュータの RAM が 128MB の場合は、4-2 ページの「[最小メモリー要件を満たすインストール](#)」を参照してください。

表 4-15 に、Oracle Internet Directory で使用する Oracle9i データベースの作成および構成を自動的に開始するアシスタントをリストします。

表 4-15 Oracle9i Management and Integration の「カスタム」インストール・タイプでの構成アシスタント

ツール	起動する条件	動作
Oracle Net Configuration Assistant	現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services がインストールされていない場合	Oracle Net Services 環境を自動的に構成します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-8 ページの「 サーバー・ネットワークの構成 」を参照してください。
Oracle HTTP Service の起動	「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで「Oracle HTTP Server」を選択した場合	HTTP リスナーを非 SSL モードで起動します。ポート設定を確認し、「インストールの終了」ウィンドウの URL にアクセスします。
Oracle Intelligent Agent	データベースおよび Intelligent Agent がインストールされている場合	Agent サービスを自動的に開始します。
OiD Configuration Assistant	「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで「Oracle Internet Directory」を選択した場合	Oracle Internet Directory Server を自動的に起動し、デフォルト・スキーマおよび DIT を構成して様々な Oracle コンポーネントをサポートします。
Database Configuration Assistant	「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで「Oracle9i」を選択し、プロンプトでアップグレードを選択せず、Oracle9i データベースをインストールするためのプロンプトで「はい」を選択した場合	Database Configuration Assistant が OiD Configuration Assistant 内で自動的に起動し、「カスタム」インストールを順を追って指示し、AL32UTF-8 キャラクタ・セットでデータベースを作成します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。 Database Configuration Assistant では、データベースの作成後にデフォルト・パスワードの変更が可能です。このときに「パスワード管理」ボタンは使用しないでください。SYS および SYSTEM のパスワードは、Oracle Internet Directory インストールが完了した後でのみ変更してください。
Oracle Database Upgrade Assistant	データベースのアップグレードを選択した場合	選択されたデータベースを Oracle9i にアップグレードします。
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant	「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで Oracle Management Server のインストールを選択した場合	ローカル Oracle Management Server の構成で、既存のリポジトリの使用または新規リポジトリの作成を可能にします。

表 4-15 Oracle9i Management and Integration の「カスタム」インストール・タイプでの構成アシスタント（続き）

ツール	起動する条件	動作
Oracle Workflow Configuration Assistant	「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで Oracle Workflow のインストールを選択した場合	<p>Oracle Workflow スキーマを Oracle9i データベースに構成します。</p> <p>Workflow パスワード、SYS パスワードおよび SYSTEM パスワードの入力を要求されます。複数のコマンド・プロンプトが自動的に開いて閉じます。これらのウィンドウは手動で閉じないでください。手動で閉じると、構成プロセスが中断します。</p> <p>関連資料： Oracle Workflow Configuration Assistant の使用方法は、『Oracle Workflow Server インストレーション・ノート』を参照してください。</p>

「インストールの終了」ウィンドウが表示されます。

18. 「終了」を選択して Oracle Universal Installer を終了するか、「次のインストール」を選択して別のコンポーネントをインストールします。
- 「Enterprise Manager コンソール、スタンドアロン」が表示されます。

注意： Oracle Internet Directory と Oracle Workflow を同じインストール・セッションでインストールおよび構成することはできません。「カスタム」インストールを実行し、Oracle Internet Directory と Oracle Workflow の両方のインストールを選択した場合は、インストール後に OiD Configuration Assistant のみ起動します。Oracle Workflow を構成するには、インストール後に Oracle Workflow Configuration Assistant を手動で起動する必要があります。

Oracle Workflow を手動で構成するには、次のようにします。

1. インストールの最後に Oracle Universal Installer を終了します。
2. 次のコマンドを入力します。

```
<ドライブ文字>:\¥%ORACLE_HOME%\wf¥install> wfinstall.bat
```

関連資料： 詳細は、『Oracle Workflow Server インストレーション・ノート』を参照してください。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-33 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照してください。
- [第 6 章「インストール後の構成タスク」](#)を参照してください。

インストール・セッション・ログの確認

インストーラを初めて実行したときに、<システム・ドライブ>:\Program Files\Oracle\Inventory\logs ディレクトリが作成されます。インストールされたコンポーネントのインベントリと実行されたインストール・アクションは、このディレクトリに保存されます。

ログ・ファイル名の形式は installActionsdate_time.log（たとえば、installActions2001-07-14_09-00-56AM.log など）です。

Oracle Universal Installer の任意のウィンドウで「インストール済の製品」を選択すると、インストール済のコンポーネントのリストを表示できます。インストールされたプログラムのウィンドウが表示されます。

注意： Inventory ディレクトリやその内容を、削除または手動で変更しないでください。このような操作を行った場合、インストールする製品をインストーラがシステムへ配置できなくなります。

Oracle のコンポーネントとサービスの削除

この項では、Oracle のコンポーネント、ユーティリティおよびサービスの削除方法を説明します。

注意： Oracle JVM を削除すると、Oracle Universal Installer は、Oracle JVM に依存しているデータベースおよびその他の製品をシステムから削除します。

次の内容について説明します。

- [Windows プラットフォームでの Oracle サービスの停止](#)
- [Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除](#)
- [Windows NT、Windows 2000 および Windows XP のレジストリからの Oracle キーの削除](#)
- [Windows 98 のレジストリからの Oracle キーの削除](#)

注意： 手動によるコンポーネントの削除は、インストールの途中で Oracle Universal Installer を終了する場合のみ、行ってください。次に例を示します。

- 「取消」を選択した場合
- コンピュータの電源をオフにした場合
- インストールが完了していない場合（つまり、必要な構成ツールが最後まで実行されていない場合）

この場合、Oracle Universal Installer はインストールをインベントリに登録しません。ただし、ファイルは Oracle ホームにコピーされている可能性があります。ファイルを手動で削除して、インストールを再開します。

Windows プラットフォームでの Oracle サービスの停止

まず Windows の Oracle サービスを停止してから、Oracle コンポーネントまたはレジストリ・エントリの削除を実行する必要があります。

Windows のサービスを停止するには、次のようにします。

1. 「コントロール パネル」の「サービス」を開きます。
 - Windows NT では、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「サービス」を選択します。
 - Windows 2000 では、「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
 - Windows XP では、「スタート」→「コントロール パネル」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。
2. 「開始」の状態の Oracle サービス（Oracle または Ora で始まる名前）を選択し、「停止」を選択します。
3. 「閉じる」を選択して、「サービス」ウィンドウを閉じます。
4. 「コントロール パネル」を閉じます。

Oracle Internet Directory サービスの停止および削除

1. コマンド・プロンプトで Oracle Internet Directory Server を停止します。

```
C:\> oidctl CONNECT=NET_SERVICE_NAME SERVER=OIDLDAPD  
INSTANCE=SERVER_INSTANCE_NUMBER STOP
```

NET_SERVICE_NAME は Oracle Internet Directory Server へのネットワーク接続、*SERVER_INSTANCE_NUMBER* はインスタンス番号です（この番号は Oracle Directory Manager の「サーバー・リスト」タブに表示されます）。

2. コマンド・プロンプトで Oracle Internet Directory モニターを停止します。

```
C:\> oidmon STOP
```
3. レジストリから Oracle Internet Directory サービス OracleDirectoryService を削除します。

```
C:\> oidmon REMOVE
```
4. 4-36 ページの「[Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除](#)」の手順に従って、Oracle Internet Directory で構成されている Oracle9i データベースを削除します。

Oracle Management Server サービスの停止およびレジストリ・エントリの削除

1. 「コントロール パネル」で、Oracle Management Server (OracleHOME_NAMEManagementServer) を停止します。

プロンプトが表示されたら、Oracle Management Server サービスの管理者名およびパスワードを入力します。デフォルトの管理者名は `sysman` で、パスワードは `oem_temp` です。`oem_temp` パスワードを変更した場合は、該当するパスワードを入力します。

2. Oracle Management Server サービスをレジストリから削除します。

```
C:\> omsntsrv -u HOME_NAME
```

`HOME_NAME` は Oracle ホーム名です。

Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除

ここでは、Oracle コンポーネントを手動で削除するかわりに、Oracle Universal Installer を使用して削除（インストーラ・インベントリから削除）する方法を説明します。

手動で（たとえば、Windows エクスプローラやコマンド・プロンプトでディレクトリ構造を削除して）Oracle ホームを削除しないでください。Oracle ホームのコンポーネントが、Oracle Universal Installer インベントリに登録されたままになります。その後、同じ Oracle ホームにインストールしようとすると、すでにインストールされていると判断されるため、選択された一部またはすべてのコンポーネントはインストールされません。

Oracle Universal Installer は、インストール中に Oracle コンポーネント用の Windows サービスを作成します。ただしインストーラは、Oracle Net Configuration Assistant、OiD Configuration Assistant および Database Configuration Assistant で作成されたサービスは削除しません。

Oracle Universal Installer でコンポーネントを削除するには、次のようにします。

1. 4-35 ページの「[Windows プラットフォームでの Oracle サービスの停止](#)」に示されている手順に従ってください。
2. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。
Oracle Universal Installer の「ようこそ」ウィンドウが表示されます。
3. 「製品の削除」ボタンを選択します。
「インベントリ」ウィンドウが表示されます。
4. 削除するコンポーネントが見つかるまで、インストール済のコンポーネントのツリーを展開します。
5. 削除するコンポーネントのボックスを選択します。

6. 「削除」を選択します。
「確認」ウィンドウが表示されます。
7. 「はい」を選択して、選択したコンポーネントを削除します。

注意： コンポーネントによっては、削除すると他のコンポーネントが正しく機能しなくなる可能性があることを示すメッセージが表示されます。

コンポーネントがコンピュータから削除されます。「インベントリ」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、削除されたコンポーネントは表示されていません。

8. 「閉じる」を選択して、「インベントリ」ウィンドウを閉じます。
9. 「終了」を選択して、Oracle Universal Installer を終了します。

Windows NT、Windows 2000 および Windows XP のレジストリからの Oracle キーの削除

まれに、Oracle コンポーネントを完全にコンピュータから削除することで、深刻なシステム上の問題を修正する必要がある場合があります。

コンピュータからの Oracle コンポーネントの全削除は最後の手段として、またシステムから Oracle コンポーネントをすべて削除する場合にのみ行ってください。

Oracle Universal Installer は、Oracle Net Configuration Assistant、OiD Configuration Assistant および Database Configuration Assistant で作成されたサービスは削除しません。また、他のいくつかのレジストリ・キーは削除されません。

注意： ORADIM ユーティリティを使用して、インスタンスおよびサービスを手動で削除することもできます。『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「インストール後のデータベース作成」を参照してください。

注意： Microsoft レジストリ エディタは、自己責任において使用してください。レジストリ エディタの使用を誤ると、重大な問題につながる可能性があります。オペレーティング・システムの再インストールが必要になる場合があります。

Windows NT、Windows 2000 および Windows XP で Oracle Net Service レジストリ・エントリを削除するには、次のようにします。

1. 「Administrators」グループのメンバーとしてログオンします。
2. 4-35 ページの「[Windows プラットフォームでの Oracle サービスの停止](#)」に示されている手順に従ってください。
3. コマンド・プロンプトでレジストリ エディタを起動します。
`C:¥> regedt32`
4. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動して OracleHOME_NAME¥TNSListener レジストリ・エントリを削除します。Oracle Universal Installer が自動的にその他すべての Oracle Net Services を削除します。
5. レジストリ エディタを終了します。

Windows NT、Windows 2000 および Windows XP で、すべての Oracle コンポーネントをコンピュータから削除するには、次のようにします。

注意： この手順では、コンピュータからすべての Oracle コンポーネント、サービスおよびレジストリ・エントリが削除されます。さらに、%ORACLE_BASE%¥oradata¥DB_NAME の下のデータベース・ファイルもすべて削除されます。レジストリ・エントリを削除する際は、特に気を付けてください。間違ったエントリを削除すると、システムに不具合が生じる場合があります。

1. 「Administrators」グループのメンバーとしてログオンします。
2. 4-35 ページの「[Windows プラットフォームでの Oracle サービスの停止](#)」に示されている手順に従ってください。
3. コマンド・プロンプトでレジストリ エディタを起動します。
`C:¥> regedt32`
4. HKEY_CLASSES_ROOT に移動します。
5. Oracle、ORA または ORCL で始まるキーを削除します。
6. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE に移動します。
7. ORACLE および Apache Group キーを削除します。
8. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動します。
9. ORACLE で始まるすべてのキーを削除します。
10. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services ¥Eventlog¥Application に移動します。

11. ORACLE で始まるすべてのキーを削除します。
12. HKEY_CURRENT_USER に移動します。
13. ORACLE を削除します。
14. HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
15. Oracle または ORCL で始まるキーがある場合は削除します。
16. Oracle キーがある場合は削除します。
17. レジストリ エディタを終了します。
18. コンピュータを再起動します。

システム変数パスの更新

1. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「システム」→「環境」タブを選択します。
2. システム環境変数パスを選択し、Path 変数を変更します。
3. すべての Oracle エントリをパスから削除します。たとえば、Oracle によって JRE がインストールされている場合は、%ORACLE_HOME%¥BIN パスおよび JRE パスを削除します。次のようなパスがある可能性があります。
C:¥oracle¥ora92¥bin;C:¥program files¥oracle¥jre¥1.1.8¥bin
4. 「コントロール パネル」を閉じます。

「スタート」メニューからの Oracle の削除

1. <システム・ドライブ>:¥winnt¥profiles¥all users¥スタート メニュー¥プログラムに移動します。
2. 次のアイコンを削除します。
 - Oracle - HOME_NAME
 - Oracle Installation Products

HOME_NAME は、以前の Oracle ホーム名です。
3. Windows エクスプローラから <システム・ドライブ>:¥Program Files¥Oracle を削除します。
4. ハード・ディスク・ドライブ上のすべての ORACLE_BASE ディレクトリを削除します。
5. コンピュータを再起動します。

Windows 98 のレジストリからの Oracle キーの削除

Windows 98 上でコンピュータから Oracle コンポーネントをすべて削除するには、次のようにします。

1. MS-DOS コマンド・プロンプトでレジストリ エディタを起動します。
`C:¥> regedit`
2. HKEY_CLASSES_ROOT に移動します。
3. Oracle または ORCL で始まるキーを削除します。
4. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
5. ORACLE キーを削除します。
6. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ODBC¥odbcinst.ini に移動します。
7. Oracle ODBC Driver キーを削除します。
8. HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
9. Oracle または ORCL で始まるキーがある場合は削除します。
10. HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥ODBC¥odbcinst.ini に移動します。
11. Oracle キーを削除します。
12. レジストリ エディタを終了します。
13. コンピュータを再起動します。

システム変数パスの更新

autoexec.bat ファイルを編集して、パス設定から %ORACLE_HOME%¥BIN および JRE のパスを削除します。

「スタート」メニューからの Oracle の削除

1. Windows エクスプローラから < システム・ドライブ >:¥Program Files¥Oracle を削除します。
2. 次の場所からアイコンを削除します。
 - < システム・ドライブ >:¥windows¥スタート メニュー¥プログラム ¥oracle - HOME_NAME
 - < システム・ドライブ >:¥windows¥スタート メニュー¥プログラム ¥oracle installation products

HOME_NAME は、以前の Oracle ホーム名です。
3. ハード・ディスク・ドライブ上のすべての ORACLE_BASE ディレクトリを削除します。
4. コンピュータを再起動します。

インストールされた初期データベースの内容の表示

この章では、「Enterprise Edition」、「Standard Edition」、「Personal Edition」または「Oracle Internet Directory」インストール・タイプに対して Database Configuration Assistant で作成されるデフォルトの初期データベースの内容を説明します。可能な場合には、カスタム・データベース作成方法に関する情報の参照先も示します。

この章の項目は次のとおりです。

- [ユーザー名およびパスワードの概要](#)
- [データベースの識別の概要](#)
- [Windows での Oracle9i サービスの概要](#)
- [表領域とデータ・ファイルの概要](#)
- [初期化パラメータ・ファイルの概要](#)
- [REDO ログ・ファイルの概要](#)
- [制御ファイルの概要](#)
- [ロールバック・セグメントの概要](#)
- [データ・ディクショナリの概要](#)

ユーザー名およびパスワードの概要

Oracle9i は、いくつかのデフォルト・データベース・アカウントとともにインストールされます。Database Configuration Assistant は、インストールが正常に完了すると、次を除くすべてのデフォルト・データベース・アカウントをロックし、無効にします。

- SYS
- SYSTEM
- SCOTT
- DBSNMP

他のアカウントはすべて、使用する前にロックを解除する必要があります。オラクル社では、すべてのユーザー・パスワードをインストール後すぐに変更することをお勧めします。

Database Configuration Assistant は、最低でも SYS、SYSTEM および DBSNMP アカウントをすべてのデータベースに作成します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。インストールされているコンポーネントに応じて、追加のアカウントが作成されます。これらのアカウントを使用する前に、アカウントのロックを解除し、パスワードを変更します。表 5-2 では、アカウントおよびパスワードを説明します。

関連資料：

- Oracle Performance Monitor for Windows NT でのパスワードの変更方法は、『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「Oracle for Windows NT Performance Monitor のパラメータの変更」を参照してください。
- Oracle セキュリティ手順およびセキュリティ最優良事例の詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照してください。
- セキュリティ管理の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

パスワードのロック解除および変更

インストールの最後に、複数の構成アシスタントが自動的に起動して、データベース環境と Oracle Net Services 環境を作成および構成します。このようなアシスタントの 1 つが Database Configuration Assistant です。Database Configuration Assistant は、データベース構成を終了する際に、データベース情報および「パスワード管理」ボタンのある画面を表示します。この画面で SYS パスワードおよび SYSTEM パスワードの変更を要求されます。「パスワード管理」ボタンを使用して、使用するユーザー名のみロック解除します。ユーザー名のロックを解除した後すぐにデフォルト・パスワードを変更することを強くお勧めします。

データベースのインストールおよび構成プロセス中にパスワードを変更するには、次のようにします。

1. 「Database Configuration Assistant」ウィンドウで、「パスワード管理」ボタンをクリックします。
2. ユーザー名を選択し、チェック・マークを外します。
3. 各ユーザー名に対して新規パスワードを入力し、パスワードを確認します。

注意： パスワードのロックを解除しても、新規パスワードを指定していない場合は、次にそのアカウントにアクセスするまでパスワードは無効になります。

または、インストール・プロセス後の任意の時点で、SQL*Plus を使用してアカウントのロックを解除し、パスワードを変更します。

インストール後にパスワードを変更するには、次のようにします。

1. SQL*Plus を起動します。

```
C:¥> sqlplus /NOLOG
```
2. SYSDBA で接続します。

```
SQL> CONNECT / AS SYSDBA
```

3. 表 5-1 に示す SQL コマンドに従ってパスワードを変更します。

表 5-1 アカウントおよびパスワードを管理するための SQL コマンド

処理	SQL 文
パスワードのロック解除	ALTER USER <i>username</i> ACCOUNT UNLOCK;
パスワードのロック	ALTER USER <i>username</i> ACCOUNT LOCK;
ロック解除されたアカウントの パスワードの変更	ALTER USER <i>username</i> IDENTIFIED BY <i>password</i> ;
ロックされたアカウントのパスワードの 変更	ALTER USER <i>username</i> IDENTIFIED BY <i>password</i> ACCOUNT UNLOCK;

制限付き SYS データベース・ロール権限の付与

任意のデータベース・ユーザーに、Oracle Enterprise Manager Diagnostic Pack を使用する
ための制限付き SYS データベース・ロール権限を付与できます。OEM_MONITOR ロールを付
与することにより、必要な SYS 権限へのアクセス権をユーザーに付与します。このロール
は、データベースのインストール時に作成され、次の SQL スクリプトで定義されます。

```
%ORACLE_HOME%\rdbms\admin\catsnmp.sql
```

関連資料： GRANT 文の詳細は、『Oracle9i SQL リファレンス』を参照してく
ださい。

ユーザー名およびパスワードの確認

表 5-2 では、管理ユーザー名およびパスワードを説明します。

表 5-2 管理ユーザー名およびパスワード

ユーザー名	パスワード	説明	関連資料
SYSTEM	ユーザー設定 ¹ または MANAGER	データベース管理タスクの実行に使用され ます。SYSTEM には、 AQ_ADMINISTRATOR_ROLE、DBA および SALES_HISTORY_ROLE データベース・ ロールが含まれています。	『Oracle9i データベース 管理者ガイド』
SYS	ユーザー設定 ^{1,2} または CHANGE_ON_ INSTALL ²	データベース管理タスクの実行に使用され ます。 ³	『Oracle9i データベース 管理者ガイド』
ANONYMOUS	ANONYMOUS	Oracle XML DB への HTTP アクセスを可能 にします。	なし

表 5-2 管理ユーザー名およびパスワード (続き)

ユーザー名	パスワード	説明	関連資料
CTXSYS	CTXSYS	CONNECT、DBA および RESOURCE データベース・ロールを持つ Oracle Text ユーザー名。	『Oracle Text リファレンス』
DBSNMP	DBSNMP	CONNECT および SELECT ANY DICTIONARY データベース・ロールを含みます。このロールおよびユーザーを削除する場合は、catnsnmp.sql を実行します。	『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』
LBACSYS	LBACSYS	Oracle Label Security 管理者ユーザー名。	『Oracle Label Security 管理者ガイド』
MDSYS	MDSYS	Oracle Spatial および Oracle Locator 管理者ユーザー名。	『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
ODM	ODM	ODM は、データ・マイニング操作を実行します。AQ_USER_ROLE、AQ_ADMINISTRATOR_ROLE および SELECT_CATALOG_ROLE ロールが含まれます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i Data Mining Administrator's Guide』 ■ 『Oracle9i Data Mining Concepts』
ODM_MTR	MTRPW	ODM_MTR は、データ・マイニング・サンプル・プログラムに対してデータ・リポジトリに関連付けられているアカウントです。SELECT_CATALOG_ROLE ロールが含まれます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i Data Mining Administrator's Guide』 ■ 『Oracle9i Data Mining Concepts』
OLAPSYS	MANAGER	OLAPSYS は、OLAP メタデータ構造の作成に使用する識別子です。 OLAPSYS には、OLAP_DBA、CONNECT および RESOURCE データベース・ロールが含まれます。	『Oracle9i OLAP User's Guide』
ORDPLUGINS	ORDPLUGINS	CONNECT および RESOURCE データベース・ロールを持つ Oracle <i>interMedia</i> Audio および Video ユーザー名。1つのセッションで、システム固有でないプラグイン形式を複数使用できます。	『Oracle <i>interMedia</i> ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
ORDSYS	ORDSYS	CONNECT、JAVAUSERPRIV および RESOURCE データベース・ロールを持つ Oracle <i>interMedia</i> Audio、Video、Locator および Image 管理者ユーザー名。	『Oracle <i>interMedia</i> ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』

表 5-2 管理ユーザー名およびパスワード（続き）

ユーザー名	パスワード	説明	関連資料
OUTLN	OUTLN	ストアド・アウトラインに関連付けられているメタデータを集中的に管理します。同一の SQL 文に対して同じ実行計画をメンテナンスできるプラン・スタビリティをサポートします。CONNECT および RESOURCE データベース・ロールを含みます。	<ul style="list-style-type: none">■ 『Oracle9i データベース概要』■ 『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』
SCOTT	TIGER	CONNECT および RESOURCE データベース・ロールを含みます。	『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』
WKSYS	WKSYS	Ultra Search システム・ディクショナリおよび PL/SQL パッケージの格納に使用されます。WKSYS には、CONNECT、CTXAPP、DBA、JAVASYSPRIV、JAVAUSERPRIV および RESOURCE データベース・ロールが含まれます。	Oracle Ultra Search のオンライン・ドキュメント
WMSYS	WMSYS	WMSYS スキーマは、Oracle Workspace Manager のすべてのメタデータ情報の格納に使用されます。WMSYS には、CONNECT、RESOURCE および WM_ADMIN_ROLE データベース・ロールが含まれます。	『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド -Workspace Manager』
XDB	CHANGE_ON_INSTALL	Oracle XML DB データおよびメタデータの格納に使用されます。CONNECT および RESOURCE データベース・ロールを含みます。	なし

¹ Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成する場合は、構成プロセスの最後に SYS パスワードと SYSTEM パスワードの変更を要求されます。

² SQL 文には、権限 AS SYSDBA または AS SYSOPER が含まれている必要があります。

³ SYS には、AQ_ADMINISTRATOR_ROLE、AQ_USER_ROLE、CONNECT、CTXAPP、DBA、DELETE_CATALOG_ROLE、EXECUTE_CATALOG_ROLE、EXP_FULL_DATABASE、GATHER_SYSTEM_STATISTICS、HS_ADMIN_ROLE、IMP_FULL_DATABASE、JAVA_ADMIN、JAVADEBUGPRIV、JAVA_DEPLOY、JAVAIDPRIV、JAVAUSERPRIV、JAVASYSPRIV、LOGSTDBY_ADMINISTRATOR、OEM_MONITOR、OLAP_DBA、RECOVERY_CATALOG_OWNER、RESOURCE、SELECT_CATALOG_ROLE および WKUSER のデータベース・ロールが含まれています。

関連資料：

- 『Oracle9i データベース概要』の「権限、ロールおよびセキュリティ・ポリシー」
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「Oracle データベース管理者」
- 『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「外部ユーザーおよびロールの管理」

データベースの識別の概要

Oracle9i データベースはグローバル・データベース名で識別されます。グローバル・データベース名は、データベース名と、データベースのあるネットワーク・ドメインで構成されます。グローバル・データベース名は、データベースを他のデータベースから一意に区別します。グローバル・データベース名は、Oracle9i データベースのインストール中に、Oracle Universal Installer の「データベースの識別」ウィンドウで要求された際に作成します。グローバル・データベース名の形式は、次のようになります。

database_name.database_domain

次に例を示します。

sales.us.acme.com

要素名	意味
sales	データベースに指定する名前です。データベース名部分は、英数字その他の文字を含む 8 文字以内の文字列です。データベース名は、init.ora ファイルの DB_NAME パラメータにも割り当てられます。
us.acme.com	データベースが置かれているドメインで、この部分によりグローバル・データベース名は一意になります。ドメイン部分は、英数字、ビリオド (.) その他の文字を含む 128 文字以内の文字列です。ドメイン名は、init.ora ファイルの DB_DOMAIN パラメータにも割り当てられます。

DB_NAME パラメータ（値 sales）と DB_DOMAIN 名パラメータ（値 us.acme.com）が結合して、SERVICE_NAMES パラメータに割り当てられるグローバル・データベース名値（値 sales.us.acme.com）を形成します。

システム識別子（SID）により、データベースを参照する固有の Oracle9i インスタンスが特定されます。SID は、同一コンピュータ上の他のデータベース・インスタンスからデータベース・インスタンスを一意に識別します。複数の Oracle ホームを使用すると、1 台のコンピュータに複数のアクティブな Oracle データベースを持つことができます。各データベースには一意のグローバル・データベース名が必要であり、同一コンピュータ上の各データベース・インスタンスには一意の SID が必要です。

SID 名は、「データベースの識別」ウィンドウでデータベース名として入力した値（入力後の変更も可能）から導出されます。SID には最大 64 文字の英数字を使用できます。

たとえば、Oracle データベースの SID とデータベース名が ORCL の場合、各データベース・ファイルは %ORACLE_BASE%\oradata\orcl ディレクトリにあり、初期化パラメータ・ファイルは %ORACLE_BASE%\admin\orcl\pfile ディレクトリにあります。ディレクトリ名 orcl は、DB_NAME パラメータの値で決まります。

Windows での Oracle9i サービスの概要

インストール後に 2 つの主な Oracle サービスが自動的に開始されます。

- OracleServiceSID (Oracle9i データベース・サービス)
- OracleHOME_NAME_TNSListener (Oracle9i データベース・リスナー・サービス)

Oracle Enterprise Manager コンポーネントをインストールした場合は、さらに次のサービスが自動的に開始されます。

- OracleHOME_NAMEAgent
- OracleHOME_NAMEManagementServer
- OracleHOME_NAMEHTTPServer

ただし、ネットワーク用の他のサービスや他の個々のコンポーネントは自動的に起動できません。

関連資料：

- 6-7 ページの「[コンポーネント別インストール後の構成タスク](#)」を参照してください。
- サービスの全リストおよび Windows の「コントロールパネル」で Oracle サービスを起動する手順は、『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「Windows で使用可能な Oracle9i サービス」を参照してください。

表領域とデータ・ファイルの概要

Oracle9i データベースは、表領域と呼ばれる、小さな論理領域に分割できます。各表領域は、1 つ以上の物理的なデータ・ファイルに対応します。データ・ファイルには、表領域や索引などの論理データベース構造体の内容が含まれます。データ・ファイルは、1 つの表領域と 1 つのデータベースにのみ対応付けることができます。

表 5-3 に、Oracle9i データベースの表領域およびデータファイルをリストします。データファイルは、%ORACLE_BASE%\oradata\DB_NAME ディレクトリにあります。

注意： Database Configuration Assistant で別の名前を指定しないかぎり、次の表で説明する表領域とデータ・ファイルはカスタム・データベースにも自動的に含まれています。

表 5-3 表領域とデータ・ファイル

表領域	データ・ファイル	内容
CWMLITE	CWMLITE01.DBF	OLAP 表領域。
DRSYS	Drsys01.dbf	Oracle Text 関連のスキーマ・オブジェクト。
EXAMPLE	EXAMPLE01.DBF	サンプル・スキーマ。
INDX	indx01.dbf	USERS 表領域のデータに対応付けられている索引。
ODM	ODM01.DBF	ODM および ODM_MTR スキーマ・オブジェクト。
TEMP	Temp01.dbf	SQL 文の処理中に作成された一時表と索引。GROUP BY、ORDER BY、DISTINCT など、多くのソートを含む SQL 文を実行する場合、この表領域の拡張が必要になることがあります。
TOOLS	Tools01.dbf	なし。このデータ・ファイルは、ユーザーがサード・パーティまたは Oracle のツールやコンポーネントをインストールする場合に使用するために作成されます。
SYSTEM	System01.dbf	Oracle9i データベースに必要な表、ビューおよびストアド・プロシージャの定義が含まれるデータ・ディクショナリ。この領域の情報は自動的に保守されます。SYSTEM 表領域は、すべての Oracle データベースにあります。

表 5-3 表領域とデータ・ファイル（続き）

表領域	データ・ファイル	内容
UNDOTBS	UNDOTBS01.DBF	データベースを自動 UNDO 管理モードで実行しているときに UNDO 情報のみを格納する専用表領域。UNDO 表領域には、1 つ以上の UNDO セグメントが含まれます。UNDO セグメントは、データベースのロールバック、UNDO または変更を使用されるトランザクション履歴をメンテナンスします。 すべての初期データベースは、自動 UNDO 管理モードで実行するように構成されています。
USERS	Users01.dbf	アプリケーション・データ。データを作成して表に入力すると、この領域にデータが入れられます。
XDB	xdb01.dbf	Oracle XML DB データおよびメタデータの格納に使用されます。

注意： Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の実行時に新しいリポジトリの作成を選択し、デフォルトの設定を受け入れた場合は、OEM_REPOSITORY という表領域と oem_repository.ora というデータ・ファイルも作成されます。

関連資料：

- 『Oracle9i データベース概要』の「表領域、データ・ファイルおよび制御ファイル」
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「表領域の管理」、「データ・ファイルの管理」および「UNDO 領域の管理」

初期化パラメータ・ファイルの概要

初期データベースには、1つのデータベース初期化パラメータ・ファイルが含まれます。このファイルは `%ORACLE_BASE%\admin\%DB_NAME%\pfile` ディレクトリにあります。

初期化パラメータ・ファイル `init.ora` は、インスタンスの開始に必要です。パラメータ・ファイルは、インスタンス構成パラメータのリストを含むテキスト・ファイルです。初期データベースの `init.ora` ファイルには、事前に構成されたパラメータがあります。初期データベースを使用するためにこのファイルを編集する必要はありません。

関連資料：

- Windows での Oracle9i データベース固有の初期化パラメータおよびそのデフォルト値のリストは、『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「Oracle9i for Windows でのデータベース指定」を参照してください。
- 初期化パラメータの詳細は、『Oracle9i データベース・リファレンス』を参照してください。

REDO ログ・ファイルの概要

初期データベースには、次の3つの REDO ログ・ファイルが含まれます。これらのファイルは `%ORACLE_BASE%\oradata\%DB_NAME` ディレクトリにあります。

REDO ログは、オンライン REDO ログまたはアーカイブ REDO ログのいずれかです。オンライン REDO ログは、Oracle データ・ファイルおよび制御ファイルに対して行われたすべての変更を記録する2つ以上の REDO ログ・グループのセットです。アーカイブ REDO ログは、オフラインの宛先にコピーされたオンライン REDO ログのコピーです。データベースが ARCHIVELOG モードで、自動アーカイブが使用可能になっている場合は、1つまたは複数のアーカイブ・プロセスが、満杯になった各オンライン REDO ログを1つ以上のアーカイブ・ログの宛先にコピーします。

注意： カスタム・データベースには、REDO ログ・ファイル `redo01.log`、`redo02.log` および `redo03.log` も自動的に含まれます。

関連資料：

- 『Oracle9i ユーザー管理バックアップおよびリカバリ・ガイド』
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「オンライン REDO ログの管理」

制御ファイルの概要

初期データベースには、次の 3 つの制御ファイルが含まれます。これらのファイルは %ORACLE_BASE%\oradata\%DB_NAME ディレクトリにあります。

制御ファイルは、データベースを起動および実行するときに必要な管理ファイルです。制御ファイルは、データベースの物理構造を記録します。たとえば、制御ファイルには、データベース名、データベースのデータ・ファイルと REDO ログ・ファイルの名前および場所が含まれます。

注意：

- カスタム・データベースには control01.ctl、control02.ctl および control03.ctl の各ファイルも自動的に含まれています。
 - 各データベースに対して最低 3 つの制御ファイルを（別個の物理ドライブに）保持し、CONTROL_FILES 初期化パラメータに各制御ファイルのリストを設定することをお薦めします。
-
-

関連資料： この初期化パラメータの値の設定方法は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「制御ファイルの管理」を参照してください。

ロールバック・セグメントの概要

Oracle9i データベースには、自身の UNDO（ロールバック）セグメントを管理する機能があります。管理者は、ロールバック・セグメントの数やサイズを慎重に計画および調整したり、特定のロールバック・セグメントにトランザクションを戦略的に割り当てる方法を決定したりする必要はなくなりました。Oracle9i では、管理者は、UNDO ブロックの競合、読込み一貫性の保持、領域使用量などの問題を考慮しながら、単一の UNDO 表領域内の UNDO 領域をデータベースに割り当てることもできます。

関連資料：

- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』
- 『Oracle9i ユーザー管理バックアップおよびリカバリ・ガイド』

データ・ディクショナリの概要

データ・ディクショナリは、データベースとその構造およびユーザーに関する参照情報を含む表とビューの集合体であり、保護されています。このディクショナリに格納されるデータには、次のものが含まれます。

- Oracle データベースのユーザー名
- 各ユーザーに与えられる権限およびロール
- スキーマ・オブジェクトの名前と定義（表、ビュー、スナップショット、索引、クラスタ、シノニム、順序、プロシージャ、ファンクションおよびパッケージなど）
- 整合性制約
- データベース・オブジェクトに対する領域の割当て
- 監査情報（様々なオブジェクトに誰がアクセスまたは更新したかなど）

関連資料：

- 『Oracle9i データベース概要』の「データ・ディクショナリ」
- 『Oracle9i データベース・リファレンス』の「静的データ・ディクショナリ・ビュー」

インストール後の構成タスク

この章では、インストール後の構成タスクを説明します。この章では適宜、構成タスクの実行手順に関するその他の参考資料も示しています。

この章の項目は次のとおりです。

- [NTFS ファイル・システムと Windows レジストリ権限](#)
- [パッチ・セット情報](#)
- [無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック](#)
- [コンポーネント別インストール後の構成タスク](#)

NTFS ファイル・システムと Windows レジストリ権限

Oracle データベースのファイル、ディレクトリおよびレジストリの設定は、認証されたデータベース管理者（DBA）のみが完全に制御できるように構成することをお勧めします。Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成している場合、または Oracle Database Upgrade Assistant を使用してデータベースをアップグレードしている場合は、その他の処理は必要ありません。

この項では、Oracle Universal Installer、Database Configuration Assistant および Oracle Database Upgrade Assistant により自動的に設定される権限と、これらの権限を手動で設定する手順について説明します。

次の内容について説明します。

- [ファイル権限](#)
- [NTFS ファイル・システムのセキュリティの設定](#)
- [Windows レジストリのセキュリティの設定](#)

関連資料： NTFS ファイル・システムと Windows レジストリの設定の変更の詳細は、Windows のドキュメントを参照してください。

ファイル権限

このリリースからは、Oracle ソフトウェアのインストール時またはアップグレード時に、Oracle Universal Installer、Database Configuration Assistant および Database Upgrade Assistant によりファイル権限が設定されます。

次の内容について説明します。

- [Oracle Universal Installer により設定されるファイル権限](#)
- [Database Configuration Assistant により設定されるファイル権限](#)
- [Database Upgrade Assistant により設定されるファイル権限](#)

Oracle Universal Installer により設定されるファイル権限

Oracle9i のインストール時に、デフォルトで、Oracle Universal Installer はソフトウェアを ORACLE_HOME にインストールします。

Oracle Universal Installer は、このディレクトリ、およびこのディレクトリ下のすべてのファイルとディレクトリに対して、次の権限を設定します。

- Administrators: すべての制御権限
- System: すべての制御権限
- Authenticated Users: 読み込み、実行および内容の一覧表示

重要： これらのアカウントがすでに存在し、より制限の多い権限を持っている場合は、最も制限の多い権限が保持されます。Administrators、System および Authenticated Users 以外のアカウントがすでに存在する場合は、これらのアカウントに対する権限が削除されます。

Database Configuration Assistant により設定されるファイル権限

データベース構成中に、Database Configuration Assistant は次のデフォルト位置にファイルおよびディレクトリをインストールします。

- %ORACLE_BASE%\admin¥database_name の下のディレクトリ内の管理者ファイル
database_name は、データベース名または SID です。
- %ORACLE_BASE%\oradata¥database_name の下のディレクトリ内のデータベース・ファイル
- %ORACLE_BASE%\oradata¥database_name の下の REDO ログ・ファイルおよび制御ファイル
- ディレクトリ %ORACLE_HOME%\¥database の下の SPFILESID.ORA ファイル

Database Configuration Assistant は、これらのディレクトリ、およびこのディレクトリ下のすべてのファイルとディレクトリに対して、次の権限を設定します。

- Administrators: すべての制御権限
- System: すべての制御権限

重要： これらのアカウントがすでに存在し、より制限の多い権限を持っている場合は、最も制限の多い権限が保持されます。Administrators および System 以外のアカウントがすでに存在する場合は、これらのアカウントに対する権限が削除されます。

Database Upgrade Assistant により設定されるファイル権限

旧バージョン (7.3.4、8.0.6、8.1.7、9.0.1) のデータベースが Oracle9i リリース 2 (9.2) にアップグレードされる際に、Database Upgrade Assistant はソフトウェアを次のディレクトリにインストールします。

- %ORACLE_BASE%\admin¥database_name の下のディレクトリ内の管理者ファイル
database_name は、データベース名または SID です。
- %ORACLE_BASE%\oradata¥database_name の下のディレクトリ内のデータベース・ファイル

- %ORACLE_BASE%\oradata\database_name の下の REDO ログ・ファイルおよび制御ファイル
- ディレクトリ %ORACLE_HOME%\database の下の SPFILESID.ORA ファイル

Database Upgrade Assistant は、これらのディレクトリ、およびこのディレクトリ下のすべてのファイルとディレクトリに対して、次の権限を設定します。

- Administrators: すべての制御権限
- System: すべての制御権限

重要： これらのアカウントがすでに存在し、より制限の多い権限を持っている場合は、最も制限の多い権限が保持されます。Administrators および System 以外のアカウントがすでに存在する場合は、これらのアカウントに対する権限が削除されます。

NTFS ファイル・システムのセキュリティの設定

認証されたユーザーのみがすべてのファイル・システム権限を持つようにするには、次のようにします。

1. Windows エクスプローラを表示します。
2. 各ディレクトリまたはファイルに対して次の権限を設定します。

ディレクトリ	グループおよび権限
ORACLE_HOME	<ul style="list-style-type: none">■ Administrators: すべての制御権限■ System: すべての制御権限■ Authenticated Users: 読み込み、実行および内容の一覧表示
<ul style="list-style-type: none">■ %ORACLE_BASE%\admin\database_name■ %ORACLE_BASE%\oradata\database_name■ %ORACLE_BASE%\oradata\database_name■ %ORACLE_HOME%\database\spfileSID.ora	<ul style="list-style-type: none">■ Administrators: すべての制御権限■ System: すべての制御権限

注意： Oracle9i データベースは、Windows の LocalSystem 組込みセキュリティ・アカウントを使用します。したがって、Oracle9i データベースを実行しているローカル・コンピュータの System アカウントにファイル権限を付与する必要があります。

関連資料： NTFS ファイル・システムと Windows レジストリの設定の変更方法は、Windows のオンライン・ヘルプを参照してください。

Windows レジストリのセキュリティの設定

Windows レジストリの HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE で、Oracle9i の DBA やシステム管理者でないユーザーから書き込み権限を削除することをお勧めします。

書き込み権限を削除するには、次のようにします。

1. レジストリ エディタを開きます。
2. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE に移動します。
3. メイン・ウィンドウから「セキュリティ」→「アクセス権」を選択します。
「レジストリ キーのアクセス権」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. Oracle9i の DBA やシステム管理者以外のユーザーから書き込み権限を削除します。
SYSTEM アカウントは、Oracle9i データベースを実行するアカウントであるため、すべての制御権限を持つ必要があります。
5. Oracle アプリケーションを実行する必要があるユーザー・アカウントに読み込み権限があることを確認します。
6. 「OK」を選択します。
7. レジストリ エディタを終了します。

パッチ・セット情報

Oracle データベースのインストールでは、たとえば Oracle9i リリース 1 (9.0.1) のように、常にベース・リリースがインストールされます。ベース・リリースのインストールが正常に終了した後で、最新のパッチ・セット・リリースをインストールすることをお勧めします。

無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック

「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」インストール・タイプで Oracle9i データベースが作成されると、utlrlp.sql スクリプトが自動的に実行されます。一方、「カスタム」インストール・タイプで Oracle9i データベースが作成されると、このスクリプトは自動的に実行されません。データベースの作成、アップグレードおよび移行後は、utlrlp.sql スクリプトを実行することをお勧めします。このスクリプトは、INVALID な状態にある可能性のある PL/SQL モジュール（パッケージ、プロシージャ、型などを含む）をすべて再コンパイルします。この手順はオプションですが、インストール後ではなくインストール中に再コンパイルが行われるようにするために、お勧めします。

注意： スクリプトの実行中は、データベースで他の DDL 文を実行しないでください。また STANDARD および DBMS_STANDARD パッケージを有効にしておく必要があります。

1. SQL*Plus を起動します。

```
C:¥> sqlplus
```

2. データベースに SYS アカウントで接続します。

```
SQL> CONNECT SYS/PASSWORD AS SYSDBA
```

PASSWORD は、インストール後に変更しないかぎり、デフォルトでは CHANGE_ON_INSTALL になります。

3. データベースを開始します（必要な場合）。

```
SQL> STARTUP
```

4. utlrlp.sql スクリプトを実行します。

```
SQL> @%ORACLE_HOME%¥rdbms¥admin¥utlrlp.sql
```

コンポーネント別インストール後の構成タスク

コンポーネントによっては、個別にインストール後の構成タスクが必要です。次の項に、構成要件および固有の構成手順に関する項またはドキュメントを示します。

- [Management Pack for Oracle Applications](#)
- [メッセージ・ゲートウェイ](#)
- [Oracle Advanced Security](#)
- [Oracle Administration Assistant for Windows NT](#)
- [Oracle Enterprise Manager](#)
- [Oracle Enterprise Manager Web Site](#)
- [Oracle HTTP Server](#)
- [Oracle interMedia および Oracle Spatial](#)
- [Oracle Internet Directory](#)
- [Oracle OLAP API](#)
- [Oracle for Windows NT Performance Monitor](#)
- [Oracle Real Application Clusters](#)
- [Oracle Services for Microsoft Transaction Server](#)
- [Oracle Workflow](#)
- [Oracle XML DB](#)
- [PL/SQL 外部プロシージャ](#)
- [Pro*COBOL](#)
- [共有サーバー・サポート](#)
- [Oracle Net Services](#)

Management Pack for Oracle Applications

インストールの完了後、追加の構成タスクを実行すると、Management Pack for Oracle Applications を使用できます。

関連資料：『Oracle Management Pack for Oracle Applications スタート・ガイド』

メッセージ・ゲートウェイ

Oracle9i アドバンスト・キューイングの機能であるメッセージ・ゲートウェイには、追加の構成が必要です。

関連資料：『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - アドバンスト・キューイング』の「メッセージ・ゲートウェイの設定」

Oracle Administration Assistant for Windows NT

このツールの実行には、Microsoft 管理コンソール（使用可能な最新バージョンを推奨）および HTML Help 1.2 以上が必要です。Microsoft 管理コンソールは Windows 2000 には付属していますが、Windows NT 4.0 を使用している場合は手動でインストールする必要があります。

関連資料：

- Microsoft のドキュメント
- <http://www.microsoft.com/japan/> にアクセス

Oracle Advanced Security

認証、暗号化、整合性のサポートおよびエンタープライズ・ユーザー・セキュリティを構成する必要があります。

関連資料：『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』

Oracle Enterprise Manager

次の 2 つのケースでは、インストール後の構成が必要になります。

ケース 1: Oracle9i データベースのインストール・タイプで Oracle Management Server をインストールし、Management Server にログオンすることによって Oracle Enterprise Manager を起動する場合は、インストール後に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を起動して、リポジトリを使用し、そのサービスを作成するように Oracle Management Server を構成する必要があります。

ケース 2: Oracle Management Server をインストールし、既存のリリース 2.x リポジトリをリリース 2 (9.2) リポジトリにアップグレードする場合は、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を起動してリポジトリをアップグレードする必要があります。

関連資料：『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』の「Management Server の構成および管理」

Oracle Enterprise Manager Web Site

Oracle Enterprise Manager Web Site を使用する前に、インストール後の構成手順を完了する必要があります。

関連資料：『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』の「Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager コンソールの実行」

Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server の起動、停止および状態確認ができます。

関連資料：

- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の「HTTP サーバーの管理」

Oracle *interMedia* および Oracle Spatial

これらのコンポーネントは、Oracle9i データベースと同時にインストールされる際に自動的に構成されます。

Oracle9i データベースとは別のインストールでこれらのコンポーネントをインストールした場合、または Oracle7 listener.ora ファイルおよび tnsnames.ora ファイルを手動で Oracle9i ネットワーク・ディレクトリにコピーした場合は、構成タスクを手動で実行する必要があります。

関連資料： 手順は、『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「インストール後の構成タスク」を参照してください。

Oracle Internet Directory

次の内容について説明します。

- [アップグレード後のタスク](#)
- [UNIX エミュレーション・ユーティリティ](#)

アップグレード後のタスク

Oracle Internet Directory に対して、次のアップグレード後のタスクを実行します。

- [init.ora ファイルの JOB_QUEUE_PROCESSES パラメータ](#)
- [デフォルトのサブスクリバ構成](#)

init.ora ファイルの JOB_QUEUE_PROCESSES パラメータ データベースの init.ora ファイルの JOB_QUEUE_PROCESSES パラメータを、次の値に設定します。

- 単一ノードの場合は、パラメータを 1 以上に設定します。
- 複数ノードの場合は、パラメータを (Number of nodes - 1) に設定します。

デフォルトのサブスクライバ構成 次の DN、"cn=Common,cn=Products,%RootOracleContextDN%" で特定されるエントリのルート **Oracle コンテキスト** に、次の情報を追加する必要があります。デフォルトでは、RootOracleContextDN は "cn=OracleContext" です。表 6-1 に、ルート Oracle コンテキストの属性を示します。

表 6-1 ルート Oracle コンテキストの属性

属性	説明
サブスクライバ検索ベース (orclSubscriberSearchBase)	この属性は、すべてのサブスクライバが配置される、 ディレクトリ情報ツリー のノードを示します。
サブスクライバ・ニックネーム属性 (orclSubscriberNickNameAttribute)	この属性は、サブスクライバ検索ベースでサブスクライバを検索する際に使用するニックネーム属性を示します。
デフォルト・サブスクライバ (orclDefaultSubscriber)	この属性は、組織のルートを示します (OiD Configuration Assistant の「サブスクライバのアップグレード」画面で指定した値と同じ)。

次の DN、"cn=Common,cn=Products,cn=oracleContext,subscriber DN" で特定されるエントリのサブスクライバ固有の **Oracle コンテキスト** に、次の情報を追加する必要があります。表 6-2 に、デフォルト・サブスクライバ Oracle コンテキストの属性を示します。

表 6-2 デフォルト・サブスクライバ Oracle コンテキストの属性

属性	説明
ユーザー検索ベース (orclCommonUserBase)	この属性は、すべてのユーザーが配置される、DIT のノードを示します。アップグレード時に、この属性値は subscriber DN 値に設定されます。 注意： この属性が設定されている場合は、ルート Oracle コンテキストの下のパスワード・ポリシーが適用されます。
ユーザー・ニックネーム属性 (orclCommonNickNameAttribute)	この属性は、ユーザー検索ベースでユーザーを検索する際に使用するニックネーム属性を示します。
グループ検索ベース (orclCommonGroupSearchBase)	この属性は、すべてのグループが配置される、DIT のノードを示します。

注意： これらの属性は、Oracle Directory Manager を使用して更新できません。

関連資料： これらの属性の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

パスワード・ポリシーの構成 (DN "cn=pwdpolicyentry,cn=Oracle Internet Directory" にある) 以前のリリースの Oracle Internet Directory にパスワード・ポリシーが存在する場合は、このポリシーが、ルート Oracle コンテキストとデフォルト・サブスクライバ Oracle コンテキストの両方に適用されます。ポリシー "cn=pwdpolicyentry,cn=Oracle Internet Directory" を含む元の DN は、以前のリリースから削除されます。それ以外の場合、デフォルト・パスワードは、サブスクライバ Oracle コンテキスト作成の一環として設定されます。デフォルトでは、デフォルト・サブスクライバのパスワード・ポリシーは、次の値に設定されます。

- ユーザー・パスワードは、60 日で失効します (pwdmaxage=5184000)。
- アカウントは、連続して 10 回ログイン試行に失敗した場合にロックされます (pwdlockout=1 および pwdmaxfailure=10)。
- パスワード構文チェックは有効になり、ユーザー・パスワードの最小の長さは 5 文字です (pwdchecksyntax=1 および pwminlength=5)。
- ユーザー・パスワードには、少なくとも 1 つの数値が含まれている必要があります (orclpwdalphanumeric=1)。

注意： 前述の属性値は、"cn=PwdPolicyEntry,cn=Common,cn=Products,cn=oracleContext,<subscriber DN>" にあります。

ルート Oracle コンテキストの下のパスワード・ポリシーは、ルート DSE の下のすべてのエントリに適用されます。ただし、ルート Oracle コンテキストの下のエントリには適用されません。

関連資料： デフォルト・パスワード・ポリシーの変更方法の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

アップグレードされた Oracle Internet Directory が他の Oracle コンポーネントと統合される場合は、適切なアクセス制御ポリシーを設定して、Oracle コンポーネントに必要な権限を付与する必要があります。

ユーザー・データのアップグレード

この作業は、ユーザー・データのアップグレードの実行を選択した場合に、インストール後の手順として実行する必要があります。

パスワード変換 Oracle Internet Directory リリース 9.2 のパスワード形式は BASE-64 です。16 進数で保存されている古いパスワードは変換されます。変換を実行するには、次のようにします。

1. 次のコマンドを使用して `ldapsearch` を実行し、暗号化されたすべてのユーザー・パスワードをファイルに出力します。この場合は、`%ORACLE_HOME%\ldap\install\pwdin.ldif` が出力ファイルとして使用されます。

```
%ORACLE_HOME%\bin\ldapsearch -L -h OID host_name -p OID Non-SSL port -D OID Super User DN -w OID Super User Password -b "" -s sub "objectclass=*" dn userpassword > %ORACLE_HOME%\ldap\install\pwdin.ldif
```

2. 次のコマンドを発行して `passwordconvert` ツールを使用し、`%ORACLE_HOME%\ldap\install\pwdin.ldif` のユーザー・パスワードを変換して `%ORACLE_HOME%\ldap\install\pwdout.ldif` に出力します。

```
%ORACLE_HOME%\bin\passwordconvert -m hex2base64 -f modify  
%ORACLE_HOME%\ldap\install\pwdin.ldif %ORACLE_HOME%\ldap\install\pwdout.ldif
```

3. 次のコマンドを発行して `ldapmodify` を使用し、BASE-64 でエンコードされたユーザー・パスワードをアップロードします。

`%ORACLE_HOME%\ldap\install\pwdout.ldif` 内のパスワードを、Oracle Internet Directory にアップロードします。

```
%ORACLE_HOME%\bin\ldapmodify -h OID host_name -p OID Non-SSL port -D OID Super User DN -w OID Super User Password > -f %ORACLE_HOME%\ldap\install\pwdout.ldif
```

UNIX エミュレーション・ユーティリティ

Oracle Internet Directory のシェル・スクリプト・ツール (`BULKLOAD.SH`、`BULKDELETE.SH`、`BULKMODIFY.SH`、`CATALOG.SH` および `LDAPREPL.SH`) を Windows で実行するには、Windows 用の UNIX エミュレーション・ユーティリティをダウンロードする必要があります。2 つの認定サード・パーティ・ソフトウェア・ベンダーがこのユーティリティを提供しています。

- Cygnus

<http://sources.redhat.com/cygwin/>

- MKS Toolkit

<http://www.datafocus.com/products/>

関連資料：『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

Oracle Net Services

Oracle Net Configuration Assistant は、Oracle ネットワークの構成を補助するツールです。

Oracle Net Services をインストールした場合、Oracle Net Configuration Assistant は、クライアント・コンピュータおよび Oracle9i データベース・サーバーのネットワーク構成を自動的に順を追って指示します。

インストール後に、Oracle Net Configuration Assistant および Oracle Net Manager などのツールを使用しても Oracle ネットワークを構成できます。

関連資料：

- 『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』および両方のツールで使用可能なオンライン・ヘルプを参照してください。
- 使用可能な構成の選択に関する説明は、3-8 ページの「[ネットワークの構成](#)」を参照してください。

Oracle OLAP API

OLAP API を使用する Java プログラムを作成する前に、ファイルを Java 開発環境でアクセスできるようにする必要があります。

関連資料：『Oracle9i OLAP Developer's Guide to the OLAP API』の「Setting Up the Development Environment」

Oracle for Windows NT Performance Monitor

Oracle for Windows NT Performance Monitor を使用して Oracle 固有のカウンタを表示する前に、%ORACLE_HOME%\bin ディレクトリにある OperfCfg.exe を使用して SYSTEM パスワードを指定する必要があります。

SYSTEM パスワードを設定するには、次のように入力します。

```
C:¥> operfcfg.exe -U SYSTEM -P password [-D database_name]
```

関連資料： Oracle for Windows NT Performance Monitor の追加情報は、『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』および『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』を参照してください。

Oracle Real Application Clusters

高可用性と Oracle Enterprise Manager の機能を使用可能にするには、インストール後の構成手順を実行する必要があります。

関連資料：『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』

Oracle Services for Microsoft Transaction Server

Windows NT へのインストールの場合、Oracle9i をインストールする前に Microsoft 管理コンソール (MMC) をインストールしていないと、OracleMTSRecoveryService サービスを手動で起動し、ステータスを「自動」に変更する必要があります。

次のタスクを実行すると、Oracle Services for Microsoft Transaction Server を使用できます。

- Microsoft Transaction Server 管理者アカウントの作成
- データベース・サーバー・レベルのトランザクション・リカバリ・ジョブのスケジュール

関連資料：『Oracle Services for Microsoft Transaction Server 開発者ガイド』の「リカバリのシナリオ管理」

Oracle Workflow

次のような、いくつかの構成タスクを実行する必要があります。

- init.ora パラメータ・ファイルの編集
- Web サーバーのインストールおよび構成
- ベース URL の確認
- Oracle Workflow Monitor および HTML ヘルプの設定

関連資料：

- 『Oracle Workflow Server インストレーション・ノート』
- 『Oracle Workflow Client インストレーション・ノート』
- 『Oracle Workflow ガイド』

Oracle XML DB

次のタスクの詳細は、『Oracle9i XML データベース開発者ガイド -Oracle XML DB』を参照してください。

- Oracle XML DB の再インストール
- Oracle XML DB 表領域の構成またはカスタマイズ
- FTP、HTTP/WebDAV ポート番号の構成

関連資料：『Oracle9i XML データベース開発者ガイド -Oracle XML DB』の付録 A

PL/SQL 外部プロシージャ

構成は、使用するネットワーク構成ファイルに依存します。ほとんどすべての場合に、構成は自動です。ただし、リリース 8.0.3 より前の `tnsnames.ora` ファイルおよび `listener.ora` ファイルをリリース 2 (9.2) のデータベースとともに使用している場合は、手動構成が必要です。

関連資料：『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「Windows 用アプリケーションの開発」

Pro*COBOL

Pro*COBOL は特定のコンパイラをサポートします。

関連資料：『Pro*COBOL for Windows プリコンパイラ・スタート・ガイド』の「Pro*COBOL の概要」

共有サーバー・サポート

構成は、サポートをインストールした方法によって異なります。「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」インストール・タイプで Oracle9i データベースをインストールした場合、共有サポートは構成されていません。Database Configuration Assistant を使用して Oracle9i データベースを作成した場合は、共有サーバー・サポートと専用サーバー・サポートのどちらかを選択しています。

関連資料：

- 『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「インストール後の構成タスク」
- [第 3 章「データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択」](#)

インストール可能な個々のコンポーネント

この付録では、各インストール・タイプで使用可能な上位コンポーネントについて説明します。「カスタム」インストール・タイプは、現在のカテゴリに含まれるすべてのコンポーネントのインストールで使用可能であるため、3種類の最上位コンポーネントでは、「カスタム」インストール・タイプは記載されていません。

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle9i Database](#) のコンポーネント
- [Oracle9i Client](#) のコンポーネント
- [Oracle9i Management and Integration](#) のコンポーネント
- [コンポーネントの説明](#)

注意： 一部のコンポーネントは、「カスタム」インストールでのみインストールされます。そのようなコンポーネントの場合は、この付録の表の他のインストール・タイプに「×」と表示されます。

関連項目： インストールされたすべてのコンポーネントおよび機能 (Required Support Files や Common Files などの下位コンポーネントを含む) のログ・ファイルに関する情報は、4-33 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照してください。

Oracle9i Database のコンポーネント

表 A-1 には、最上位の Oracle9i データベース・コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントがアルファベット順に示されています。

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
Advanced Queueing API	○	○	○
Advanced Replication ¹	○ ²	○	○
Database Configuration Assistant	○	○	○
Generic Connectivity	○	○	○
iSQL*Plus	○	○	○
Object Type Translator	○	○	○
Oracle Administration Assistant for Windows NT	○	○	○
Oracle Advanced Security。次のコンポーネントを含む。	○	×	○
■ 認証サポート。次のコンポーネントを含む。	○	×	○
DCE (SSO サポートあり)	○	×	○
Entrust	○	×	○
Kerberos (SSO サポートあり)	○	×	○
RADIUS (スマート・カード、トークン・カードおよびバイオメトリック用)	○	×	○
■ 暗号化と整合性のサポート。次のコンポーネントを含む。	○	×	○
DES40 Encryption	○	×	○
DES56 Encryption	○	×	○
3DES_112 Encryption (2 キー・オプション)	○	×	○
3DES_168 Integrity (3 キー・オプション)	○	×	○
MD5 Integrity	○	×	○
RC4_40 Encryption	○	×	○
RC4_56 Encryption	○	×	○
RC4_128 Encryption	○	×	○
RC4_256 Encryption	○	×	○

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
SHA-1 Integrity	○	×	○
■ エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ。次のコンポーネントを含む。	○	×	○
Oracle Enterprise Login Assistant	○	×	○
Oracle Enterprise Security Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications として使用可能)	○	×	○
Oracle Wallet Manager	○	×	○
■ Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート	○	×	○
Oracle C++ Call Interface	○	○	○
Oracle Call Interface	○	○	○
Oracle COM Automation	○	○	○
Oracle Connection Manager	×	×	×
Oracle Data Mining	○	×	○
Oracle Database Upgrade Assistant	○	○	○
Oracle Database Utilities	○	○	○
Oracle Dynamic Services	○	○	○
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant	○	○	○
Oracle Enterprise Manager。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ Oracle Enterprise Manager Client。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
Oracle Enterprise Manager コンソール	○	○	○
■ Oracle Enterprise Manager Integrated Applications。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
Oracle Data Guard Manager	○	○	○
Oracle Directory Manager	○	○	○
Oracle Enterprise Security Manager	○	○	○
Oracle Forms Server Manager	○	○	○
Oracle LogMiner Viewer	○	○	○
Oracle Policy Manager	○	○	○

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント（続き）

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
Oracle Spatial Index Advisor	○	○	○
Oracle Text Manager	○	○	○
SQL*Plus Worksheet	○	○	○
■ Oracle Enterprise Manager Management Packs。次のコンポーネントを含む。	○	×	×
Oracle Change Management Pack	○	×	×
Oracle Diagnostics Pack	○	×	×
Oracle Management Pack for Oracle Applications	○	×	×
Oracle Standard Management Pack	×	○	×
Oracle Tuning Pack	○	×	×
■ Oracle Enterprise Manager Paging Server	○	○	○
■ Oracle Enterprise Manager Quick Tours	○	○	○
■ Oracle Enterprise Manager Web Site ³	○	○	○
■ Oracle Intelligent Agent（Data Collection Services を含む）	○	○	○
■ Oracle Management Server ⁴	○	○	○
Oracle HTTP Server。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ Apache Configuration for Oracle Java Server Pages	○	○	○
■ Apache Configuration for Oracle XML Developer's Kit	○	○	○
■ Apache JServ。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
JSDK	○	○	○
Sun JDK	○	○	○
■ Apache Web Server Files	○	○	○
■ Business Components for Java（BC4J）Runtime	○	○	○
■ Oracle Mod PL/SQL Gateway	○	○	○
■ Oracle Perl Interpreter	○	○	○
Oracle <i>interMedia</i> 。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Annotator	○	○	○

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
■ Oracle <i>interMedia</i> Audio	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Client Option	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Java Client	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Image	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Locator	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Video	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Web Client	○	○	○
Oracle Internet Directory Client	○	○	○
Oracle JDBC ドライバ	○	○	○
Oracle Migration Workbench	×	×	×
Oracle Label Security	×	×	×
Oracle Names	×	×	×
Oracle Objects for OLE	○	○	○
Oracle ODBC ドライバ	○	○	○
Oracle OLAP	○	×	×
Oracle OLAP API	○	×	○
Oracle Programmer	○	○	○
Oracle Net Services ⁵	○	○	○
Oracle Partitioning	○	×	○
Oracle for Windows NT Performance Monitor	×	×	×
Oracle Provider for OLE DB	○	○	○
Oracle Procedural Gateway for APPC	×	×	×
Oracle Procedural Gateways for IBM MQSeries	×	×	×
Oracle Real Application Clusters ⁶	○	×	×
Oracle Remote Configuration Agent	○	○	○
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	○	○	○
Oracle SNMP Agent	○	○	○

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント（続き）

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
Oracle SOAP Client	○	○	○
Oracle SOAP for JServ	○	○	○
Oracle SOAP Server	○	○	○
Oracle Spatial	○	○	○
Oracle SQLJ	○	○	○
Oracle Text	○	○	○
Oracle Trace	○	○	○
Oracle Transparent Gateway for IBM DRDA	×	×	×
Oracle Transparent Gateway for Microsoft SQL Server	×	×	×
Oracle Transparent Gateway for Sybase	×	×	×
Oracle Transparent Gateway for Teradata	×	×	×
Oracle Universal Installer	○	○	○
Oracle Ultra Search Middle Tier	○	○	○
Oracle Ultra Search Server	○	○	○
Oracle Workflow Manager	○	○	○
Oracle Workspace Manager	○	○	○
Oracle XML Developer's Kit	○	○	○
Oracle XML SQL Utility	○	○	○
Oracle JVM。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ JVM	○	○	○
■ Oracle Java Tools	○	○	○
■ Oracle JVM Accelerator	○	○	○
Oracle9i Development Kit	○	○	○
Oracle9i Globalization Support	○	○	○
Oracle9i（Oracle9i データベース）。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ Oracle Database Demos	○	○	○
■ PL/SQL	○	○	○

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント（続き）

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
■ PL/SQL Embedded Gateway	○	○	○
Oracle9i Syndication Server	○	○	○
Oracle9i Windows Documentation（インストレーション・ガイド、リリース・ノートなどのリリース・ドキュメント）	○	○	○
PL/SQL	○	○	○
Pro*C/C++	○	×	○
Pro*COBOL	○	×	○
Replication Management API	○	○	○
Sample Schema Demos	○	○	○
SQL*Plus	○	○	○

- ¹ すべてのデータベース・エディションで更新可能なマテリアライズド・ビューを作成できます。
- ² マルチマスター・レプリケーションは Enterprise Edition でのみ使用できます。
- ³ Oracle Enterprise Manager Web Site には、ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager の Web リスナーとして構成済の Oracle HTTP Server が付属しています。
- ⁴ Oracle Management Server には、Enterprise Manager Reporting Web Site およびブラウザベースの Enterprise Manager の Web リスナーとして構成済の Oracle HTTP Server が付属しています。
- ⁵ Oracle9i データベースのインストール・タイプで Oracle Net Services をインストールすると、検出されたネットワークিং・プロトコルに対する Oracle Protocol Support が自動的にインストールされます。
- ⁶ Oracle Real Application Clusters は、クラスタが検出された場合にのみインストールされます。

関連項目： これらのコンポーネントの説明とリリース番号の情報は、A-16 ページの「[コンポーネントの説明](#)」を参照してください。

Oracle9i Client のコンポーネント

表 A-2 には、最上位の Oracle9i クライアント・コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントがアルファベット順に示されています。

表 A-2 Oracle9i Client の使用可能なコンポーネント

コンポーネント	管理者	ランタイム
Advanced Queueing API	○	×
Object Type Translator	○	×
Oracle Administrative Assistant for Windows NT	○	×
Oracle Advanced Security。次のコンポーネントを含む。	○	×
■ 認証サポート。次のコンポーネントを含む。	×	×
CyberSafe (SSO サポートあり)	×	×
DCE (SSO サポートあり)	×	×
Entrust	×	×
Kerberos (SSO サポートあり)	×	×
RADIUS (スマート・カード、トークン・カードおよびバイオメトリック用)	×	×
■ 暗号化と整合性のサポート。次のコンポーネントを含む。	○	×
3DES_112 Encryption (2 キー・オプション)	○	×
3DES_168 Integrity (3 キー・オプション)	○	×
DES40 Encryption	○	×
DES56 Encryption	○	×
MD5 Integrity	○	×
RC4_40 Encryption	○	×
RC4_56 Encryption	○	×
RC4_128 Encryption	○	×
RC4_256 Encryption	○	×
SHA-1 Integrity	○	×
■ エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ。次のコンポーネントを含む。	○	×
Oracle Enterprise Login Assistant	○	×

表 A-2 Oracle9i Client の使用可能なコンポーネント（続き）

コンポーネント	管理者	ランタイム
Oracle Enterprise Security Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications として使用可能)	○	×
Oracle Wallet Manager	○	×
■ Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート	○	×
Oracle Call Interface	○	×
Oracle Enterprise Manager。次のコンポーネントを含む。	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Client。次のコンポーネントを含む。	○	×
■ Oracle Enterprise Manager コンソール	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Integrated Applications。次のコンポーネントを含む。	○	×
Oracle Data Guard Manager	○	×
Oracle Directory Manager	○	×
Oracle Enterprise Security Manager	○	×
Oracle Forms Server Manager	○	×
Oracle LogMiner Viewer	○	×
Oracle Policy Manager	○	×
Oracle Spatial Index Advisor	○	×
Oracle Text Manager	○	×
SQL*Plus Worksheet	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Management Packs。次のコンポーネントを含む。	○	×
Oracle Change Management Pack	○	×
Oracle Diagnostics Pack	○	×
Oracle Management Pack for Oracle Applications	○	×
Oracle Standard Management Pack	×	×
Oracle Tuning Pack	○	×
Oracle HTTP Server ¹	×	×
Oracle <i>interMedia</i> Annotator	○	×
Oracle <i>interMedia</i> Client Option	○	×

表 A-2 Oracle9i Client の使用可能なコンポーネント（続き）

コンポーネント	管理者	ランタイム
Oracle <i>interMedia</i> Java Client	○	×
Oracle <i>interMedia</i> Web Client	○	×
Oracle Internet Directory Client	○	×
Oracle Java Tools	○	×
Oracle JDBC ドライバ	○	○
Oracle Migration Workbench	×	×
Oracle Net Services	○	×
Oracle Objects for OLE	○	×
Oracle ODBC ドライバ	○	×
Oracle Programmer	○	×
Oracle Provider for OLE DB	○	×
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	○	×
Oracle SQLJ	○	×
Oracle Syndication Server	○	×
Oracle Ultra Search Middle Tier	○	×
Oracle Universal Installer	○	×
Oracle Utilities	○	×
Oracle Workflow Builder	○	×
Oracle Workflow Mailer	○	×
Oracle XML Developer's Kit	○	×
Oracle XML SQL Utility	○	×
Oracle9i Globalization Support	○	○
Oracle9i Windows Documentation（インストール・ガイド、リリース・ノートなどのリリース・ドキュメント）	○	×
PL/SQL	○	×
Pro*C/C++	○	×
Pro*COBOL	○	×

表 A-2 Oracle9i Client の使用可能なコンポーネント（続き）

コンポーネント	管理者	ランタイム
Remote Configuration Agent	○	○
Replication Management API	○	×
SQL*Plus	○	○

¹ Oracle HTTP Server とともに自動的にインストールされるサブコンポーネントのリストは、A-23 ページの「[Oracle HTTP Server](#)」を参照してください。

関連項目： これらのコンポーネントの説明とリリース番号の情報は、A-16 ページの「[コンポーネントの説明](#)」を参照してください。

Oracle9i Management and Integration のコンポーネント

表 A-3 には、最上位の Oracle9i Management and Integration コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントがアルファベット順に示されています。

注意： この表には、Oracle9i データベースが現在インストールされていない場合に、「Oracle Internet Directory」インストール・タイプでインストールされるすべてのコンポーネントを示します。

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント

コンポーネント	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory
Advanced Queueing API	○	○
Advanced Replication Management API	×	○
Database Configuration Assistant	×	○
Generic Connectivity	×	○
Object Type Translator	×	○
Oracle Advanced Security。次のコンポーネントを含む。	○	○
■ Oracle Enterprise Login Assistant	○	○
■ Oracle Enterprise Security Manager（Oracle Enterprise Manager Integrated Applications）	○	×
■ Oracle Wallet Manager	○	○

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント（続き）

コンポーネント	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory
Oracle Call Interface	×	○
Oracle Connection Manager	×	×
Oracle Database Upgrade Assistant	×	○
Oracle Dynamic Services Server	×	○
Oracle Enterprise Manager。次のコンポーネントを含む。	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Client。次のコンポーネントを含む。	○	×
Oracle Enterprise Manager コンソール	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Integrated Applications。次のコンポーネントを含む。	○	×
OLAP Instance Manager	○	×
Oracle Data Guard Manager	○	×
Oracle Directory Manager	○	○
Oracle Enterprise Security Manager	○	×
Oracle Forms Server Manager	○	×
Oracle LogMiner Viewer	○	×
Oracle Policy Manager	○	×
Oracle Spatial Index Advisor	○	×
Oracle Text Manager	○	×
SQL*Plus Worksheet	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Management Packs。次のコンポーネントを含む。	○	×
Oracle Change Management Pack	○	×
Oracle Diagnostics Pack	○	×
Oracle Management Pack for Oracle Applications	○	×
Oracle Standard Management Pack	×	×
Oracle Tuning Pack	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Paging Server	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Quick Tours	○	×

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory
■ Oracle Management Server ¹	○	×
■ Oracle Enterprise Manager Web Site ¹	○	×
■ Oracle Intelligent Agent	○	○
Oracle HTTP Server ²	○	○
■ Apache Configuration for Oracle Java Server Pages	○	○
■ Apache Configuration for Oracle XML Developer's Kit	○	○
■ Apache JServ。次のコンポーネントを含む。	○	○
JSDK	○	○
Sun JDK	○	○
■ Apache Web Server Files	○	○
■ Oracle Mod PL/SQL Gateway	○	○
■ Oracle Perl Interpreter	○	○
Oracle <i>interMedia</i> 。次のコンポーネントを含む。	○	○
■ <i>interMedia</i> Audio	○	○
■ <i>interMedia</i> Annotator	○	○
■ <i>interMedia</i> Client Option	×	○
■ <i>interMedia</i> Image	○	○
■ <i>interMedia</i> Java Client	○	○
■ <i>interMedia</i> Locator	○	○
■ <i>interMedia</i> Video	○	○
Oracle Internet Directory Client	×	○
Oracle Internet Directory Client Toolset	×	○
Oracle Internet Directory Configuration Assistant	×	○
Oracle Internet Directory Server	×	○
Oracle JDBC ドライバ	○	○
Oracle Names	×	×

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory
Oracle Net Services	○	○
Oracle Objects for OLE	×	×
Oracle ODBC ドライバ	×	×
Oracle Partitioning	×	×
Oracle Provider for OLE DB	×	×
Oracle Remote Configuration Agent	×	○
Oracle SNMP Agent	○	×
Oracle SOAP Client	○	○
Oracle SOAP for JServ	○	○
Oracle SOAP Server	○	○
Oracle SQLJ	○	×
■ SQLJ Translator	×	×
Oracle Syndication Server	×	○
Oracle Text	○	×
Oracle Trace	×	○
Oracle Ultra Search Middle Tier	×	○
Oracle Ultra Search Server	×	○
Oracle Universal Installer	○	○
Oracle Utilities	×	○
Oracle Workflow	×	×
Oracle Workflow Manager	○	×
Oracle Workspace Manager	×	○
Oracle XML Developer's Kit ³	○	○
Oracle XML SQL Utility	○	○
Oracle JVM。次のコンポーネントを含む。	×	○
■ JVM	×	○
■ Oracle JVM Accelerator	×	○

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント（続き）

コンポーネント	Oracle Management Server	Oracle Internet Directory
■ Oracle Java Tools	○	○
Oracle9i Globalization Support	○	○
Oracle9i (Oracle9i データベース)。次のコンポーネントを含む。	×	○
■ Oracle Database Demos	×	○
■ PL/SQL	×	○
■ PL/SQL Embedded Gateway	×	○
Oracle9i Windows Documentation (インストレーション・ガイド、リリース・ノートなどのリリース・ドキュメント)	○	○
Pro*C/C++	×	×
Pro*COBOL	×	×
Replication Management API	×	○
SQL*Plus	○	○

¹ Oracle Management Server には、Enterprise Manager Reporting Web Site およびブラウザベースの Enterprise Manager の Web リスナーとして構成済の Oracle HTTP Server が付属しています。

² Oracle HTTP Server とともに自動的にインストールされるサブコンポーネントのリストは、A-23 ページの「[Oracle HTTP Server](#)」を参照してください。

³ Oracle XML Developer's Kit のサブセットが Oracle Internet Directory とともにインストールされます。特定のリストは、<システム・ドライブ>:\Program Files\Oracle\Inventory\logs ディレクトリのインストール・ログを参照してください。

コンポーネントの説明

表 A-4 では、3 種類の最上位コンポーネントでインストール可能な個々のコンポーネントの説明とリリース番号を示します。該当するコンポーネントを詳細に説明しているドキュメントの参照先も示します。表 A-1 で説明するコンポーネントの中には、他のコンポーネントとともに自動的にインストールされるものもあります。

表 A-4 コンポーネントの説明

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Advanced Queueing API	9.2	Advanced Queueing の API をサポートする機能を提供するコンポーネントです。	『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - アドバンスト・キューイング』
Advanced Replication	9.2	Advanced Replication Management API をサポートする機能を提供するコンポーネントです。 この API は、レプリケーション管理にカスタマイズされたスクリプトを作成できるツールです。	<ul style="list-style-type: none">■ 『Oracle9i アドバンスト・レプリケーション』■ 『Oracle9i レプリケーション・マネージメント API リファレンス』
Assistant Common Files (Database Configuration Assistant や Oracle Net Configuration Assistant などの Oracle アシスタント製品とともにインストールされる)	9.2	Oracle のアシスタントが必要とする、自動的にインストールされる一連のファイルです。次のファイルがあります。 <ul style="list-style-type: none">■ BaliShare 1.1.17 (圧縮)■ DBUI 2.2.11■ EWT 3.4.13 (圧縮)■ ICE Browser 5.06.8 (圧縮)■ Java Swing Components 1.1.1 (圧縮)■ JEW 4.1.10■ JLE 2.0.1■ Kodiak 1.2.1■ Oracle Help for Java 3.2.13 - EWT (圧縮)■ Oracle Help for Java 4.1.13 - JEW (圧縮)	なし
Database Configuration Assistant	9.2	Oracle9i データベースを作成、変更および削除するプロセスを自動化するツールです。環境の要件にカスタマイズされた Oracle9i データベースを作成できます。	<ul style="list-style-type: none">■ 『Oracle9i データベース管理者ガイド』■ 『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「インストール後のデータベース作成」

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Generic Connectivity	9.2	異機種間サービスとも呼ばれるこの機能は、Oracle 以外のシステムにアクセスするための拡張フレームワークを実装します。この機能は、SQL を Oracle 以外のデータ・ストア用に最適化しリライトできるように Oracle SQL エンジン拡張することにより、Oracle のゲートウェイ・テクノロジーの核部分を直接データベース・サーバーに統合します。	『Oracle9i Heterogeneous Connectivity Administrator's Guide』
iSQL*Plus	9.2	iSQL*Plus は、SQL*Plus へのブラウザベースのインタフェースです。このインタフェースにより、SQL、PL/SQL および SQL*Plus のコマンドを、Web ブラウザを介して実行できます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『SQL*Plus for Windows スタート・ガイド』 ■ 「iSQL*Plus」オンライン・ヘルプ
Java Runtime Environment (Oracle で使用されるバージョン)	1.1.8.18 1.3.1.2	Java Runtime Environment (JRE) は、Oracle Universal Installer などの Java アプリケーションの実行に必要です。	なし
LogMiner Viewer (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	REDO ログ・ファイルを探索し、過去のデータベース変更アクティビティの分析を支援するツールです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Enterprise Manager 概説』 ■ 『Oracle9i データベース管理者ガイド』
Object Type Translator (OTT)	9.2	OTT は、すでに作成されて Oracle データベースに格納されている抽象データ型を表現する C 構造体を作成するために使用されます。オブジェクトを利用するには、データベースに対して OTT を実行します。これにより、C 構造体を含むヘッダー・ファイルが生成されます。 Oracle INTYPE File Assistant を含みます。	『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』
Oracle Administration Assistant for Windows NT	9.2	データベース・サービスの起動と停止、Oracle サービスの自動起動、Oracle バックグラウンド・プロセス情報の表示を行い、データベース・ユーザーを Windows NT で認証するように構成できるツールです。	『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「Windows 環境におけるデータベース・ユーザーの認証」
Oracle Advanced Security	9.2	Oracle Advanced Security は、Oracle9i に次の一連の包括的なセキュリティ・サービスを提供します。すべてのデータベース・エディションに、SSL (X.509 バージョン 3 および SSO サポート) が含まれます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
■ 認証サポート		厳密認証サポートが提供されます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
■ 認可サポート		認可ソリューションは、分散コンピューティング環境（DCE）、および Oracle Advanced Security のエンタープライズ・ロール管理機能で提供されます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
■ 暗号化と整合性のサポート		データの機密性は、暗号化とデータ整合性のタイプを使用して確保されます。 注意： 米国輸出管理規定（EAR）が最近変更され、オラクル社は、Oracle Advanced Security の全世界版を出荷できるようになりました。Oracle Advanced Security は、以前は米国およびカナダの市場でのみ入手可能だった強力なプロトコル暗号化を Oracle9i データベースに組み込みます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
■ エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポート		エンタープライズ・ユーザーの集中管理、エンタープライズ・ロール管理およびシングル・サインオンのために、Oracle Internet Directory などの LDAP v3 準拠のディレクトリ・サービスとの統合が提供されています。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
■ シングル・サインオン・サポート		シングル・サインオン（1回のユーザー認証）が提供されます。その後の接続では、厳密認証が透過的に行われます。Kerberos、CyberSafe、DCE および SSL ベースのシングル・サインオンがサポートされます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
Oracle Call Interface (OCI)	9.2	C または C++ プログラムから Oracle データベースにアクセスするための API です。C または C++ プログラムから直接 OCI 関数をコールし、SQL 文を実行させます。	<div>■ 『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』</div> <div>■ 『Oracle Call Interface for Windows スタート・ガイド』</div>
Oracle Change Management Pack (Oracle Enterprise Manager Management Pack のオプション)	9.2	Oracle Change Management Pack は、データベース・オブジェクト定義の追跡および変更で使用される統合化アプリケーションのグループです。このパックを使用すると、データベースのメタデータの変更の追跡、新規アプリケーションをサポートするためにデータベースをアップグレードするときのエラーおよびデータ消失の解消、メタデータの変更に関する影響および複雑な従属関係の分析が可能です。また、体系的にアップグレードの手順を示す簡単なウィザードを使用して、アップグレードを自動的に実行できます。	『Oracle Enterprise Manager Oracle Change Management Pack スタート・ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Cluster Configuration Assistant	9.2	Oracle Cluster Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer がクラスタで起動したときに起動します。このアシスタントは、インストールで選択されたすべてのノードで GSD を起動します。Oracle Cluster Configuration Assistant は、「ソフトウェアのみ」オプションが選択されている場合は起動しません。	なし
Oracle COM Automation	9.2	PL/SQL 開発者が OLE オートメーション・インタフェース (IDispatch) を通して COM オブジェクトをプログラマ的に操作できるようにする機能です。	『Oracle COM Automation 機能 開発者ガイド』
Oracle Connection Manager	9.2	ルーターのように動作するコンポーネントで、これを介して、クライアント接続要求が次のホップまたはサーバーに直接送られます。Oracle Connection Manager を介して接続要求を発行するクライアントは、接続の集中、アクセス制御またはマルチプロトコル・サポートなど、その Connection Manager で構成された各機能を利用できます。	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle Data Guard Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	スタンバイ・データベース環境の設定および管理に含まれるタスクの自動化を支援するツールです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Enterprise Manager 概説』 ■ 『Oracle9i Data Guard 概要および管理』
Oracle Database Upgrade Assistant	9.2	既存の Oracle データベース（リリース 7.3.4 以上）を Oracle9i リリース 2（9.2）にアップグレードするツールです。	『Oracle9i データベース移行ガイド』
Oracle Database Demos	9.2	Oracle9i の重要な機能を示すデモのコレクションです。	なし
Oracle Forms Server Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	Forms Listener、Forms Server、Load Balancer Server および Load Balancer Client の制御と監視を可能にするツールです。さらに、このツールによって、起動やシャットダウンのような基本的制御のほか、サービス停止、メモリー使用量超過、CPU 使用量超過などのイベントの監視や、問題発生時の自動修復が可能です。	『Oracle Enterprise Manager 概説』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Diagnostics Pack (Oracle Enterprise Manager Management Pack のオプション)	9.2	Oracle Diagnostics Pack は Oracle Enterprise Manager を拡張して、多層化された Oracle データベース環境の監視、診断および容量計画を可能にします。Oracle Diagnostics Pack を使用すると、データベースやノードなどのターゲットの発見およびグラフィック表示、パフォーマンスおよびリソース使用率データの自動収集、Intelligent Agent を使用したリモート・システムの中央監視および管理を実行できます。Oracle Diagnostics Pack では、1 つのパフォーマンス・モニター・ソリューションが提供されます。これは、リアルタイムの図表を使用したエージェント・ベースの自動監視と、過去の傾向分析を組み合わせたもので、パフォーマンス問題の発見および調査に関して、論理的に段階を追った方法論を提供します。また、Oracle Diagnostics Pack には、Performance Manager チャートと Capacity Planner 分析レポートの自動生成および Web 発行ができる機能があります。	『Oracle Enterprise Manager Oracle Diagnostics Pack スタート・ガイド』
Oracle Directory Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	Java ベースのツールで、Oracle Internet Directory の機能の大半とその関連プロセスを管理します。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Dynamic Services	9.2	インターネット・サービスの構成、管理および配布のための、プログラム可能な Java ベースのフレームワークです。	<ul style="list-style-type: none">■ 『Oracle Dynamic Services User's and Administrator's Guide』■ %ORACLE_HOME%\ds\doc\readme.txt にある Oracle Dynamic Services の README
Oracle Enterprise Login Assistant	9.2	シングル・サインオンを使用可能にするツールです。シングル・サインオン機能は Oracle Wallet Manager 機能のサブセットを実装し、ユーザーの Wallet を開きアプリケーションで使用できるようにします。	<ul style="list-style-type: none">■ 『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』■ 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Enterprise Manager	9.2	異機種間環境を集中管理するための統合化ソリューションを実現する一連のコンポーネントです。Oracle Enterprise Manager は、グラフィカル・コンソール、Oracle Management Server、Oracle Intelligent Agent、および Oracle とサード・パーティのコンポーネントを管理する統合化された包括的なシステム管理プラットフォームを実現するためのツールの組合せです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager Client	9.2	Oracle Enterprise Manager の第 1 層は、コンソールや管理アプリケーションのようなクライアントで構成されており、管理者に対してすべての管理タスクを GUI で表します。これらのクライアント・コンポーネントは、ローカルに、または Web ブラウザとともにインストールできます。	『Oracle Enterprise Manager 概説』
Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant	9.2	管理者が Oracle Enterprise Manager リポジトリの作成、削除、アップグレードおよび構成を行うときに、それらのタスクを支援するツールです。 Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は、Oracle Management Server とともに自動的にインストールされます。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager コンソール	9.2	Oracle Enterprise Manager の第 1 層のクライアント・インタフェースで、次の機能があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 複数のデータベースを集中管理、診断およびチューニングします。 ■ その他の Oracle コンポーネントおよびサービスを管理します。 ■ Oracle コンポーネントおよびサード・パーティ・サービスの状態を、24 時間監視して対応します。 ■ 複数のノード上のジョブを多様な時間間隔でスケジュールします。 ■ イベントのネットワーク化されたサービスを監視します。 ■ データベースとその他のサービスを論理的な管理グループに編成することで、表示をカスタマイズします。 	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Enterprise Manager Integrated Applications	9.2	Oracle 環境を管理するための Oracle Enterprise Manager に統合されるアプリケーションおよび環境が必要とする場合に Oracle Enterprise Manager とともにインストールされるアプリケーションです。大部分のアプリケーションは、Oracle Enterprise Manager のナビゲータ・ペインおよびコンソール・アプリケーション・ドローワから、あるいはオペレーティング・システムからアクセスできます。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager Paging Server	9.2	管理者が Oracle Enterprise Manager コンソールからのページング通知を受信できるようにする機能です。	『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』
Oracle Enterprise Manager Quick Tours	9.2	HTML ベースの学習ツールで、様々な Oracle Enterprise Manager コンポーネントを実際にインストールすることなく、それらに関する知識を速やかにかつ簡単に得ることができます。次のコンポーネントに対応しています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Enterprise Manager ■ Oracle Change Management Pack ■ Oracle Diagnostics Pack ■ Oracle Tuning Pack ■ Oracle Management Pack for Oracle Applications ■ Oracle Standard Management Pack 	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Manager Web Site	9.2	Oracle9i の Enterprise Manager Web Site により、管理者は、Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager コンソールにアクセスできます。これにより管理者は、Reporting Web Site から、Enterprise Manager コンソールにより発行されたレポートにアクセスすることもできます。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Enterprise Security Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	LDAP 準拠のディレクトリ・サーバーを使用して Oracle 環境のユーザー・セキュリティの管理を支援するツールです。このツールによって、同時に複数のデータベースが運用される中で、管理者は企業レベルのロール認可を管理できるようになります。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Fail Safe	3.2.1	Windows NT または Windows 2000 Datacenter Server で構成されたすべての Microsoft Cluster Server クラスタ上に配置されている Oracle データベースおよびアプリケーションの可用性を高めるコンポーネントです。	Oracle Fail Safe が収録されている CD の『Oracle Fail Safe for Windows NT and Windows 2000 概要および管理ガイド』
Oracle Home Selector (Oracle Universal Installer とともにインストールされる)	1.7.0	適切な Oracle ホーム・ディレクトリをプライマリ・ホームにするために、環境パスを編集できるようにするツールです。	『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』の「複数の Oracle ホームおよび Optimal Flexible Architecture」
Oracle HTTP Server	1.3.22.0.0a	ブラウザ・ベースの Oracle Enterprise Manager コンソール、Enterprise Manager Repository Web Site および iSQL*Plus で使用される、すぐに使用可能な構成済リスナーを提供するコンポーネント。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』 ■ 「スタート」メニューから参照可能なオンライン・ドキュメント
Oracle Intelligent Agent	9.2	Oracle Intelligent Agent は、管理対象ノードのターゲットで発生する登録済のイベントおよび Oracle Enterprise Manager コンソールから送られたスケジュール済のジョブを監視します。 また、Oracle Intelligent Agent は、Oracle Diagnostics Pack のデータ収集アプリケーションである Capacity Planner および Performance Manager 用の統計データも収集します。	『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』
Oracle <i>interMedia</i>	9.2	Oracle <i>interMedia</i> を使用すると、Oracle9i データベースで、他のエンタープライズ情報と統合した形式のイメージ、オーディオおよびビデオ・データを格納、管理および取出しできます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ord\im\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README
Oracle <i>interMedia</i> Audio (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	9.2	Oracle データベース内のデジタル・オーディオ・データの格納、取出しおよび管理を行うコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ord\im\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle <i>interMedia</i> Client Option (Oracle <i>interMedia</i> の一部)	9.2	クライアント側アプリケーションを使用して、ネットワーク・アクセスが可能なサーバー上のデータベースに保存されたマルチメディア・データを、操作および変更できる Oracle <i>interMedia</i> Audio、Image、Video の Java インタフェースを提供するコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ord\im\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README
Oracle <i>interMedia</i> Image (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	9.2	2 次元の静的ビットマップ・イメージの格納、取出し、処理を行うコンポーネントです。業界標準のデスクトップ・パブリッシング画像交換形式の一般的な圧縮方式を使用して、イメージが効率的に格納されます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ord\im\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README
Oracle <i>interMedia</i> Locator (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	9.2	Oracle9i が、ロケータ・アプリケーションと周辺検索においてオンライン・インターネット・ベースのジオコーディング機能をサポートできるようにするコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\md\doc\README_LOCATOR.doc にある Oracle <i>interMedia</i> の README
Oracle <i>interMedia</i> Video (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	9.2	Oracle データベース内のデジタル・ビデオ・データの格納、取出しおよび管理を行うコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> ユーザーズ・ガイド およびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ord\im\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Internet Directory	9.2	<p>Oracle9i データベースをベースとした LDAP v3 ディレクトリ・サーバーは、データベース・ユーザーの集中化、Oracle Net ネットワーク・コネクタ、データベース・リスナー、Oracle Advanced Security、および汎用 LDAP の用途に使用される場合、サーバーのインストール前に構成できます（個別に購入した場合）。</p> <p>「カスタム」インストール・タイプで Oracle9i データベースをインストールすると、ユーザーはこれらの属性を格納するために使用する LDAP ディレクトリ・サーバーを指定できます。標準的なインストールでは、Oracle Internet Directory を専用サーバーにインストールします（特定の Oracle9i データベース・インストールでは、ターゲット・リソースにインストールされます）。</p>	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Internet Directory Client	9.2	Oracle9i データベースの様々なコンポーネントが記憶域の集中化（A-25 ページの「 Oracle Internet Directory 」で説明）のために Oracle Internet Directory を使用できるようにするコンポーネントです。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Internet Directory Configuration Assistant	9.2	Oracle Internet Directory がインストールされているときに Oracle9i データベースに Oracle Internet Directory 表領域およびスキーマを作成するツールです。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Internet Directory Server	9.2	人員やリソースに関する情報についての LDAP クライアント要求およびその情報の更新に応答するコンポーネントです。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle INTYPE File Assistant (OTT とともにインストールされる)	9.2	OTT により変換されるタイプのリストを提供する INTYPE ファイルの作成を補助します。このコンポーネントは、OTT とともに自動的にインストールされます。	『Oracle Call Interface for Windows スタート・ガイド』
Oracle JDBC (Java Database Connectivity) ドライバ	9.2	<p>JavaSoft によって指定された Java クラスの標準セットで、Java からリレーショナル・データに対するベンダーに依存しないアクセスを実現します。次のコンポーネントを含みます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ JDK 1.1、1.2 および 1.4 用の Oracle JDBC Thin ドライバ ■ JDK 1.1、1.2 および 1.4 用の Oracle JDBC/OCI ドライバ 	『Oracle9i JDBC 開発者ガイドおよびリファレンス』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Java Tools	9.2	Java ストアド・プロシージャおよび Oracle JVM を備えた EJB を構築および配布するための Java ツールを提供します。	『Oracle9i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』
Oracle JVM	9.2	JDK 1.2 準拠の JVM、組み込み JDBC ドライバ、SQLJ Translator および Enterprise JavaBeans トランザクション・サーバーを提供するコンポーネントです。	『Oracle9i Java Developer's Guide』
Oracle Management Pack for Oracle Applications (Oracle Enterprise Manager Management Pack のオプション)	9.2	Oracle Management Pack for Oracle Applications は Oracle Enterprise Manager を拡張して、管理者が Oracle Applications 配置のすべての層を互いに関連付けることができるようにします。この配置は、Oracle Applications 特有の並行処理から中間層を介してデータベースおよびノードまで及びます。	『Getting Started with Oracle Management Pack for Oracle Applications』
Oracle Management Server	9.2	Oracle Enterprise Manager の中間層で、コンソール・クライアントと管理対象ノードの間で集中化されたインテリジェント機能と分散制御を実現します。 Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を自動的にインストールします。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Messaging Gateway	9.2	Oracle Messaging Gateway は、Oracle データベースの機能です。Oracle ベースのアプリケーションをサード・パーティ製メッセージ・キューイングベースのアプリケーションと統合します。アドバンスト・キューイング (AQ) キューからサード・パーティ製キューへ、またサード・パーティ製キューからアドバンスト・キューイング (AQ) キューへの自動キュー間伝播を提供します。アドバンスト・キューイングは、Oracle データベースの高性能メッセージ・キューイング機能です。	『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - アドバンスト・キューイング』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Migration Workbench	2.0.1	<p>Oracle 以外のデータベースから Oracle9i へのデータおよびアプリケーションの移行プロセスを簡略化するツールです。Oracle Migration Workbench によって、アプリケーション・システム全体（すなわち、トリガーおよびストアド・プロシージャを含むデータベース・スキーマ）を、統合化されたビジュアル環境に迅速かつ簡単に移行できます。Oracle 以外の次のデータベースからの移行がサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ IBM DB2/AS400 V4R5 ■ Informix Dynamic Server ■ Microsoft Access ■ Microsoft SQL Server ■ MySQL ■ Sybase Adaptive Server 	<p>Oracle 以外のデータベースについては、Oracle Migration Workbench のマニュアル</p> <p>このリリースでは、Oracle Migration Workbench は Oracle9i データベース・ドキュメント CD に収録されています。</p>
Oracle Label Security	9.2	ラベルベースのアクセス制御を含む、高度なファイニングレイン・アクセス・コントロールを提供します。	『Oracle Label Security 管理者ガイド』
Oracle Names	9.2	<p>Oracle 環境用に開発された分散ネーミング・サービスで、グローバルなクライアント / サーバー・コンピューティング・ネットワークのセットアップおよび管理の単純化を支援します。Oracle Names では、Oracle Names Server の統合システムを確立し管理することでセットアップおよび管理を簡単にします。Oracle Names Server は、ネットワーク上のすべてのデータベース・サービスのアドレスを格納し、接続するクライアントがそのアドレスを利用できるようにします。</p> <p>注意： 今後のリリースでは、Oracle Names は集中化ネーミング・メソッドとしてはサポートされません。ディレクトリ・ネーミングの使用を検討してください。</p>	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle Net Configuration Assistant	9.2	インストール後にこのツールを使用して、Oracle Net Services コンポーネントを構成できます。このマニュアルで説明しているとおり、Oracle Net Configuration Assistant はインストール後に自動的に実行されます。クライアントまたはサーバーで使用します。また、スタンドアロン・モードで実行して、ネーミング・メソッドの使用法、リスナー、およびディレクトリ・サーバーの使用構成を設定できます。	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Net リスナー	9.2	クライアントからの接続要求のリスニング、およびデータベース・サーバーへの通信量の管理を行うサーバーに常駐するプロセス。	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle Net Manager	9.2	<p>構成機能とコンポーネント制御を組み合わせ、Oracle Net Services を構成および管理するための統合化環境を実現する Oracle Net Services ツールです。このツールは、クライアントでもサーバーでも使用可能です。</p> <p>Oracle Net Manager を使用して、次のネットワーク・コンポーネントを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ネーミング・メソッド 接続識別子を解決して接続記述子を得るための様々な方法を構成します。■ ネーミング 単純な名前と接続識別子を定義して、ネットワーク位置およびサービスの ID を識別するために定義した接続記述子へマップします。Oracle Net Manager は、ローカルの tnsnames.ora ファイル、集中化されたディレクトリ・サーバー、または Oracle Names Server の接続記述子の構成をサポートします。■ リスナー クライアント接続を受け入れるために、リスナーを作成し構成します。	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle Net Protocol Support	9.2	Named Pipes プロトコル、TCP/IP プロトコルまたは SSL 付き TCP/IP プロトコルを使用して、クライアント / サーバーがネットワークで対話できるようにサポートします。Oracle コンポーネントのこの組合せによって、クライアントの Oracle アプリケーションは、Named Pipes または TCP/IP を介してリモートの Oracle データベースと通信できるようになります（Oracle データベースを実行しているホスト・システムが、Named Pipes または TCP/IP を使用したネットワーク通信をサポートしている場合）。	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Net Services	9.2	異機種間の分散コンピューティング環境における企業全体の接続性に関するソリューションを提供する、一連のネットワーキング・コンポーネントです。Oracle Net Services は、Oracle Net Listener、Oracle Connection Manager、Oracle Net Configuration Assistant、Oracle Net Manager で構成されています。	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle Objects for OLE (OO4O)	9.2	OLE インプロセス・サーバーを伴うカスタム・コントロール（OCX または ActiveX）で、Oracle9i データベース固有の機能を Windows アプリケーションにプラグインできます。	「スタート」メニューから参照可能なオンライン・ヘルプ
Oracle OLAP	9.2	Oracle OLAP は、Java OLAP API および分析エンジンを提供します。開発者は、Oracle OLAP を使用して、予測、モデル化、統合、割当て、シナリオ管理などの予測的分析機能とともに複雑な統計、数学および財務の計算をサポートする分析アプリケーションを構築できます。OLAP API はすべて Java であるため、Oracle OLAP を使用すると、幅広い地域に分散する多数のユーザーにインターネットで分析アプリケーションを配布できます。 Oracle OLAP は、Enterprise Edition でインストールされます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i OLAP User's Guide』 ■ 『Oracle9i OLAP Developer's Guide to the OLAP API』
Oracle ODBC (Open Database Connectivity) ドライバ	9.2	Windows NT、Windows 2000 および Windows 98 クライアント・システムから Oracle9i データベースへの ODBC 接続をサポートするコンポーネントです。Oracle ODBC ドライバは Microsoft ODBC 仕様のバージョン 3.51 に準拠しています。	「スタート」メニューから参照可能なオンライン・ヘルプ
Oracle Partitioning	9.2	表や索引の名前に対してではなく、個々のパーティションに対してすべてのメンテナンス操作を実行することで、表や索引の管理を強化する機能です。	『Oracle9i データベース概要』
Oracle for Windows NT Performance Monitor	9.2	データベース管理者が、Windows NT パフォーマンス・モニタを使用して、ローカル・データベースとリモート・データベースのパフォーマンスを監視できるようにするツールです。	『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「データベースの監視」
Oracle Policy Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	仮想プライベート・データベース（VPD）および Oracle Label Security のセキュリティ・ポリシーを作成、管理できます。	『Oracle Label Security 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Programmer	9.2	アプリケーション開発者が、Oracle9i データおよびスキーマにアクセスして操作するアプリケーションを構築できるようにする一連のインタフェースとツールです。 Oracle Precompilers、Oracle Call Interface、Oracle ODBC ドライバ、Oracle Objects for OLE、SQL*Module および Object Type Translator を含みます。	なし
Oracle Provider for OLE DB	9.2	アプリケーション、コンパイラおよびその他のデータベース・コンポーネントによる高いパフォーマンスと Oracle データへの効果的なアクセスを提供するインタフェースです。	『Oracle Provider for OLE DB 開発者ガイド』
Oracle Real Application Clusters	9.2	複数の Oracle インスタンスで単一の Oracle データベースを共有できるようにするコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」 ■ 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』
Oracle Real Application Clusters Guard	3.2	Oracle Real Application Clusters データベースを、Windows NT および Windows 2000 に配置されている Microsoft Cluster Server クラスタと統合するコンポーネントです。このコンポーネントは、次の追加機能を提供することにより、Oracle Real Application Clusters の高可用性機能を強化します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内で障害が発生したインスタンスおよびリスナーの自動再起動（必要な場合） ■ ハングアップしたインスタンスの問題の検出および解決 ■ 新規接続要求の接続時フェイルオーバー TCP/IP タイムアウト遅延の解消 ■ クラスタ・データベースがオンラインまたはオフラインになった後のユーザー作成スクリプトの実行（オプション） 	Oracle Real Application Clusters Guard が収録されている CD の『Oracle Real Application Clusters Guard 管理およびリファレンス・ガイド』
Oracle Remote Configuration Agent	9.2	Oracle Administration Assistant for Windows NT からのリモート構成および監視を使用可能にするコンポーネントです。	なし

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	9.2	リリース 8.0.6、リリース 8.1.x およびリリース 1 (9.0.1) のデータベースと Microsoft Transaction Server を完全に統合するコンポーネントです。このコンポーネントによって、Microsoft Transaction Server を使用する COM ベースのアプリケーションの開発および配置が可能になります。	『Oracle Services for Microsoft Transaction Server 開発者ガイド』
Oracle SNMP Agent	9.2	SNMP ベースの任意のネットワーク管理システムによって Oracle コンポーネントの識別、監視および位置の特定を行えるようにするコンポーネントです。	『Oracle SNMP サポート・リファレンス・ガイド』
Oracle Spatial (以前の Oracle8i Spatial)	9.2	ユーザーが、より簡単かつ直観的に空間データの格納、取出しおよび操作を実行できるようにするコンポーネントです。	『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
Oracle Spatial Index Advisor (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	データの空間索引の分析およびチューニングを支援するツールです。その分析機能によって、問合せのパフォーマンスが最適化されるように索引が正しく定義されているかどうかわかります。また、データの分布を視覚的に把握できます。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle SQLJ	9.2	埋込み SQL 文を伴う Java プログラムに対するプリプロセッサです。JDBC コールを伴う Java プログラムを生成します。	『Oracle9i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』
Oracle Standard Management Pack	9.2	Oracle Standard Management Pack はオプション・セットのアプリケーションで、問題の監視および診断、高い影響指数のチューニング、Oracle 環境での変更を追跡および比較できる拡張ツールを提供します。	『Oracle Enterprise Manager Oracle Standard Management Pack スタート・ガイド』
Oracle Streams	9.2	Oracle Streams は、Oracle9i リリース 2 (9.2) Enterprise Edition で利用できる新しいテクノロジーであり、データベース内またはデータベース間のデータ・ストリームでのデータ、トランザクションおよびイベントの伝播および管理を可能にします。ストリームは、パブリッシュされた情報をサブスクライブされた宛先にルーティングします。その結果、イベントのキャプチャおよび管理用の従来のソリューションよりも高い機能性と柔軟性を提供する新機能がもたらされ、他のデータベースおよびアプリケーションとイベントを共有できます。ユーザーのニーズが変化した場合、ユーザーは、既存の機能を犠牲にすることなく、Oracle Streams の新機能を単純に実装できます。	『Oracle9i Streams』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Syndication Server	9.2	Oracle Syndication Server は、インターネット・コンテンツをインターネット・サブスクライバに安全に供給します。Oracle Syndication Server はすべての使用可能な通信手段をサポートすると同時に、複数のチャンネルを介したインターネット・リソース、企業ポータル、企業データベースおよび従来のファイル・システムに対するサブスクライバ・アクセスを許可します。	<ul style="list-style-type: none">■ 『Oracle Syndication Server User's and Administrator's Guide』■ %ORACLE_HOME%\syndication\doc\readme.txt にある Oracle Syndication Server の README
Oracle Text	9.2	データベース内のテキストを、他の型のデータと同じようにすばやく簡単に検索し管理するコンポーネントです。Oracle Text の検索手法では、テキストは作成、変更および削除可能な Oracle9i データベースの標準データ型になります。さらに、Oracle Text では、新規のテキストベースでの開発または既存アプリケーションの機能拡張を、標準 SQL ツールによって簡単かつ経済的に実行できます。Oracle Text によって、テキストを使用する任意の Oracle データベース・アプリケーション内のデータを検索できます。これは、既存のアプリケーションの検索可能なコメント・フィールドから、複数のドキュメント形式と複合検索基準を処理する大規模なドキュメント管理システムの実装まで対応できます。Oracle Text は、Oracle9i データベースがサポートする多数の言語での基本的な全文検索もサポートします。	『Oracle Text リファレンス』
Oracle Text Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	Oracle9i データベース内のテキストを管理および検索するためのテキスト検索システムです。データベースのテキストを、その他のタイプのデータ同様、迅速かつ容易に管理および検索できるようにします。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
Oracle Trace	9.2	SQL 解析、実行、フェッチの統計および待機状況統計といった、パフォーマンスおよびリソース使用率データを収集するコンポーネントです。 注意： Oracle Trace は、今後のリリースでサポートされなくなります。オラクル社では、かわりに SQL トレースおよび TKPROF を使用することを強くお勧めします。	『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Tuning Pack (Oracle Enterprise Manager Management Pack のオプション)	9.2	Oracle Tuning Pack は、最も影響度の高いデータベース・パフォーマンス・エリア（アプリケーション SQL、インデックス・ストラテジ、I/O を制御するインスタンス・パラメータ、SGA パフォーマンス、オブジェクトのサイジング、配置および再編成など）のチューニングに重点を置いた拡張ツールを提供します。このパックのツールは連動して様々なデータベース・チューニング・タスクを実行します。Oracle Tuning Pack に含まれているアプリケーションは、Oracle SQL Analyze、Oracle Expert、Outline Editor、Outline Management、Oracle Index Tuning Wizard、Reorg Wizard および Tablespace Map です。	『Oracle Enterprise Manager Oracle Tuning Pack によるデータベース・チューニング』
Oracle Universal Installer	2.2.0.10.0	Oracle コンポーネントのインストール、更新、削除を短時間で実行できる GUI アプリケーションです。Oracle Universal Installer には、Java Runtime Environment (Oracle で使用されるバージョン) および Oracle Home Selector が含まれます。	『Oracle Universal Installer Concepts Guide』
Oracle Utilities	9.2	データベース管理に使用される一連のコンポーネントです。Oracle Utilities には、次のコンポーネントが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Character Set Migration Utility ■ エクスポート / インポート・ユーティリティ ■ SQL*Loader ■ Database Verify Utility (「Client」インストール・タイプでは使用不可) ■ Migration Utility (「Client」インストール・タイプでは使用不可) ■ Recovery Manager 	『Oracle9i データベース・ユーティリティ』 注意： ORADIM などの Windows NT のみのユーティリティについては、『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』で説明します。
Oracle Wallet Manager	9.2	1 対の公開鍵と秘密鍵を生成して認証局に発行する証明書要求の作成、認証のための証明書のインストール、認証のための信頼できる認証局の構成を行うツールです。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
Oracle Workflow	2.6.2	Oracle Workflow は、ビジネス・プロセスの定義および自動化をサポートする完全なワークフロー管理システムです。このテクノロジーにより、ビジネス・プロセスの自動化と継続的な改善が可能になり、ユーザー定義のビジネス・ルールに従って任意のタイプの情報をルーティングできます。	『Oracle Workflow Server インストール・ノート』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Workflow Builder	2.6.2	Oracle Workflow Builder は、ワークフロー・プロセス定義を作成、表示および変更するための GUI ツールです。Oracle Workflow Builder には、ビジネス・プロセスのアクティビティとコンポーネントを定義するナビゲータ・ウィンドウがあります。	『Oracle Workflow Client インストレーション・ノート』
Oracle Workflow Mailer	2.6.2	<p>このコンポーネントは、Oracle Workflow 通知システムの電子メール送信および応答処理を実行します。プログラムは、通知電子メール・メッセージをユーザーに送信し、ユーザー応答を解析して通知を完了します。このコンポーネントには、Windows NT 上の任意の Messaging Application Programming Interface (MAPI) 準拠メール・アプリケーションと直接統合できる実装があります。</p> <p>MAPI 準拠の実装を Windows NT コンピュータにインストールするには、最上位の Oracle9i クライアント・コンポーネントの「カスタム」インストール・タイプを使用して Oracle Workflow Mailer を選択します。この実装では、MAPI 準拠のメール・アプリケーションがコンピュータにインストールされ、メール・サーバーとして機能している必要があります。</p>	『Oracle Workflow Client インストレーション・ノート』
Oracle Workspace Manager	9.2	Oracle Workspace Manager は、作業領域管理システムに基づく長いトランザクション用のフレームワークを提供します。Workspace Manager は、一連の短時間トランザクションと複数のデータ・バージョンを使用して、原子性および同時実行性をメンテナンスする完全な長時間トランザクション・イベントを実装します。変更は、異なる作業領域としてデータベースに格納されます。ユーザーは、更新する新しいデータ・バージョンを作成する一方で、古いデータのコピーをメンテナンスできます。長時間トランザクションの継続中の結果は永続的に格納され、同時実行性および一貫性が確保されます。	『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド -Workspace Manager』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle XML Developer's Kit	9.2	<p>このキットは、XML データの解析と生成を行う API セットから構成されます。これらのインタフェースは、Java、C、C++ および PL/SQL 用に作成されています。このキットは、次のコンポーネントから構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ XML Parser for Java ■ XML Parser for C ■ XML Parser for C++ ■ XML Parser for Oracle JVM（「Client」インストール・タイプではインストールされない） ■ XML Parser for PL/SQL ■ XML Class Generator for Java ■ XML Class Generator for C++ ■ XML Transviewer Beans ■ XML Transx ■ XSQL Servlet 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i XML Developer's Kit ガイド -XDK』 ■ 『Oracle9i XML API リファレンス - XDK および Oracle XML DB』
Oracle XML SQL Utility	9.2	<p>このユーティリティは、問合せが結果セットまたは XML にラップされているオブジェクトを返せるようにする Java クラスおよび PL/SQL ラッパーのセットです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i XML Developer's Kit ガイド -XDK』 ■ 『Oracle9i XML API リファレンス - XDK および Oracle XML DB』
Oracle9i Advanced Analytic Services - Data Mining	9.2	<p>データベースに組み込まれた Oracle9i Advanced Analytic Services - Data Mining により、パワフルでスケーラブルなモデリングおよびリアルタイム・スコアリングを行うデータ・マイニング機能を完全にプログラマ的に制御できる、総合的なビジネス・インテリジェント・アプリケーションを作成できます。すべてのモデル作成およびスコアリング機能には、Java ベース API からアクセスできます。データ・マイニングにより、E-Business 企業は、顧客とのすべてのやりとりおよびビジネス・プロセスに予測と分類を取り込むことができます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i Data Mining Administrator's Guide』 ■ 『Oracle9i Data Mining Concepts』
Oracle JVM Accelerator (Oracle JVM の一部)	9.2	<p>このコンポーネントは、Oracle JVM の現在の機能を拡張し、Java コードのネイティブ・コンパイルを提供してパフォーマンスを改善します。</p>	<p>『Oracle9i Java Stored Procedures Developer's Guide』</p>

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle JVM Servlet Container (JSC)	9.2	Oracle JVM Servlet Container は、データベース内で実行されるビルトイン Web サーバーです。このコンテナは、Oracle HTTP Server および Oracle JVM とともに動作するサーブレット・コンテナで、JavaServer Pages (JSP) の配布とデータベースでのサーブレットの直接実行を可能にします。	『Oracle9i Java Developer's Guide』
Oracle9i	9.2	Enterprise Edition、Standard Edition または Personal Edition ソフトウェアのデータベース・コンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none">■ 『Oracle9i データベース新機能』■ 『Oracle9i データベース概要』
Oracle9i Windows Documentation (インストール・ガイド、リリース・ノートなどのリリース・ドキュメント)	9.2	インストール・ガイド（このマニュアル）では、Oracle コンポーネントのインストール方法を説明します。『Oracle9i Database for Windows リリース・ノート』には、Oracle9i データベース・ドキュメント CD のドキュメント・ライブラリにはない最新情報が記載されています。	<ul style="list-style-type: none">■ このインストール・ガイド■ 『Oracle9i Database for Windows リリース・ノート』
PL/SQL	9.2	Oracle による SQL のプロシージャ拡張である PL/SQL は、高度な第 4 世代プログラミング言語 (4GL) です。PL/SQL には、カプセル化、オーバーロード、コレクション型、例外処理、情報隠蔽などの最新機能が用意されています。PL/SQL では、透過的な SQL アクセス、Oracle データベースとツールの緊密な統合、移植性およびセキュリティも提供されます。	『PL/SQL ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
PL/SQL Embedded Gateway	9.2	このコンポーネントは、PL/SQL Gateway の汎用機能を Oracle9i データベースに直接組み込みます。このコンポーネントを使用すると、ユーザーは、ブラウザを使用して、Oracle9i データベースに格納されている PL/SQL プロシージャを起動できます。ストアド・プロシージャは、データベース内の表からデータを検索し、データを含む HTTP 応答（たとえば、HTML ページなど）を生成して、クライアントのブラウザに返すことができます。	-

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Pro*C/C++	9.2	Pro*C/C++ プリコンパイラは、C および C++ プログラムに埋め込まれている SQL 文を受け取り、標準 C コードに変換します。このコードをプリコンパイルすると、C または C++ プログラムになります。このプログラムをコンパイルして、Oracle9i データベースにアクセスするアプリケーションを構築します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Pro*C/C++ Precompiler プログラマーズ・ガイド』 ■ 『Pro*C/C++ for Windows プリコンパイラ・スタート・ガイド』
Pro*COBOL	9.2 および 1.8.77	Oracle データベースにアクセスするには、SQL という高級問合せ言語を使用します。通常は、SQL*Plus などの対話形式インタフェースを介して SQL を使用します。Pro*COBOL は、COBOL プログラム内に埋め込まれている SQL 文を標準 Oracle ランタイム・ライブラリ・コールに変換するプリコンパイラです。出力ファイルは、その後、COBOL コンパイラでコンパイルできます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Pro*COBOL Precompiler プログラマーズ・ガイド』 ■ 『Pro*COBOL for Windows プリコンパイラ・スタート・ガイド』
Server Management (SRVM)	9.2	Oracle Real Application Clusters 構成を管理するための管理ツールおよびユーティリティを提供するコンポーネントです。このコンポーネントは、Oracle Real Application Clusters とともに自動的にサーバーにインストールされます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」 ■ 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』
SQL*Plus	9.2	SQL、PL/SQL および SQL*Plus データベース言語を使用できるようにするツールです。SQL*Plus には、コマンドライン・インタフェース、グラフィカル・インタフェースおよびブラウザベースのインタフェースがあります。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『SQL*Plus for Windows スタート・ガイド』 ■ 「iSQL*Plus」 オンライン・ヘルプ
SQL*Plus Worksheet (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications の 1 つ)	9.2	手動で、SQL、PL/SQL およびデータベース管理者のコマンドを入力したり、ストアード・スクリプトを実行したりするための GUI アプリケーションです。	『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』
SQLJ Runtime (Oracle SQLJ とともにインストールされる)	9.2	JDBC ドライバ上で実行する Pure Java コードの Thin レイヤーです。Oracle SQLJ によって SQLJ ソース・コードが変換されるときに、Java アプリケーションに埋め込まれた SQL コマンドは SQLJ Runtime コールに置換されます。	『Oracle9i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
SQLJ Translator (Oracle SQLJ とともにインストールされる)	9.2	埋込み SQL 文が含まれている Java プログラムに対するプリプロセッサです。SQLJ Translator は、SQL 文を JDBC コールに変換します。	『Oracle9i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』
WINSOCK2 on Windows NT サポート	9.2	Oracle Net は、WINSOCK 1.1 および WINSOCK2 ソケット・インタフェースの両方をサポートします。Oracle Net は Windows NT 上の WINSOCK2 を自動的に検出し、使用可能な場合は WINSOCK2 を使用します。WINSOCK2 は、Windows NT リリース 4.0 オペレーティング・システムの標準機能です。Oracle Net Services の次の WINSOCK2 機能を使用します。 <ul style="list-style-type: none">■ イベントと重複した I/O■ 共有ソケット（オプション機能として使用可能）	『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「Oracle Net Services の構成」
XML Developer's Kit (XDK)	9.2	XML アプリケーションのデータベースとの統合および実行に必要です。	『Oracle9i XML Developer's Kit ガイド-XDK』

Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク

この付録では、Windows NT および Windows 2000 上に Oracle9i クラスタ・ソフトウェアをインストールする前に必要なタスクについて説明します。Real Application Clusters は、Windows XP ではサポートされていません。Windows に固有の情報は、この項と Oracle Cluster Setup Wizard のオンライン・ヘルプで説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- [Real Application Clusters のインストール要件](#)
- [Real Application Clusters の概要](#)
- [Real Application Clusters インストール前のタスク](#)
- [Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの削除](#)
- [Real Application Clusters インストールのトラブルシューティング](#)

関連資料： Oracle9i データベース・ドキュメント CD に収録されている Oracle9i Real Application Clusters のドキュメント・セット

- 『Oracle9i Real Application Clusters Documentation Online Roadmap』
- 『Oracle9i Real Application Clusters 概要』
- 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』
- 『Oracle9i Real Application Clusters 管理』
- 『Oracle9i Real Application Clusters 配置およびパフォーマンス』

Real Application Clusters のインストール要件

第 2 章で説明した Enterprise Edition システム要件に加えて、次の要件を満たしている必要があります。

ハードウェア

クラスタの各ノードには、次のハードウェアが必要です。

- 外部共有ハード・ディスク
- 認定済ハードウェア構成

ハードウェアおよびネットワーク構成

次のハードウェアおよびネットワーク構成情報が使用可能です。

- 各ノードのパブリック・ネットワーク名（ホストまたは TCP/IP 名）。
- 高速プライベート相互接続の有無。ある場合は、各ノードのプライベート・ネットワーク名。
- **仮想インタフェース・アーキテクチャ (VIA)**・ハードウェアを使用しているかどうか。使用している場合は、使用可能なネットワーク・インタフェース・カード (NIC) 名。

ソフトウェア

クラスタの各ノードには、次のソフトウェア・タイプのいずれかが必要です。

- 認定済のベンダー提供オペレーティング・システム固有クラスタウェア・レイヤー
- Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェア・レイヤー

RAM

インスタンスごとに 256MB

関連項目： 2-4 ページの「[Oracle9i のシステム要件](#)」

Real Application Clusters の概要

Oracle Cluster Setup Wizard を使用してクラスタ・データベースを作成するには、Oracle Universal Installer を起動する前に、投票ディスク（ボーティング・ディスク）の拡張パーティションを構成します。拡張パーティションを正しく構成していないと、Database Configuration Assistant が Real Application Clusters データベースを作成できません。

投票ディスクには、Server Management (SRVM) および Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの構成データが格納されます。ベンダーのオペレーティング・システム固有クラスタウェアにも、Real Application Clusters 構成情報用の投票ディスクが必要です。

Real Application Clusters は、フォーマットされていない拡張パーティション内の論理ドライブを使用して、制御ファイル、データ・ファイルおよび REDO ログ・ファイルを格納します。各ディスクに作成される拡張パーティションは 1 つのみです。拡張パーティションは、パーティション化されていないディスクに作成し、ディスク全体を拡張パーティションに使用するようお勧めします。

クラスタ・ファイル・システム (CFS) では、Real Application Clusters はクラスタ・ファイル・システムでフォーマットされた共有パーティションを使用して、Oracle ホーム・ファイルまたは Oracle データ・ファイル、あるいはその両方のファイル・タイプを格納できます。RAID ボリュームがサポートされます。

注意： クラスタ・ファイル・システムは、今後の Oracle9i リリース 2 (9.2) CD バックで使用可能になります。

各インスタンスは、データ・ファイル用に共有ディスク・サブシステム上のフォーマットされていないデバイス・セットを共有します。必要な RAW デバイスの数とタイプは、いくつかの要因によって決まります。

汎用、トランザクション処理、データ・ウェアハウスのいずれかのデータベース構成タイプを使用する場合は、B-4 ページの表 B-1 にリストされている最小サイズを使用して、特定の表領域を作成する必要があります。ディスクのサイズ要件を検討する場合は、各ディスクに、拡張パーティションとして使用できない 1MB または 2MB の初期署名用領域を計上する必要があります。これらの要件は、ベンダー提供クラスタウェア・レイヤーと Oracle 提供クラスタウェア・レイヤーの両方で同じです。

Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成しない場合、作成する論理ドライブの数は、作成する予定のデータ・ファイル、REDO ログ・ファイルおよび制御ファイルの数によって決まります。ただし、この場合も、投票ディスク用に 100MB の論理ドライブを作成する必要があります。

表 B-1 Database Configuration Assistant の論理ドライブのディスク・サイズ

パーティションの用途	ファイル・サイズ
SYSTEM 表領域	420MB
サーバー・パラメータ・ファイル	5MB
USERS 表領域	120MB
TEMP 表領域	120MB
UNDOTBS 表領域	320MB
EXAMPLE 表領域	160MB
CWMLITE 表領域	100MB
XML 表領域	50MB
ODM 表領域	280MB
INDX 表領域	70MB
TOOLS 表領域	12MB
DRSYS 表領域	250MB
最初の制御ファイル	110MB
2 番目の制御ファイル	110MB
各インスタンスに 2 つの REDO ログ・ファイル	120MB (各ファイル)
svrcfg (クラスタウェア用の投票ディスク)	100MB

Database Configuration Assistant は、デフォルトでは自動 UNDO 管理を使用します。各インスタンスに 1 つの UNDO 表領域を作成します。すべての構成済データベース・テンプレートの UNDO 表領域用の論理ドライブは、320MB 以上になります。手動 UNDO 管理を使用する場合は、625MB 以上の RBS 論理ドライブを作成します。

関連資料：

- 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』の「RAW デバイスの作成方法の計画」
- 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』の「DBCA データベースの構成オプション」
- 3-4 ページの「データベース環境のタイプ」

Real Application Clusters インストール前のタスク

Windows NT または Windows 2000 コンピュータで次のタスクを実行して、一連のノードをクラスタ・ソフトウェアのインストール用に準備します。

- [タスク 1: 拡張パーティションおよび論理ドライブの作成](#)
- [タスク 2: シンボリック・リンク名の割当て](#)
- [タスク 3: クラスタの作成](#)

タスク 1: 拡張パーティションおよび論理ドライブの作成

フォーマットされていない論理ドライブを構成するには、拡張パーティションおよび複数の論理ドライブを作成します。

クラスタ内の 1 つのノードから、Windows NT のディスク アドミニストレータまたは Windows 2000 の「ディスクの管理」を実行し、拡張パーティションおよび複数の論理ドライブを作成します。各コンピュータは、同じドメインのメンバーであるか、信頼関係のドメイン内に置かれている必要があります。

関連資料： 拡張パーティションおよび論理ドライブの作成と管理の詳細は、Windows のディスク アドミニストレータまたは「ディスクの管理」のオンライン・ヘルプを参照してください。

ここでは、次のオペレーティング・システムでの手順を説明します。

- [Windows NT](#)
- [Windows 2000](#)

Windows NT

1 つのノードから Windows NT のディスク アドミニストレータを実行して、クラスタ全体の共有ディスクに拡張パーティションを作成し、論理ドライブを構成します。共有ディスク配列の構成によっては、複数のディスクを使用してすべてのパーティションに対応することができます。各コンピュータは、同じドメインのメンバーであるか、信頼関係のドメイン内に置かれている必要があります。

拡張パーティションを作成するには、次のようにします。

1. 「Administrators」グループのメンバーとしてログオンします。
2. 「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「ディスク アドミニストレータ」を選択します。
「ディスク アドミニストレータ」ウィンドウが表示されます。

3. パーティション化されていないディスク、つまりディスク上の拡張パーティションを含まない空き領域部分を右クリックします。
ディスク アドミニストレータの「拡張パーティションの作成」オプションが表示されます。
4. 「拡張パーティションの作成」を選択します。拡張パーティションの最大サイズが表示されます。
5. 拡張パーティションのパーティション・サイズを入力し、「OK」を選択します。

論理ドライブを作成するには、次のようにします。

注意： Oracle ファイルを RAW デバイスに格納する場合は、1 つの拡張パーティションに 120 を超える論理ドライブを作成しないことをお勧めします。120 を超える論理ドライブを作成すると、コンピュータの再起動およびディスク管理ツールの起動に必要な時間が大幅に増加します。

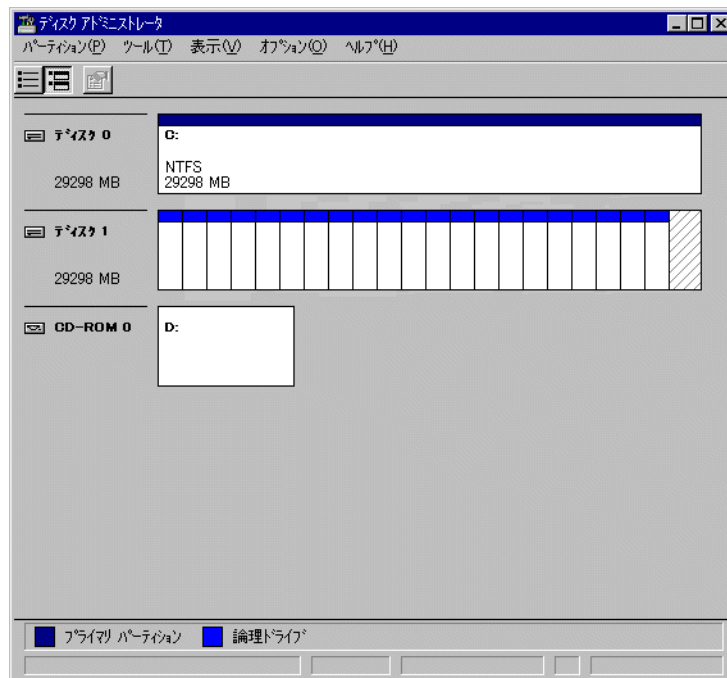
1. 拡張パーティションの空き領域部分を選択します。
2. 「パーティション」→「作成」を選択します。
「ディスク アドミニストレータ」ウィンドウに、論理ドライブの最大サイズと最小サイズが表示されます。
 - a. 作成する論理ドライブのサイズを入力します。B-4 ページの表 B-1 に示すファイル・サイズの論理ドライブを作成します。
 - b. 「OK」を選択します。
3. 論理ドライブを選択します。
4. 「ツール」→「ドライブ文字の割り当て」を選択します。
5. 「ドライブ文字を割り当てない」オプションを選択し、「OK」を選択します。

注意： 別の方法として、すべての論理ドライブの作成後 LetterDelete ユーティリティを実行すれば、1 つのコマンドですべてのドライブ文字の割り当てを削除できます。

6. 必要な論理ドライブがすべて作成されるまで、手順 1～5 を繰り返します。
7. 「パーティション」→「今すぐ変更を反映」を選択します。
ディスクに変更が加えられたことを示す確認ダイアログが表示されます。

8. 「はい」を選択して、メッセージを確認します。
ディスクが正常に更新されたことを示すダイアログ・ボックスが表示されます。
9. 「OK」を選択します。
10. 「パーティション」→「ディスク アドミニストレータの終了」を選択します。
すべてのノードで変更が表示されます。

次の「ディスク アドミニストレータ」ウィンドウは、ディスク構成の 1 例を示しています。論理パーティションは、Database Configuration Assistant がクラスタ・データベースを作成できるようにサイズ設定されています。



「ディスク アドミニストレータ」ウィンドウには 2 つのディスクが表示されています。次の表に、ディスク 0 とディスク 1 のパーティションの内容を示します。

ディスク	内容
ディスク 0	プライマリ・パーティション
ディスク 1	36 の論理パーティションと空き領域のある拡張パーティション

Windows 2000

1 つのノードから Windows 2000 の「ディスクの管理」を実行して、クラスタ全体の共有ディスクに拡張パーティションを作成し、論理ドライブを構成します。共有ディスク配列の構成によっては、複数のディスクを使用してすべてのパーティションに対応することができません。各コンピュータは、同じドメインのメンバーであるか、信頼関係のドメイン内に置かれている必要があります。

プライマリ・パーティション、拡張パーティションおよび論理ドライブは、ベーシック・ディスクに作成する必要があります。ダイナミック・ディスクはサポートされていません。ベーシック・ディスクでは、Windows の旧バージョンと同じパーティションを使用し、最大 4 つのプライマリ・パーティション、または 3 つのプライマリ・パーティションと 1 つの拡張パーティションを含むことができます。

拡張パーティションおよび論理ドライブを作成するには、次のようにします。

1. 「設定」→「コントロールパネル」を選択します。
2. 「管理ツール」をダブルクリックします。
3. 「記憶域」フォルダを開き、「ディスクの管理」を選択します。

「コンピュータの管理」ウィンドウが表示されます。リスト・ビューの「状態」列でディスクまたはボリュームの状態を確認します。図 B-1 では、ボリュームの状態は「正常」、ディスクは「オンライン」になっています。

注意： シンボリック・リンクの作成や論理パーティションの追加などのディスク管理の変更中に「ディスクの管理」のウィンドウが開いている場合、適用した変更を表示するには、ウィンドウをいったん閉じてから開く必要があります。

タスク 2: シンボリック・リンク名の割当て

次のいずれかの方法を使用して、シンボリック・リンク名を割り当てます。

- [Oracle Cluster Setup Wizard](#) の使用
- [Object Link Manager](#) の使用
- [ImportSYMLinks](#) ユーティリティの使用

Oracle Cluster Setup Wizard の使用

Oracle Cluster Setup Wizard に従い、クラスタの作成および既存クラスタへのノードの追加を実行します。論理ドライブへのシンボリック・リンク名の割当ても可能です。**Oracle Cluster Setup Wizard** を使用したシンボリック・リンク名、クラスタの作成方法は、B-12 ページの「[タスク 3: クラスタの作成](#)」を参照してください。

Object Link Manager の使用

Object Link Manager は、シンボリック・リンク名の割当てまたは既存のシンボリック・リンク名の変更を行うための GUI ツールです。

関連項目： Oracle Object Link Manager のインストール方法は、B-16 ページの「[RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール](#)」を参照してください。

1. `c:\¥temp¥GUIOracleOBJManager.exe` を選択します。`temp` は、B-16 ページの手順 2 で定義した一時ディレクトリです。
「Oracle Object Manager」ウィンドウが表示されます。
2. 更新する行を選択し、ハイライト表示された行の任意の場所をクリックします。
「New Link Name」列に、編集ウィンドウとアクティブな点滅カーソルが表示されます。
3. 新しいリンク名を入力し「Enter」を選択します。
4. 手順 2 と 3 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を作成します。

注意： 編集ウィンドウをアクティブにしたまま、手順 5 に進まないでください。変更が適用されません。

5. 「Options」→「Commit」を選択します。

ImportSYMLinks ユーティリティの使用

ImportSYMLinks は、シンボリック・リンク名の割当てまたは既存のシンボリック・リンク名の変更を行うためのコマンドライン・ツールです。

関連項目： ImportSYMLinks ユーティリティのインストール方法は、B-16 ページの「[RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール](#)」を参照してください。

1. TBL ファイルを作成します。

目的	操作
既存のシンボリック・リンク名の変更	<div>1. 次のコマンドを使用して、既存のリンクを TBL ファイルへエクスポートします。</div> <div>ExportSYMLinks.exe [/f:filename]</div> <div>/f:filename を指定しない場合、現在の作業ディレクトリにデフォルトのファイル名 symmap.tbl が作成されます。</div> <div>注意： 重複するリンクは、symmap.tbl ファイルでインデントされます。マップされていない有効なデバイス名もすべてエクスポートされます。</div>
TBL ファイルの作成	<div>1 枚目のコンポーネント CD の次のディレクトリに、サンプルの ASCII ファイルがあります。¹</div> <div>¥preinstall_rac¥olm¥sample.tbl</div> <div>1. TBL ファイルを作成します。</div> <div>2. ファイルを保存します。</div>

¹ このサンプル・ファイルには、2 ノード・クラスタ・データベース用の RAW パーティションに関連付けられたシンボリック・リンク名が含まれています。

2. 次のコマンドを使用して、シンボリック・リンク・マッピングをインポートします。

```
ImportSYMLinks.exe [/f:filename]
```

たとえば、`ImportSYMLinks.exe /f:c:\temp\mysymlinks.tbl` となります。

ここで、`temp` は B-16 ページの手順 2 で定義した一時ディレクトリ、`filename` は有効な TBL ファイルのフルパスとファイル名です。

タスク 3: クラスタの作成

Oracle9i オペレーティング・システム固有クラスタウェアを使用する場合、Oracle Cluster Setup Wizard を使用して Oracle9i オペレーティング・システム固有クラスタウェアをインストールし、シンボリック・リンクを割り当て、クラスタを作成します。ベンダーのオペレーティング・システム固有クラスタウェアを使用する場合は、ベンダーのドキュメントを参照してください。

Oracle9i オペレーティング・システム固有クラスタウェアではなくベンダーのオペレーティング・システム固有クラスタウェアを使用する場合、**Oracle Cluster Setup Wizard** を実行する必要はありません。ただし、**Oracle Universal Installer** を起動する前に、RAW デバイスを構成する RAW デバイス管理ユーティリティが必要です。RAW デバイス管理ユーティリティを一時的にインストールする必要があります。

クラスタでノードとして使用するノード上で Oracle Cluster Setup Wizard を実行します。クラスタでノードとして使用しないノードからのウィザードの実行はサポートされていません。既存のクラスタにノードを追加するには、CD から任意の時点で Oracle Cluster Setup Wizard を実行して行います。

関連資料：『Oracle9i Real Application Clusters 管理』の「Windows NT および Windows 2000 のクラスタウェア・レイヤーに対するノードの追加」

始める前に

- クラスタに属するすべてのノードが起動し、TCP/IP 環境で相互に通信可能なことを確認します。
- 各ノードに、オペレーティング・システム固有クラスタウェアおよび Object Link Manager をインストールするための 2MB の容量があることを確認します。
- ベンダーのオペレーティング・システム固有クラスタウェアを停止します。これは、Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアをインストールし、ベンダーのオペレーティング・システム固有クラスタウェアのバージョンを実行する場合のみ該当します。

注意： クラスタ内の各ノードでは同じユーザー名とパスワード、またはドメイン・ユーザー名を使用することをお勧めします。管理者権限が必要です。また、各ノードは同じドメイン内にある必要があります。

管理者権限を確認するには、Oracle Cluster Setup Wizard を実行するノードから、クラスタの各ノードに対して次のコマンドを入力します。

```
NET USE %host_name%$
```

`host_name` は、他のノードのパブリック・ネットワーク名です。

たとえば、`node1` で Oracle Cluster Setup Wizard を実行し、`node1`、`node2`、`node3` および `node4` からなる 4 ノード・クラスタを作成する場合、`node1` で次のコマンドを入力します。

```
NET USE %node2%$
```

```
NET USE %node3%$
```

```
NET USE %node4%$
```

次のメッセージが表示された場合、各ノードに対して管理者権限があります。コマンドは正常に終了しました。

1. クラスタの 1 つのノードで、1 枚目のコンポーネント CD を挿入し、`%preinstall_rac%clustersetup` ディレクトリに移動します。
2. `clustersetup.exe` を選択します。
Oracle Cluster Setup Wizard が表示されます。
3. 「次へ」を選択します。
4. 「クラスタの作成」を選択し、「次へ」を選択します。
「Disk 構成」画面が表示されます。

5. オプションで次のいずれかのタスクを実行し、シンボリック・リンク名を変更するか、シンボリック・リンクを追加します。

目的	操作
シンボリック・リンク名の変更	<div>1. 「Oracle シンボリック・リンクの作成」ボタンを選択します。 「Oracle Object Link Manager」ウィンドウが表示されます。</div> <div>2. 「シンボリック・リンク」列から、更新する行を選択します。 カーソルが点滅します。</div> <div>3. 新しいリンク名を入力します。</div> <div>4. 手順 2 と 3 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を変更します。</div> <div>5. 「適用」を選択します。</div> <div>6. 画面下部の進行状況を示すバーが停止したら、「クローズ」を選択します。</div>
シンボリック・リンクの作成	<div>1. 「Oracle シンボリック・リンクの作成」ボタンを選択します。 「Object Link Manager」ウィンドウが表示されます。</div> <div>2. 「シンボリック・リンク」列から、空白行を選択します。 カーソルが点滅します。</div> <div>3. リンク名を入力します。</div> <div>4. 手順 2 と 3 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を割り当てます。</div> <div>5. 画面下部の進行状況を示すバーが停止したら、「クローズ」を選択します。</div>

6. 「Disk 構成」画面から、対応する行をハイライト表示して、`srvcfg` というラベルの投票ディスクを割り当てます。
7. 「次へ」を選択します。
8. 「クラスタの作成」を選択し、「次へ」を選択します。
「ネットワークの選択」ウィンドウが表示されます。
9. ノードが高速プライベート・ネットワークで接続されている場合は、「インターコネク
トにプライベート・ネットワークを使用します」オプションを選択します。それ以外の
場合は、「インターコネクトにパブリック・ネットワークを使用します」オプションを
選択し、「次へ」を選択します。

10. 「ネットワーク構成」ウィンドウが表示されます。ノードの名前を入力し、「次へ」を選択します。
 - 手順 9 でプライベート・ネットワークを選択した場合は、ノードのパブリック名およびプライベート名を入力します。
 - パブリック・ネットワークを選択した場合は、パブリック名を入力します。
11. ローカル・ノードに VIA が検出された場合は、「VIA の検出」ウィンドウが表示されます。クラスタウェア相互接続に VIA を使用するかどうかを選択します。選択を行った後で、「次へ」を選択します。
12. 「インストール場所」ウィンドウが表示されます。インストール場所を選択し、「次へ」を選択します。
13. 「Cluster Setup」ウィンドウに、Oracle Cluster Setup Wizard により実行される様々な処理が表示されます。

関連資料：

- Oracle Cluster Setup Wizard のオンライン・ヘルプを参照してください。
- 「クラスタ・ノードの選択」ページが表示されない場合は、B-18 ページの「[クラスタ診断の実行](#)」を参照してください。
- Oracle9i Enterprise Edition および Real Application Clusters のインストール手順は、[第 4 章](#)を参照してください。

RAW デバイス管理ユーティリティの概要

追加ディスク管理ツールは、Oracle Cluster Setup Wizard によってすべてのノードにインストールされます。Oracle Cluster Setup Wizard を使用しない場合、これらのツールはインストールされません。[表 B-2](#) は、ディスク管理ツールの説明です。

表 B-2 RAW デバイス・ディスク管理ユーティリティ

ユーティリティ	実行するタスク
Object Link Manager	論理ドライブへのシンボリック・リンクを作成または変更する GUI。このユーティリティは、Oracle Cluster Setup Wizard の一部として、または個別に使用できます。
DeleteDisk	ディスク全体を再フォーマットし、内容を削除します。
LetterDelete	Oracle RAW パーティションからすべてのドライブ文字を削除し、ディスク・キー・レジストリを更新して、コンピュータの再起動時のマッピングを無効化します。
LogPartFormat	論理パーティションのすべての領域をゼロに初期化し、シンボリック・リンク名を削除します。

表 B-2 RAW デバイス・ディスク管理ユーティリティ（続き）

ユーティリティ	実行するタスク
crlogdr	プライマリ・パーティションがなく、拡張パーティションが1つあるディスク上の論理ドライブとその関連シンボリック名を作成および削除します。このツールを使用して、ディスク・レイアウトを確認します。
ExportSYMLinks	対応するディスク・ドライブから永続シンボリック・リンクを読み取り、リストの TBL ファイルを生成します（デフォルト名は symmap.tbl）。
ImportSYMLinks	TBL ファイルを読み取り、クラスタのディスク上およびすべてのノード上に永続シンボリック・リンクを作成します。

関連資料：

- B-16 ページの「RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール」を参照してください。
- ツールの使用法は、readme ファイルを参照してください。ディスク管理ツールおよび readme ファイルは、directory¥olm ディレクトリにあります。ここで directory は、Oracle Cluster Setup Wizard を使用して Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアをインストールしたディレクトリです。

RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール

Oracle Cluster Setup Wizard を使用して Oracle9i オペレーティング・システム固有クラスタウェアをインストールしなかった場合、RAW デバイス管理ユーティリティを手動でインストールします。

ディスク管理ユーティリティを手動でインストールするには、クラスタの各ノードで次の作業を実行します。

1. 一時ディレクトリを作成します。
2. 1 枚目のコンポーネント CD から、作成した一時ディレクトリに ¥preinstall_rac¥olm ディレクトリの内容をコピーします。
3. 作成した一時ディレクトリから次のコマンドを入力して、Oracle Object Service をインストールします。

```
C:¥temp> OracleOBJService /INSTALL
```

注意： Oracle Cluster Setup Wizard を使用すると、このサービスは自動的に作成および起動されます。

4. クラスタの各ノードの Oracle Object Service を「自動」に設定します。サービスの構成、開始および停止の詳細は、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの削除

Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの旧バージョンを削除する場合は、次の手順を使用して手動で削除します。

1. Oracle データベースをシャットダウンします。
2. オペレーティング・システム固有クラスタウェア・サービス OracleCMService9i を停止します。

注意： Oracle Parallel Server リリース 8.0 および 7.3 の場合は、OraclePGMSService を停止します。

3. コマンド・プロンプトからレジストリ エディタを起動します。
`C:\> regedt32`
「レジストリ エディタ」ウィンドウが表示されます。
4. HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\OSD9i に移動します。
5. OSD サブキーを削除します。
6. HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services に移動します。
7. OracleCMService9i のサービス・エントリを削除します。
8. \winnt\system32 の下の osd9i ディレクトリを削除します。
9. クラスタ内のすべてのノードで手順を繰り返します。
10. キーを削除したコンピュータを再起動します。

Real Application Clusters インストールのトラブルシューティング

次の内容について説明します。

- [エラー・メッセージ](#)
- [クラスタ診断の実行](#)
- [Windows 2000 の Terminal Services Client](#)
- [既存の Oracle サービスの停止](#)
- [マッピングが表示されない](#)
- [専用サーバー・プロセスを起動できない](#)
- [Windows NT のディスク アドミニストレータで論理ドライブを作成できない](#)
- [物理パーティションと論理ドライブの互換性の問題](#)

エラー・メッセージ

Real Application Clusters 管理ユーティリティのエラー・メッセージは、『Oracle9i Real Application Clusters 管理』の付録 C にあります。

クラスタ診断の実行

Oracle Universal Installer で「クラスタ・ノードの選択」ページが表示されない場合、`lsnodes -v` コマンドを実行し、その出力を検討して、クラスタウェアを診断します。

¥preinstall_rac ディレクトリから、次のコマンドを実行します。

```
lsnodes -v
```

詳細な出力により、クラスタウェアが実行されていないことがわかった場合は、クラスタウェアのドキュメントを参照してください。

Windows 2000 の Terminal Services Client

どのディスク管理ツールでも、Terminal Services Client は使用しないでください。変更が適用されない場合があります。

既存の Oracle サービスの停止

作成中のクラスタのノードで OracleGSDService または OracleServiceSID を実行している場合、Oracle Cluster Setup Wizard の使用中に次の警告メッセージが表示されることがあります。

The nodes that we are trying to install the software on could not be cleaned completely

すべてのノードでこれらのサービスを停止し、Oracle Cluster Setup Wizard を再度実行してください。

マッピングが表示されない

Object Link Manager にマッピングが表示されない場合、クラスタ内のすべてのノードで Oracle Object Service が起動されていることを確認してください。

専用サーバー・プロセスを起動できない

OracleServiceSID と OracleHOME_NAME_TNSListener が、同じ Windows アカウントで、同じユーザー ID を使用して実行されていることを確認してください。

Windows NT のディスク アドミニストレータで論理ドライブを作成できない

拡張パーティションが作成されていない場合がほとんどです。拡張パーティションを作成し、拡張パーティション内に複数の論理ドライブを作成します。

物理パーティションと論理ドライブの互換性の問題

Q: 論理ドライブを作成し、これらに物理ディスク規則名を定義した場合、どのような影響がありますか。次に例を示します。

```
PhysicalDrivesys1=¥Device¥Harddisk2¥Partition1  
PhysicalDriveusr1=¥Device¥Harddisk3¥Partition1
```

A: Oracle データベースは、データ・ファイルが実際には論理ドライブの場合も、物理ディスク規則を使用してデータ・ファイルを扱います。物理ディスク・ネーミング規則を使用するかぎり、データの破損や消失は発生しません。早めに論理ドライブに変換することをお勧めします。

Q: Partition0 を表す論理名を作成すると、どのような影響がありますか。次に例を示します。

```
db_system1=¥Device¥Harddisk1¥Partition0
```

A: 重大な問題が発生します。通常、ディスク アドミニストレータは各ディスクの最初のブロックに署名を書き込むため、結果的に Oracle データベースのデータ・ファイル・ヘッダーによって署名の部分が上書きされる可能性があります。

注意： データが失われる可能性もあります。Partition0 に論理パーティション規則を使用しないでください。

Q: バックアップ用に、RAW パーティションを標準のファイル・システムに移すにはどうすればよいですか。

A: 物理パーティションおよび論理ドライブではともに、RAW パーティションとの間でデータのコピーを行うには、Oracle ユーティリティ OCOPY を使用します。

物理 RAW 規則では余分なブロックがスキップされるため、物理パーティションと論理ドライブの規則は、互いに互換性がありません。また、これらのパーティションの内容は互換性がないため、物理ディスクから論理ドライブへの OCOPY コマンドを実行するだけでは不十分です。

データベースで論理ドライブに物理ディスク規則を使用している場合、次の手順で論理ドライブ規則に変換することをお勧めします。

1. (ローカル) ファイル・システムにデータベースを完全にエクスポートします。
2. 論理ドライブを作成し、これらのパーティションに論理名を定義します。
3. 新しい論理ドライブで Database Configuration Assistant を使用してデータベースを再作成します。
4. 新しく作成したデータベースにデータベースを完全にインポートします。

関連資料：

- 『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』
- 『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』

Oracle Transparent Gateways

この付録では、コンポーネント CD から Oracle Transparent Gateway ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- [Oracle Transparent Gateways のシステム要件](#)
- [Oracle Transparent Gateways のインストール](#)
- [Oracle Transparent Gateways の削除](#)

関連資料： Oracle Transparent Gateway のドキュメント（インストール後に参照可能）

- `%ORACLE_HOME%\tg4msql\doc`
- `%ORACLE_HOME%\tg4sybs\doc`
- `%ORACLE_HOME%\tg4tera\doc`

Oracle Transparent Gateways のシステム要件

Oracle Transparent Gateways をインストールする前に、次の項を参照してください。

- [ゲートウェイのシステム要件](#)
- [テスト済ゲートウェイ構成](#)
- [ゲートウェイ・インストール・ワークシート](#)

ゲートウェイ・コンポーネントは、1つのプラットフォームに置くことも、複数のプラットフォームに分散して置くこともできます。構成用のインストール・ワークシートを使用して、インストールを始める前に、必要な情報がすべて揃っていることを確認してください。

Oracle データベース・サーバーと Microsoft SQL Server の新しいリリースや変更は次々とサポートされるようになるため、サポート構成情報は絶えず更新されます。現在のサポート構成情報については、次のサイトにアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/gateways/>

ゲートウェイのシステム要件

次の表に、Oracle Transparent Gateways のシステム要件をまとめます。基本となるシステム・ソフトウェア製品がそれぞれのベンダーでサポートされているかぎり、この項で説明しているソフトウェア構成はサポートされます。最新のサポート状況については、システム・ソフトウェアのベンダーに確認してください。アクセスが必要なデータベース・タイプに関する情報を記載した表を参照してください。

- [Microsoft SQL Server ゲートウェイのシステム要件](#)
- [Sybase ゲートウェイのシステム要件](#)
- [Teradata ゲートウェイのシステム要件](#)

Microsoft SQL Server ゲートウェイのシステム要件

表 C-1 を参照して、システムが Oracle Transparent Gateway for Microsoft SQL Server のゲートウェイを作成する要件を満たしていることを確認してください。

表 C-1 Microsoft SQL Server ゲートウェイのシステム要件

ハードウェアおよびソフトウェア	要件
プロセッサ	Intel Pentium プロセッサまたは 100% 互換プロセッサを搭載したパーソナル・コンピュータ (PC)。
メモリー	<p>ゲートウェイのサポートには 26MB の実メモリーを推奨。ゲートウェイを同時使用する場合の合計実メモリー要件は、次の要因によって決まります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザーが発行する SQL 文 ■ Microsoft SQL に対して現在オープンされているカーソル数 ■ アクセスする表の列数
CD ドライブ	内蔵または外付け CD ドライブ。
ディスク領域	200MB の空きディスク領域。
オペレーティング・システム	Microsoft Windows NT Workstation バージョン 4.0、Microsoft Windows NT Server バージョン 4.0 または Microsoft Windows 2000。
Oracle データベース・サーバー	<p>Oracle9i リリース 2 (9.2)。</p> <p>Oracle データベース・サーバーは、サポートされている任意のプラットフォームに配置できます。</p>
Oracle ネットワーキング	<p>ゲートウェイ・コンピュータ上：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Net Services ■ Oracle Protocol Support for Named Pipes または TCP/IP <p>Oracle データベース・サーバー・コンピュータ上：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Net Services ■ Oracle Protocol Support for Named Pipes または TCP/IP <p>Oracle Net Services コンポーネントは、Oracle9i コンポーネント CD にのみ含まれます。</p>
Microsoft	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows NT に含まれる、ネットワーク転送プロトコル・ソフトウェア TCP/IP または Named Pipes ■ Microsoft Windows NT Server のコンピュータにインストールされている Microsoft SQL Server バージョン 7.0 または SQL Server 2000

Sybase ゲートウェイのシステム要件

表 C-2 を参照して、システムが Oracle Transparent Gateway for Sybase のゲートウェイを作成する要件を満たしていることを確認してください。

表 C-2 Sybase ゲートウェイのシステム要件

ハードウェアおよびソフトウェア	要件
プロセッサ	Intel Pentium プロセッサまたは 100% 互換プロセッサを搭載したパーソナル・コンピュータ（PC）。
メモリー	ゲートウェイのサポートには 26MB の実メモリーを推奨。ゲートウェイを同時使用する場合の合計実メモリー要件は、次の要因によって決まります。 <ul style="list-style-type: none">■ ユーザーが発行する SQL 文■ Sybase に対して現在オープンされているカーソル数■ アクセスする表の列数
CD ドライブ	内蔵または外付け CD ドライブ。
ディスク領域	200MB の空きディスク領域。
オペレーティング・システム	Microsoft Windows NT Workstation バージョン 4.0、Microsoft Windows NT Server バージョン 4.0 または Microsoft Windows 2000。
Oracle データベース・サーバー	Oracle9i リリース 2 (9.2)。 Oracle データベース・サーバーは、サポートされている任意のプラットフォームに配置できます。
Oracle ネットワーキング	ゲートウェイ・コンピュータ上： <ul style="list-style-type: none">■ Oracle Net Services■ Oracle Protocol Support for Named Pipes または TCP/IP Oracle データベース・サーバー・コンピュータ上： <ul style="list-style-type: none">■ Oracle Net Services■ Oracle Protocol Support for Named Pipes または TCP/IP Oracle Net Services コンポーネントは、Oracle9i コンポーネント CD にのみ含まれます。
Sybase	Sybase サーバー、バージョン 11.9.2、12.0 または 12.5 が必要です。Sybase サーバーがゲートウェイと同じコンピュータ上にない場合、ご使用の Sybase サーバー用に認定された Sybase Open クライアント・ライブラリのバージョンが必要です。

Teradata ゲートウェイのシステム要件

表 C-3 を参照して、システムが Oracle Transparent Gateway for Teradata のゲートウェイを作成する要件を満たしていることを確認してください。

表 C-3 Teradata ゲートウェイのシステム要件

ハードウェアおよびソフトウェア	要件
プロセッサ	Intel Pentium プロセッサまたは 100% 互換プロセッサを搭載したパーソナル・コンピュータ (PC)。
メモリー	<p>ゲートウェイのサポートには 26MB の実メモリーを推奨。ゲートウェイを同時使用する場合の合計実メモリー要件は、次の要因によって決まります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザーが発行する SQL 文 ■ Teradata に対して現在オープンされているカーソル数 ■ アクセスする表の列数
CD ドライブ	内蔵または外付け CD ドライブ。
ディスク領域	200MB の空きディスク領域。
オペレーティング・システム	Microsoft Windows NT Workstation バージョン 4.0、Microsoft Windows NT Server バージョン 4.0 または Microsoft Windows 2000。
Oracle データベース・サーバー	<p>Oracle9i リリース 2 (9.2)。</p> <p>Oracle データベース・サーバーは、サポートされている任意のプラットフォームに配置できます。</p>
Oracle ネットワーキング	<p>ゲートウェイ・コンピュータ上：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Net Services ■ Oracle Protocol Support for Named Pipes または TCP/IP <p>Oracle データベース・サーバー・コンピュータ上：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Net Services ■ Oracle Protocol Support for Named Pipes または TCP/IP <p>Oracle Net Services コンポーネントは、Oracle9i コンポーネント CD にのみ含まれます。</p>
Teradata	Teradata V2R.03.00.02 または V2R.04.00.0115。
NCR の Teradata ODBC ドライバ	バージョン 02.08.00.00。

テスト済ゲートウェイ構成

次の表に、このマニュアルのリリース時点でテスト済のゲートウェイ構成を示します。オラクル社では、今後も Oracle および Oracle 以外のシステムの最新リリースをタイムリにサポートしていきます。

関連資料： オラクル社では、サポートするゲートウェイ構成を継続的に更新しています。最新のサポート構成情報は、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問い合わせるか、次の Web サイトにアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/gateways/>

Microsoft SQL Server ゲートウェイの構成

Oracle Transparent Gateway for Microsoft SQL Server のゲートウェイを作成するための構成は、[表 C-4](#) を参照してください。

表 C-4 Microsoft SQL Server ゲートウェイの構成

データベース	ゲートウェイおよびオペレーティング・システム
Microsoft SQL Server バージョン 7.0	Windows NT 4.0, Service Pack 5 以上で動作する tg4msql リリース 9.2
	Windows 2000, Service Pack 1 以上で動作する tg4msql リリース 9.2
Microsoft SQL Server 2000	Windows NT 4.0, Service Pack 5 以上で動作する tg4msql リリース 9.2
	Windows 2000, Service Pack 1 以上で動作する tg4msql リリース 9.2

Sybase ゲートウェイの構成

Oracle Transparent Gateway for Sybase のゲートウェイを作成するための構成は、[表 C-5](#) を参照してください。

表 C-5 Sybase ゲートウェイの構成

データベース	ゲートウェイおよびオペレーティング・システム
Sybase バージョン 11.9.2	Windows NT 4.0, Service Pack 5 以上で動作する tg4sybs リリース 9.2
	Windows 2000, Service Pack 1 以上で動作する tg4sybs リリース 9.2
Sybase バージョン 12.0	Windows NT 4.0, Service Pack 5 以上で動作する tg4sybs リリース 9.2
	Windows 2000, Service Pack 1 以上で動作する tg4sybs リリース 9.2
Sybase バージョン 12.5	Windows NT 4.0, Service Pack 5 以上で動作する tg4sybs リリース 9.2
	Windows 2000, Service Pack 1 以上で動作する tg4sybs リリース 9.2

Teradata ゲートウェイの構成

Oracle Transparent Gateway for Teradata のゲートウェイを作成するための構成は、[表 C-6](#) を参照してください。

表 C-6 Teradata ゲートウェイの構成

データベース	ゲートウェイおよびオペレーティング・システム
NCR の Teradata ODBC ドライバのバージョン 02.08.00.00 を使用する Teradata V2R.03.00.02	Windows NT 4.0, Service Pack 5 以上で動作する tg4tera リリース 9.2
	Windows 2000, Service Pack 1 以上で動作する tg4tera リリース 9.2
NCR の Teradata ODBC ドライバのバージョン 02.08.00.00 を使用する V2R.04.00.0115	Windows NT 4.0, Service Pack 5 以上で動作する tg4tera リリース 9.2
	Windows 2000, Service Pack 1 以上で動作する tg4tera リリース 9.2

ゲートウェイ・インストール・ワークシート

次の表からシステムに適したワークシートを選択し、記入した値を構成プロセス中に参照してください。

- [Microsoft SQL Server ワークシート](#)
- [Sybase ワークシート](#)
- [Teradata ワークシート](#)

Microsoft SQL Server ワークシート

Microsoft SQL Server ゲートウェイの構成に使用するシステム値を表 C-7 に記入してください。

表 C-7 Microsoft SQL Server インストール・ワークシート

説明	値
Oracle データベース・サーバーのコンピュータ名	
Oracle データベース・サーバーのプラットフォーム (オペレーティング・システムおよびそのバージョン番号)	
Oracle データベース・サーバーの ORACLE_HOME (フルパス名)	
ゲートウェイ・コンピュータ名	
ゲートウェイ・コンピュータのプラットフォーム (オペレーティング・システムおよびそのバージョン番号)	
ゲートウェイの ORACLE_HOME (フルパス名)	
ゲートウェイが接続する Microsoft SQL Server の名前	
ゲートウェイが接続する Microsoft SQL Server データベース の名前	

Sybase ワークシート

Sybase ゲートウェイの構成に使用するシステム値を表 C-8 に記入してください。

表 C-8 Sybase インストール・ワークシート

説明	値
Oracle データベース・サーバーのコンピュータ名	
Oracle データベース・サーバーのプラットフォーム (オペレーティング・システムおよびそのバージョン番号)	
Oracle データベース・サーバーの ORACLE_HOME (フルパス名)	
ゲートウェイ・コンピュータ名	
ゲートウェイ・コンピュータのプラットフォーム (オペレーティング・システムおよびそのバージョン番号)	
ゲートウェイの ORACLE_HOME (フルパス名)	
ゲートウェイが接続する Sybase サーバーの名前	
ゲートウェイが接続する Sybase データベースの名前	

Teradata ワークシート

Teradata ゲートウェイの構成に使用するシステム値を表 C-9 に記入してください。

表 C-9 Teradata インストール・ワークシート

説明	値
Oracle データベース・サーバーのコンピュータ名	
Oracle データベース・サーバーのプラットフォーム (オペレーティング・システムおよびそのバージョン番号)	
Oracle データベース・サーバーの ORACLE_HOME (フルパス名)	
ゲートウェイ・コンピュータ名	
ゲートウェイの ORACLE_HOME (フルパス名)	
ゲートウェイで使用する ODBC データ・ソース名 (DSN)	

Oracle Transparent Gateways のインストール

Oracle Universal Installer の起動およびゲートウェイ・ソフトウェアのインストールに関する詳細な手順は、[第 4 章](#)で説明しています。

関連資料：

- Oracle Universal Installer の起動の詳細は、4-5 ページの「[Oracle9i のインストールの開始](#)」を参照してください。
- ゲートウェイ・ソフトウェアのインストールの詳細は、4-12 ページの「[Oracle9i Database の「カスタム」インストール](#)」を参照してください。
- インストール・セッションのサマリーは、4-33 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照してください。

Oracle Transparent Gateways の削除

Oracle コンポーネントの削除の詳細な手順は、[第 4 章](#)で説明しています。

関連項目： 4-36 ページの「[Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除](#)」

拡張インストール

この付録では、拡張インストールについて説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- 非対話形式モードでの Oracle コンポーネントのインストール
- 異なる言語の Oracle コンポーネント
- Web ベースのインストール

非対話形式モードでの Oracle コンポーネントのインストール

通常、Oracle Universal Installer は対話形式モードで実行されます。つまり、ウィンドウに情報を指定するように要求されます。一方、経験豊富なユーザーは、レスポンス・ファイルを使用して、Oracle Universal Installer を非対話形式モード（サイレント・モード）で実行することもできます。レスポンス・ファイルとは、インストール・プロセス中に Oracle Universal Installer で使用される変数および値を含むテキスト・ファイルです。

ユーザーとの対話がない場合、またはグラフィカルな端末が使用されない場合は、サイレント・インストールをお勧めします。ユーザーは、まずレスポンス・ファイルを編集して、インストールするコンポーネントを指定する必要があります。Oracle Universal Installer (OUI) リリース 1.7.x 以下のリリースを使用する場合、対象となるインストール・システムは、デスクトップ・システムにログオンしている必要があります。

サイレント・インストールを使用すると、Oracle Universal Installer の対話形式モードの GUI を回避できます。表 D-1 に、1 枚目のコンポーネント CD の Response ディレクトリにある使用可能なレスポンス・ファイルを示します。

表 D-1 レスポンス・ファイル

レスポンス・ファイル名	サイレント・モードで実行する対象
enterprise.rsp	Oracle9i Database の「Enterprise Edition」インストール・タイプ。
standard.rsp	Oracle9i Database の「Standard Edition」インストール・タイプ。
personal.rsp	Oracle9i Database の「Personal Edition」インストール・タイプ。
custom.rsp	Oracle9i Database の「カスタム」インストール・タイプ。
clientadmin.rsp	Oracle9i Client の「管理者」インストール・タイプ。
clientruntime.rsp	Oracle9i Client の「ランタイム」インストール・タイプ。
clientcustom.rsp	Oracle9i Client の「カスタム」インストール・タイプ。
oms.rsp	Oracle9i Management and Integration の「Oracle Management Server」インストール・タイプ。
oid.rsp	Oracle9i Management and Integration の「Oracle Internet Directory」インストール・タイプ。
omicustom.rsp	Oracle9i Management and Integration の「カスタム」インストール・タイプ。

表 D-1 レスポンス・ファイル（続き）

レスポンス・ファイル名	サイレント・モードで実行する対象
dbca.rsp	Database Configuration Assistant。
netca.rsp	Oracle Net Configuration Assistant により「Enterprise Edition」、「Standard Edition」、「Personal Edition」、「管理者」、「ランタイム」、「Oracle Management Server」または「Oracle Internet Directory」インストール・タイプで行われる構成を実行します。
emca.rsp	コンポーネントまたはサイレント・インストール・セッションの一部としての Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant。リポジトリを作成します。手順は、D-4 ページの「 サイレント・モードでの Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の実行 」を参照してください。

レスポンス・ファイルのコピーおよび変更

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更するには、次のようにします。

- 1 枚目のコンポーネント CD の Response ディレクトリからハード・ディスク・ドライブに適切なファイルをコピーします。
2. 「スタート」→「プログラム」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。
『Oracle Universal Installer Concepts Guide』が HTML 形式で表示されます。
3. レスポンス・ファイルおよび『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の指示に従って、テキスト・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。

複数 CD からの単一インストール・ステージの作成

リリース 2 (9.2) は 3 枚のコンポーネント CD に収録されています。つまり、そのままではインストールに関するすべての質問に答え、席を離れ、戻すまでにインストールを完了させることはできません。Oracle Universal Installer が、プロンプトを表示せずに 2 枚目および 3 枚目の CD を見つけることができるように、3 枚の CD の内容をハード・ディスクのステージング領域にコピーできます。

複数の CD から単一インストール・ステージを作成するには、次のようにします。

1. ハード・ディスク・ドライブに、3 枚の CD の内容を収められる十分なディスク領域があることを確認します。
2. ハード・ディスクの同じレベルに、Disk1、Disk2 および Disk3 という名前の 3 つのディレクトリを作成します。これらの名前を必ず使用してください。
3. 各コンポーネント CD の内容を該当するディレクトリにコピーします。

- 4. Disk1 と名付けたディレクトリから setup.exe を実行します。
追加のコンポーネント CD の挿入を求めるプロンプトが表示されることなく、インストールが進行します。

Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定

Oracle Universal Installer を実行しレスポンス・ファイルを指定するには、次のようにします。

- 1. コマンド・プロンプトに移動します。
- 2. Oracle Universal Installer がインストールされているディレクトリに移動します。
- 3. 適切なレスポンス・ファイルを実行します。次に例を示します。

```
C:\¥program files¥oracle¥oui¥install> setup.exe -silent -nowelcome  
-responseFile filename
```

要素名	説明
filename	特定のレスポンス・ファイルのフルパスを指定します。
-silent	完全なサイレント・モードで Oracle Universal Installer を実行します。「ようこそ」ウィンドウは自動的にスキップされます。このパラメータはオプションです。-silent を使用する場合、-nowelcome は必要ありません。
-nowelcome	インストール時に表示される「ようこそ」ウィンドウは表示されません。このパラメータはオプションです。

関連資料：『Oracle Universal Installer Concepts Guide』

サイレント・モードでの Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の実行

対話形式モードでは、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は Oracle Management Server **リポジトリ**をローカル・システムに構成します。リポジトリの作成、アップグレードまたは削除、および既存の構成の編集を行うことができます。このアシスタントでは、既存の Oracle データベースに OEM_REPOSITORY 表領域を作成することも、Database Configuration Assistant を起動してリポジトリ表を格納する新しい Oracle データベースを作成することもできます。

サイレント・モードでは、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は、ローカル・システム上の既存のデータベース内での OEM_REPOSITORY 表領域の作成に限定されます。Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant をスタンドアロン・コンポーネントまたはサイレント・インストール・セッションの一部としてサイレント・モードで実行できます。

詳細は、次の項を参照してください。

- [Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant](#) をスタンドアロン・コンポーネントとしてサイレント・モードで実行
- インストール・セッション中に [Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant](#) をサイレント・モードで実行

重要： ネットワークに複数の Oracle Enterprise Manager リポジトリを作成した場合、各 Oracle Enterprise Manager リポジトリのユーザー名を一意にする必要があります。emca.rsp ファイルの USERNAME リポジトリ変数に指定された値がネットワーク全体で一意であることを確認してください。

同じレスポンス・ファイルを複数回使用してリポジトリを作成する場合、作成されたリポジトリをそれぞれ別のネットワークに配置する必要があります。

関連資料： Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の使用方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant をスタンドアロン・コンポーネントとしてサイレント・モードで実行

1. Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant をサイレント・モードで実行するコンピュータ上に、Oracle Management Server がインストールされていることを確認します。
2. Windows 環境パスに %ORACLE_HOME%\bin が設定されていることを確認します。
3. emca.rsp レスポンス・ファイルを 1 枚目のコンポーネント CD の Response ファイル・ディレクトリからローカル・ディレクトリにコピーします。
4. ファイルの指示に従って、emca.rsp を編集します。

重要： Oracle Management Server リポジトリがそれぞれ別のデータベース内にある場合でも、各リポジトリに一意のデータベース・ユーザー名が必要です。リポジトリ・ユーザー名は、同じネットワーク上の他のリポジトリ・ユーザー名と重複しないようにしてください。

5. %ORACLE_HOME%\bin に移動します。
6. コマンド・プロンプトから emca.rsp を実行します。

```
C:\%ORACLE_HOME%\bin> emca -silent -responseFile path\emca.rsp
```

ここで、path は emca.rsp へのパスです。たとえば、C:\temp です。

注意： `-silent` オプションと `-responseFile` オプションは、どちらもサイレント・モードで Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を実行する場合に必要です。

インストール・セッション中に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant をサイレント・モードで実行

Oracle Management Server は、次のレスポンス・ファイルでインストールできます。

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| ■ <code>custom.rsp</code> | ■ <code>enterprise.rsp</code> |
| ■ <code>omicustom.rsp</code> | ■ <code>oms.rsp</code> |
| ■ <code>personal.rsp</code> | ■ <code>standard.rsp</code> |

Oracle Management Server を `enterprise.rsp`、`personal.rsp` または `standard.rsp` レスポンス・ファイルでインストールした場合、サイレント・インストール・セッションでの Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant の実行はサポートされません。リポジトリを作成するには、「スタート」メニューから Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を対話形式で起動する必要があります。「スタート」→「Oracle - HOME_NAME」→「Configuration and Migration Tools」→「Enterprise Manager Configuration Assistant」を選択します。

Oracle Management Server を `oms.rsp`、`custom.rsp` または `omicustom.rsp` レスポンス・ファイルでインストールした場合は、リポジトリを対話形式またはサイレント・モードで作成できます。

サイレント・インストール時にリポジトリを自動的に作成するには、次のようにします。

1. 次の親インストール・レスポンス・ファイルの 1 つをローカル・ディレクトリにコピーします。
 - `custom.rsp`
 - `oms.rsp`
 - `omicustom.rsp`
2. そのファイルの指示に従ってファイルを編集します。
3. 親レスポンス・ファイルの `[oracle.sysman.oms_9.2.0.1.0]` セクションで、次の変数を編集します。

```
OPTIONAL_CONFIG_TOOLS
launchEMCA
s_responseFileEMCA
```

注意： Windows オペレーティング・システムでは、
OPTIONAL_CONFIG_TOOLS 変数を emca.bat に設定する必要があります。

4. emca.rsp レスポンス・ファイルをローカル・ディレクトリにコピーします。
5. ファイルの指示に従って、emca.rsp を編集します。

注意： emca.rsp のリポジトリ・ユーザーの USERNAME 変数に指定された
値が、ネットワーク全体で一意であることを確認してください。

6. Oracle Universal Installer がインストールされているディレクトリに移動します。
7. 親レスポンス・ファイルを実行します。これで、サイレント・インストールが完了すると、自動的に Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant レスポンス・ファイル (emca.rsp) が起動します。次に例を示します。

```
C:\Program Files\Oracle\oui\install> setup.exe -silent -responseFile filename
```

ここで *filename* は、親レスポンス・ファイルのフルパスです。

次に、更新した [oracle.sysman.oms_9.2.0.1.0] セクションの例を示します。

```
[oracle.sysman.oms_9.2.0.1.0]
```

```
#-----
# Name           : OPTIONAL_CONFIG_TOOLS
# Datatype       : StringList
# Description     : Specifying "emca" will launch the Oracle Enterprise Manager
#                  Configuration Assistant configuration tool at the end of
#                  installation.
# Valid values   : {"emca"} or {}
# Example value  : {"emca"}
# Default value  : {}
# Mandatory      : No
#-----
```

```
OPTIONAL_CONFIG_TOOLS={%ORACLE_HOME%\bin\emca.bat}
```

```
#-----
# Name           : s_responseFileEMCA
# Datatype       : String
# Description     : This string contains the value of the -responseFile
#                  argument for launching the Enterprise Manager Configuration
#                  Assistant in silent mode.Use the "emca.rsp" response
#                  file template from the CD to customize silent Enterprise
#                  Manager configuration.Set the value of this variable to
```

```
#           your customized EMCA response file location.
# Valid values : The full path to a customized EMCA response file based on
#               the emca.rsp template.
# Example value : "c:\temp\response\emca.rsp"
# Default value : None
# Mandatory    : Yes, for installs with the "-silent" flag
#-----

s_responseFileEMCA=<c:\temp\response\emca.rsp>

#-----
# Name          : launchEMCA
# Datatype      : Boolean
# Description    : Launch the Enterprise Manager Configuration Assistant
#                 at the end of installation to configure Oracle Management
#                 Server
# Valid values   : true, false
# Example value : true
# Default value : true
# Mandatory     : No
#-----

launchEMCA=<true>
```

異なる言語の Oracle コンポーネント

この項では、次の機能について説明します。

- [異なる言語での Oracle Universal Installer の実行](#)
- [異なる言語での Oracle コンポーネントの使用方法](#)

異なる言語での Oracle Universal Installer の実行

デフォルトでは、Oracle Universal Installer はオペレーティング・システムの選択された言語で実行されます。次に示す言語で Oracle Universal Installer を実行することもできます。

- | | | |
|----------------|------------|---------|
| ■ ポルトガル語（ブラジル） | ■ ドイツ語 | ■ 日本語 |
| ■ 中国語（簡体字） | ■ 中国語（繁体字） | ■ フランス語 |
| ■ イタリア語 | ■ 韓国語 | ■ スペイン語 |

Oracle Universal Installer を異なる言語で実行するには、次のようにします。

1. オペレーティング・システムが実行されている言語を変更します。たとえば、Windows NT の場合は次のようにします。
 - a. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」→「地域」を選択します。
 - b. 前述の言語から 1 つを選択して、「OK」を選択します。
2. 4-5 ページの「[Oracle9i のインストールの開始](#)」の指示に従って Oracle Universal Installer を実行します。

注意： 選択された言語が NLS_LANG レジストリ・パラメータに割り当てられます。

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用方法

Oracle コンポーネント（Oracle Net Configuration Assistant、Database Configuration Assistant、Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant など）を使用する際の言語として他の言語を選択できます。これは、Oracle Universal Installer の実行で使用される言語を変更するということではありません。Oracle コンポーネントを選択された言語で実行するには、オペレーティング・システムの言語設定と同じにする必要があります。オペレーティング・システムの言語は「コントロール パネル」の「地域」ウィンドウで変更できます。

異なる言語でコンポーネントを使用するには、次のようにします。

1. 4-5 ページの「[Oracle9i のインストールの開始](#)」の指示に従って Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「使用可能な製品」ウィンドウで、「製品の言語」ボタンをクリックします。
「言語の選択」ウィンドウが表示されます。
3. 「使用可能な言語」フィールドから Oracle コンポーネントの実行に使用する言語を選択します。
4. 「>」を使用して言語を「選択された言語」フィールドに移動し、「OK」を選択します。
5. インストールする製品を適宜選択し、「次へ」を選択します。

インストールの完了後、インストールされたコンポーネントのダイアログ・ボックスの文字、メッセージおよびオンライン・ヘルプが選択した言語で表示されます。

Web ベースのインストール

Web ブラウザから Oracle コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. Web サーバーを構成して、リリース 2 (9.2) のコンポーネント CD からファイルを提供できるようにします。
2. Oracle Universal Installer の「ファイルの場所」ウィンドウで、products.jar ファイルの URL を入力します。次に例を示します。

`http://acme.us.oracle.com/920/stage/products.jar`

前に Oracle 製品がインストールされていないコンピュータで Web ベースのインストールを実行する場合、2 つのエラーが発生する可能性があります。これらのエラーは、Oracle Administration Assistant for Windows NT および Oracle Intelligent Agent のインストール時に発生します。どちらのエラーも、Oracle Universal Installer が指定された URL からライブラリをダウンロードしようとする際に発生します。次のエラー・メッセージが表示されます。

- 1 番目のエラー：
エラーが発生しました。
- 2 番目のエラー：
ライブラリの読み込み中にエラーが発生しました。:NtServicesQueries

これら 2 つのエラーを解決するには、次のようにします。

1. どちらの場合も、エラーが発生すると、すべてのコンポーネントのインストールを中止するか、そのコンポーネントのインストールを中止するかを選択できます。そのコンポーネントのインストールのみの中止を選択し、インストールを続行します。
2. インストールの完了後、Oracle Universal Installer を再起動します。
3. 元のインストールと同じ URL を使用して、Oracle9i データベースの「カスタム」インストールを実行します。
4. Oracle Universal Installer の「使用可能な製品コンポーネント」ウィンドウで、Oracle Intelligent Agent (Oracle Enterprise Manager 製品の下) および Oracle Administration Assistant for Windows NT のインストールを選択します。他に選択されているコンポーネントの選択を解除します。

これら 2 つのコンポーネントのインストールが正常に進行します。

グローバルゼーション・サポート

この付録では、グローバルゼーション・サポートについて説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- [NLS_LANG パラメータ](#)
- 一般的に使用される [NLS_LANG の値](#)
- [MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定](#)

NLS_LANG パラメータ

Oracle では、グローバリゼーション・サポートが提供されています。これによりユーザーは、NLS_LANG パラメータによって定義された各自の言語でデータベースとの対話ができます。Oracle9i コンポーネントをインストールすると、NLS_LANG パラメータがレジストリに設定されます。

インストール時の NLS_LANG パラメータのデフォルト値は、オペレーティング・システムのロケール設定に基づいて自動的に選択されます。オペレーティング・システムのロケール値と NLS_LANG 値のマッピングのリストを、E-3 ページの「[一般的に使用される NLS_LANG の値](#)」に示します。

NLS_LANG パラメータは、
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\HOMEID\NLS_LANG サブキーのレジストリに格納されています。ID は、Oracle ホームを識別する一意の番号です。

NLS_LANG パラメータは、次のような形式です。

NLS_LANG = LANGUAGE_TERRITORY.CHARACTER_SET

文字列の意味は、次のとおりです。

LANGUAGE	言語と、その言語でメッセージ、曜日、月を表示する場合の規則などを指定します。
TERRITORY	地域と、その地域で週数と日数を計算する場合の規則などを指定します。
CHARACTER_SET	メッセージを表示する場合に使用するキャラクタ・セットを制御します。

関連資料：

- 複数の Oracle ホームに対するサブキーの場所の詳細は、『Oracle9i Database for Windows スタート・ガイド』を参照してください。
- NLS_LANG パラメータおよびグローバリゼーション・サポートの初期化パラメータの詳細は、『Oracle9i Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照してください。

一般的に使用される NLS_LANG の値

表 E-1 は、様々なオペレーティング・システムのリケールに対して一般的に使用される NLS_LANG 値の一覧です。

表 E-1 NLS_LANG パラメータの値

オペレーティング・システム のロケール	NLS_LANG の値
アラビア語 (U.A.E.)	ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256
ブルガリア語	BULGARIAN_BULGARIA.CL8MSWIN1251
カタロニア語	CATALAN_CATALONIA.WE8MSWIN1252
中国語 (PRC)	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16GBK
中国語 (台湾)	TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16MSWIN950
クロアチア語	CROATIAN_CROATIA.EE8MSWIN1250
チェコ語	CZECH_CZECH REPUBLIC.EE8MSWIN1250
デンマーク語	DANISH_DENMARK.WE8MSWIN1252
オランダ語 (オランダ)	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8MSWIN1252
英語 (イギリス)	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8MSWIN1252
英語 (アメリカ)	AMERICAN_AMERICA.WE8MSWIN1252
エストニア語	ESTONIAN_ESTONIA.BLT8MSWIN1257
フィンランド語	FINNISH_FINLAND.WE8MSWIN1252
フランス語 (カナダ)	CANADIAN FRENCH_CANADA.WE8MSWIN1252
フランス語 (フランス)	FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252
ドイツ語 (ドイツ)	GERMAN_GERMANY.WE8MSWIN1252
ギリシア語	GREEK_GREECE.EL8MSWIN1253
ヘブライ語	HEBREW_ISRAEL.IW8MSWIN1255
ハンガリア語	HUNGARIAN_HUNGARY.EE8MSWIN1250
アイスランド語	ICELANDIC_ICELAND.WE8MSWIN1252
インドネシア語	INDONESIAN_INDONESIA.WE8MSWIN1252
イタリア語 (イタリア)	ITALIAN_ITALY.WE8MSWIN1252
日本語	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS
韓国語	KOREAN_KOREA.KO16MSWIN949

表 E-1 NLS_LANG パラメータの値 (続き)

オペレーティング・システム のロケール	NLS_LANG の値
ラトビア語	LATVIAN_LATVIA.BLT8MSWIN1257
リトアニア語	LITHUANIAN_LITHUANIA.BLT8MSWIN1257
ノルウェー語	NORWEGIAN_NORWAY.WE8MSWIN1252
ポーランド語	POLISH_POLAND.EE8MSWIN1250
ポルトガル語 (ブラジル)	BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8MSWIN1252
ポルトガル語 (ポルトガル)	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8MSWIN1252
ルーマニア語	ROMANIAN_ROMANIA.EE8MSWIN1250
ロシア語	RUSSIAN_CIS.CL8MSWIN1251
スロバキア語	SLOVAK_SLOVAKIA.EE8MSWIN1250
スペイン語 (スペイン)	SPANISH_SPAIN.WE8MSWIN1252
スウェーデン語	SWEDISH_SWEDEN.WE8MSWIN1252
タイ語	THAI_THAILAND.TH8TISASCII
スペイン語 (メキシコ)	MEXICAN SPANISH_MEXICO.WE8MSWIN1252
スペイン語 (ベネズエラ)	LATIN AMERICAN SPANISH_VENEZUELA.WE8MSWIN1252
トルコ語	TURKISH_TURKEY.TR8MSWIN1254
ウクライナ語	UKRAINIAN_UKRAINE.CL8MSWIN1251
ベトナム語	VIETNAMESE_VIETNAM.VN8MSWIN1258

MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定

Oracle Internet Directory コマンドライン・ツールや、SQL*Plus、SQL Loader、Import、Export などの Oracle Utilities を MS-DOS モードで使用するときは、最初にそのセッションの NLS_LANG パラメータのキャラクタ・セット・フィールドを正しい値に設定する必要があります。

注意： Oracle Internet Directory コマンドライン・ツールは、コマンド・プロンプトから実行します。これらのツールを実行するために、Windows 用の UNIX エミュレーション・ユーティリティは不要です。エミュレーション・ユーティリティは、Oracle Internet Directory のシェル・スクリプト・ツールを実行する場合にのみ必要です。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

いくつかの例外はありますが、MS-DOS モードでは Windows (ANSI コードページ) とは異なるキャラクタ・セット (またはコードページ) を使用し、レジストリ内のデフォルトの Oracle ホームの NLS_LANG パラメータが常に該当する Windows コードページに設定されているため、このように正しい値の設定が必要になります。MS-DOS モード・セッションの NLS_LANG パラメータが適切に設定されていない場合、キャラクタ・セットの変換が正しく行われないうえにエラー・メッセージやデータが破損する可能性があります。

日本語、韓国語、中国語 (簡体字) および中国語 (繁体字) では、MS-DOS コードページは ANSI コードページと同一です。このような場合は、MS-DOS モードで NLS_LANG パラメータを設定する必要はありません。

バッチ・モードでも同様に、バッチ・プロシージャの開始時に SET NLS_LANG コマンドを挿入して、プロシージャで処理するファイルのキャラクタ・セットに応じて、NLS_LANG に適切なキャラクタ・セット値を設定します。

表 E-2 は、様々なオペレーティング・システムのロケールに対して MS-DOS モードに対応する Oracle キャラクタ・セットの一覧です。

表 E-2 オペレーティング・システムのロケールに対する Oracle キャラクタ・セット

オペレーティング・システムのロケール	キャラクタ・セット
アラビア語	AR8ASMO8X
カタロニア語	WE8PC850
中国語 (PRC)	ZHS16GBK
中国語 (台湾)	ZHT16MSWIN950
チェコ語	EE8PC852
デンマーク語	WE8PC850

表 E-2 オペレーティング・システムのロケールに対する Oracle キャラクタ・セット (続き)

オペレーティング・システムのロケール	キャラクタ・セット
オランダ語	WE8PC850
英語 (イギリス)	WE8PC850
英語 (アメリカ)	US8PC437
フィンランド語	WE8PC850
フランス語	WE8PC850
ドイツ語	WE8PC850
ギリシア語	EL8PC737
ハンガリア語	EE8PC852
イタリア語	WE8PC850
日本語	JA16SJIS
韓国語	KO16MSWIN949
ノルウェー語	WE8PC850
ポーランド語	EE8PC852
ポルトガル語	WE8PC850
ルーマニア語	EE8PC852
ロシア語	RU8PC866
スロバキア語	EE8PC852
スロベニア語	EE8PC852
スペイン語	WE8PC850
スウェーデン語	WE8PC850
トルコ語	TR8PC857

関連資料： Oracle Internet Directory のグローバリゼーション・サポートの問題および Oracle Internet Directory 環境の様々なコンポーネントおよびツールに必要な環境変数 NLS_LANG の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の「ディレクトリにおけるグローバリゼーション・サポート」を参照してください。

用語集

Enterprise Edition

データベースの完全なインストール・タイプ。

ldap.ora ファイル (ldap.ora file)

Oracle Net Configuration Assistant により作成されるファイルで、次のディレクトリ・アクセス情報を含む。

- ディレクトリのタイプ
- ディレクトリの場所
- クライアントまたはサーバーがデータベース・サービスに接続するための接続識別子を
検索または構成するために使用する、デフォルトの管理コンテキスト

ldap.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\network\admin に置かれる。

listener.ora ファイル (listener.ora file)

リスナーが次の項目を識別するための構成ファイル。

- リスナー名
- 接続要求を受け付けたプロトコル・アドレス
- リスニング対象のサービス

listener.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\network\admin に置かれる。

Oracle9i データベースはサービス登録によりデータベース・サービスの識別を必要としない。ただし、Oracle Enterprise Manager を使用する場合は、Oracle9i データベースに静的なサービス構成が必要。

OPSS\$

初期化ファイル・パラメータ `OS_AUTHENT_PREFIX` により、データベースに接続するユーザーを認証するために Oracle で使用される接頭辞をユーザーが指定できる。Oracle は、このパラメータの値をユーザーのオペレーティング・システム・アカウント名およびパスワードの前に連結する。接続要求が発行されると、Oracle は接頭辞の付いたユーザー名をデータベース内の Oracle ユーザー名と比較する。

このパラメータのデフォルト値は "" (NULL 文字列) であり、この場合、オペレーティング・システム・アカウント名に接頭辞は追加されない。旧リリースでは、`OPSS$` (オペレーティング・システム固有の短縮名) がデフォルト設定であった。

Oracle Cluster Setup Wizard

Oracle Cluster Setup Wizard は、すべてのノード上で次のタスクを実行する。

- Oracle9i オペレーティング・システム固有クラスタウェアのインストールおよび起動。
- オプションとして、OracleClusterFileSystem サービスをインストールして起動し、1 つまたは 2 つの共有ファイル・システムを作成する。
- オプションとして、Object Link Manager をインストールし、Oracle Object Service をすべてのノードで起動する。このツールにより、論理ドライブへの永続シンボリック・リンクが作成される。このサービスは、シンボリック・リンクが変更されるとすべてのノードを更新し、コンピュータを停止して再起動した際に常に起動されるよう「自動」に設定される。
- Oracle Object Link Manager の以前の起動時に作成された既存シンボリック・リンク情報の保持。
- 全ノードでの他のディスク管理ツールのインストール。
- 既存クラスタへのノードの追加。

Oracle Management Server

Oracle Enterprise Manager の中間層で、集中化されたインテリジェント機能と配布制御をコンソール・クライアントと管理対象ノードの間で実現する。

Oracle Net Foundation レイヤー (Oracle Net foundation layer)

クライアント・アプリケーションとサーバー間の接続の確立と維持、およびこれらの間でのメッセージ交換を行うネットワーク通信レイヤー。

Oracle コンテキスト (Oracle Context)

相対識別名が cn=OracleContext のディレクトリ・サブツリーのルートで、すべての Oracle ソフトウェア情報が保持される。ディレクトリ内には 1 つ以上の Oracle コンテキストを含めることができる。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストと関連付けることができる。

Oracle コンテキストには、次の Oracle エントリを含めることができる。

- Oracle Net Services ディレクトリ・ネーミングとともに使用してデータベース接続を行う接続識別子
- Oracle Advanced Security とともに使用するエンタープライズ・ユーザー・セキュリティ

Oracle スキーマ (Oracle schema)

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバーに格納できるものを決定する規則の集合。Oracle には、Oracle Net Services エントリなど、多くの Oracle エントリ・タイプに適用される独自のスキーマがある。Oracle Net Services エントリ用の Oracle スキーマは、エントリに含まれる属性を含む。

Oracle ホーム (Oracle home)

Oracle コンポーネントをインストールするディレクトリ・パス（たとえば、D:\oracle\ora92 など）。Oracle Universal Installer の「ファイルの場所」ウィンドウの「パス」フィールドで、Oracle ホームの入力が要求される。

Oracle ホーム名 (Oracle home name)

現在の Oracle ホームの名前。各 Oracle ホームには、コンピュータ上のすべての Oracle ホームと区別するために名前が付いている。インストール時に、Oracle Universal Installer の「ファイルの場所」ウィンドウの「名前」フィールドで、Oracle ホーム名の入力が要求される。

Personal Edition

インストール可能なデータベースのインストール・タイプの 1 つ。Personal Edition for Windows には、Oracle Real Application Clusters は含まれていない。

注意： Oracle9i リリース 1 (9.0.1.1.1) が、Windows 98 上の Personal Edition の最終リリースである。

SID

データベースをコンピュータ上にあるその他すべてのデータベースと区別する Oracle システム識別子。SID は、入力した文字が 8 文字以上かまたはピリオドでないかぎり、グローバル・データベース名のデータベース名部分（たとえば `sales.us.acme.com` の `sales`）に自動的にデフォルトで設定される。デフォルト値は確定または変更できる。

注意： Oracle Real Application Clusters では、入力された SID の末尾に識別子が自動的に追加される。たとえば、入力値が DB の場合、クラスタの最初のインスタンスには DB1 という SID、2 番目のインスタンスには DB2 という SID が設定される。

sqlnet.ora ファイル (sqlnet.ora file)

クライアントまたはサーバーの構成ファイルで、次を指定する。

- 修飾されていないサービス名またはネット・サービス名に追加されるクライアント・ドメイン
- 名前を解決するときにクライアントが使用するネーミング・メソッドの順序
- 使用するロギング機能およびトレース機能
- 接続の経路
- Oracle Names Server の優先順位
- 外部ネーミング・パラメータ
- Oracle Advanced Security パラメータ

sqlnet.ora ファイルは `%ORACLE_HOME%\network\admin` にある。

Standard Edition

インストール可能なデータベースのインストール・タイプの 1 つ。Standard Edition には、Oracle Advanced Security、Oracle COM Automation、Oracle OLAP、Oracle Partitioning、Oracle Real Application Clusters および Oracle Spatial は含まれていない。

Terminal Server

Microsoft Windows Terminal Server は Windows Thin クライアントのターミナル・サーバーで、Windows NT Server 上の複数の同時クライアント・セッションに対するサポートを追加する製品。Windows Terminal Server はオペレーティング・システムの GUI を Oracle9i データベースのユーザーに提供する。

tnsnames.ora ファイル (tnsnames.ora file)

接続記述子にマップされるネット・サービス名を含む構成ファイル。このファイルは、ローカル・ネーミング・メソッド用に使用される。tnsnames.ora ファイルは `%ORACLE_HOME%\network\admin` にある。

UNC

「[汎用命名規則](#)」を参照。

UNDO 表領域 (undo tablespace)

データベースを[自動 UNDO 管理モード](#)で実行する場合に、UNDO 情報のみを格納する専用表領域。UNDO 表領域には 1 つ以上の UNDO セグメントが含まれる。UNDO 表領域には他のタイプのセグメント（表、索引など）は作成できない。

自動モードの場合、各 Oracle インスタンスには、UNDO 表領域が 1 つのみ割り当てられる。各 UNDO 表領域は一連の UNDO ファイルで構成される。UNDO ブロックは、エクステンツに分けられる。任意の時点において、エクステンツはトランザクション表に割り当てられている（使用されている）か、または未使用である。

UNDO 表領域のブロックは、次のカテゴリに分けられる。

- 領域管理に使用されるファイル制御ブロック、ビットマップ・ブロックなど
- トランザクション管理に使用される、トランザクション表ブロック、UNDO ブロックおよびエクステンツマップ・ブロックを含む UNDO セグメント
- ファイル制御にも UNDO セグメントにも割り当てられていない空きブロック

インストール・タイプ (installation type)

インストールするコンポーネントを自動的に選択する事前定義のコンポーネント・セット。各最上位コンポーネントで使用可能なインストール・タイプのリストは、1-5 ページの「[インストール対象の Oracle9i 製品](#)」を参照。

オペレーティング・システム認証による接続 (operating system authenticated connections)

Windows ログオン資格証明を Oracle9i データベースへのユーザー接続の認証に使用できる。Windows システム固有の認証には、次の利点がある。

- ユーザーはユーザー名やパスワードを入力しなくても、複数の Oracle9i データベースに接続できる。
- Oracle9i データベースのユーザー認証情報を Windows で一元管理することによって、Oracle9i でユーザー・パスワードを保管または管理する必要がない。

外部プロシージャ (external procedures)

Oracle データベース上で実行される PL/SQL ルーチンでは、C プログラミング言語で記述され共有ライブラリに保存されている外部プロシージャまたは関数をコールできる。

Oracle9i データベースが外部プロシージャに接続するには、データベースをネット・サービス名で構成し、[リスナー](#)をプロトコル・アドレスおよびサービス情報で構成する必要がある。

仮想インタフェース・アーキテクチャ (Virtual Interface Architecture: VIA)

クラスタ間通信のための業界標準アーキテクチャ。VIA の高速なサーバー間通信により、アプリケーションの拡張性とパフォーマンスが向上する。VIA は、1 つのアプリケーションを数十のクラスタ化ノードで効率的に実行できるようにし、異なるアプリケーション・サーバーで動作する分散アプリケーション・モジュール間のデータ交換の速度を上げることでこれを実現している。

クラスタ (cluster)

クラスタは、一般に 2 台以上のコンピュータ（ノード）から構成される。Oracle Real Application Clusters ソフトウェア、およびクラスタと呼ばれるハードウェアの集合により、各コンポーネントの処理能力が 1 つに統合され、堅牢なコンピューティング環境を形成する。Oracle Real Application Clusters は、相互接続された複数のコンピュータの処理能力を活用した堅牢なコンピューティング環境である。

グローバル・データベース名 (global database name)

データベースをネットワーク・ドメインの他のデータベースから一意に区別する完全データベース名。たとえば、次のようになる。

`sales.us.acme.com`

`sales` はデータベース名、`us.acme.com` はデータベースが置かれているネットワーク・ドメイン。

サービス登録 (service registration)

PMON プロセス（インスタンス・バックグラウンド・プロセス）がリスナーに情報を自動的に登録する機能。この情報はリスナーに登録されるため、[listener.ora ファイル](#)はこの静的情報を構成する必要はない。

サービス登録はリスナーに次の情報を提供する。

- 実行中のデータベースの各インスタンス用のサービス名
- データベースのインスタンス名
- 各インスタンスで利用可能なサービス・ハンドラ（ディスパッチャおよび専用サーバー）

これにより、リスナーがクライアントの要求を正しく管理できる。

- ディスパッチャ、インスタンスおよびノードのロード情報

これにより、リスナーがクライアントの接続要求を処理できる最良のディスパッチャを決定できる。すべてのディスパッチャがブロックされている場合、リスナーは接続に対して専用サーバーを実行できる。

この情報により、リスナーはクライアントの接続要求を処理するために最良の方法を決定できる。

最上位コンポーネント (top-level components)

Oracle Universal Installer をコンポーネント CD から実行する場合は、「使用可能な製品」ウィンドウで、最上位コンポーネントのインストールが要求される。各最上位コンポーネントには、複数のインストール・タイプが含まれ、その中から選択できる。各インストール・タイプでは、個々のコンポーネントのセットが事前に定義されている。各最上位コンポーネントで使用可能なインストール・タイプのリストは、1-5 ページの「[インストール対象の Oracle9i 製品](#)」を参照。

システム識別子 (system identifier)

「[SID](#)」を参照。

自動 UNDO 管理モード (automatic undo management mode)

UNDO データが専用 [UNDO 表領域](#) に格納されるデータベース・モード。[手動 UNDO 管理モード](#) と異なり、ユーザーは UNDO 表領域の作成のみを管理する。他のすべての UNDO 管理は自動的に実行される。

修飾されていない名前 (unqualified name)

ネットワーク・ドメインを含まないネット・サービス名。

手動 UNDO 管理モード (manual undo management mode)

UNDO ブロックをユーザーが管理するロールバック・セグメントに格納するデータベース・モード。[自動 UNDO 管理モード](#) では、UNDO ブロックはシステム管理の専用 [UNDO 表領域](#) に格納される。

接続記述子 (connect descriptor)

特別にフォーマットされた、ネットワーク接続のための宛先の記述。接続記述子は、宛先サービスおよびネットワーク経路情報を含む。

宛先サービスは、Oracle9i データベースの場合はサービス名、リリース 8.0 またはバージョン 7 の Oracle データベースでは、Oracle システム識別子 ([SID](#)) を使用して表される。ネットワーク・ルートは、少なくとも、ネットワーク・アドレスを使用して [リスナー](#) の場所を示す。

接続識別子 (connect identifier)

接続記述子を解決する名前、ネット・サービス名またはサービス名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、接続識別子とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT username/password@connect_identifier
```

ディレクトリ・サーバー (directory server)

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバー。ディレクトリは集中化された記憶領域を提供し、データベース・ネットワーク・コンポーネント、ユーザー方針およびコーポレート方針の作業環境、ユーザーの認証およびセキュリティの情報を取り出し、クライアント側とサーバー側のローカル・ファイルを置き換える。

ディレクトリ情報ツリー (Directory Information Tree: DIT)

エントリの識別名 (DN) のディレクトリ・サーバー内の階層的なツリー構造。

ディレクトリ・ネーミング (directory naming)

ネット・サービス名を接続記述子に解決するディレクトリ・サーバーを指定する **ネーミング・メソッド**。ネット・サービス名はディレクトリ・サーバーに一元的に保存される。

ディレクトリ・ネーミング・コンテキスト (directory naming context)

ディレクトリ・サーバー内の重要なサブツリー。通常、編成されているいくつかのサブツリーの一番上となる。一部のディレクトリでは固定されたコンテキストのみ許される。他はディレクトリ管理者により構成される。

デフォルト・ドメイン (default domain)

ほとんどのクライアント要求が発生するネットワーク・ドメイン。クライアントが置かれるドメイン、またはクライアントがネットワーク・サービスを要求するドメインとなることがある。デフォルト・ドメインは、修飾されていないネットワーク名要求に追加されるドメインを決定するクライアント構成パラメータにもなる。"." 文字を含まない場合、名前要求は修飾されない。

ネーミング・メソッド (naming method)

クライアント・アプリケーションで、データベース・サービスへの接続の際、接続識別子をネットワーク・アドレスに解決するために使用される解決方法。Oracle Net Services は、次のネーミング・メソッドをサポートする。

- ローカル・ネーミング
- ディレクトリ・ネーミング
- Oracle Names
- ホスト・ネーミング
- 外部ネーミング

ネット・サービス名 (net service name)

接続記述子に解決されるサービスの単純名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、ネット・サービス名とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT username/password@net_service_name
```

必要に応じて、ネット・サービス名は次のような様々な場所に格納できる。

- ローカル構成ファイル (各クライアントの tnsnames.ora)
- ディレクトリ・サーバー
- Oracle Names Server
- 外部ネーミング・サービス (Network Information Service (NIS)、セル・ディレクトリ・サービス (CDS) など)

汎用命名規則 (Universal Naming Convention: UNC)

汎用命名規則 (UNC) は、ネットワーク・ドライブをドライブ名にマッピングせずにネットワーク上のファイルへアクセスする手段を提供する。UNC 名は次のように表される。

```
¥¥computer name¥share name¥filename
```

プロセス間通信 (Interprocess Communication: IPC)

クライアント・アプリケーションで使用されるプロトコルで、データベースとの通信のために **リスナー** と同じノードに置かれる。IPC は、TCP/IP よりも高速なローカル接続を提供する。

プロトコル・アドレス (protocol address)

ネットワーク・オブジェクトのネットワーク・アドレスを識別するアドレス。

接続が行われるとき、クライアントとその要求の受信者 (**リスナー**、Oracle Names Server または Oracle Connection Manager) は同じプロトコル・アドレスを使用して構成される。クライアントはこのアドレスを使用して接続要求を特定のネットワーク・オブジェクト位置に送信し、受信者はこのアドレスで要求のリスニングを行う。クライアントと接続受信者に対して同じプロトコルをインストールし、同じアドレスを構成することが重要である。

リスナー (listener)

サーバーに常駐するプロセスであり、クライアントからの接続要求のリスニングおよびサーバーへの通信量の管理を行う。

クライアントがデータベース・サーバーとのネットワーク・セッションを要求するときに、リスナーは実際の要求を受け取る。クライアント情報がリスナー情報と一致した場合、リスナーはデータベース・サーバーへの接続を許可する。

リポジトリ (repository)

Oracle Management Server からアクセスできる任意の Oracle データベース内にある一連の表。Oracle Management Server は、リポジトリを使用して、すべてのシステム・データとアプリケーション・データ、環境全体に分散している管理対象ノードの状態に関する情報、および別途ライセンス可能な Management Pack に関する情報を格納する。

ローカル・ネーミング (local naming)

ネット・サービス名を接続記述子に解決する **ネーミング・メソッド**。この名前は、各クライアントの **tnsnames.ora ファイル** に構成および保存される。

数字

- 3DES_112 Encryption サポート
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
- 3DES_168 Integrity サポート
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8

A

- Active Directory サポート
 - Oracle との統合のためのインストール前の要件, 2-14
- 「Administrators」グループ
 - Oracle インストールの要件, 4-4
- Advanced Queueing API
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8, A-11
 - 定義, A-16
- Advanced Replication
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-11
 - 定義, A-16
- Apache Configuration for Oracle Java Server Pages
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
- Apache Configuration for Oracle XML Developer's Kit
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
- Apache JServ
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
- Apache Web Server Files
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
- Assistant Common Files
 - 定義, A-16

B

- BaliShare, A-16
- Business Components for Java (BC4J) Runtime
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4

C

- Character Set Migration Utility, A-33
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-10, A-14
- CMWLITE 表領域
 - cwmlite01.DBF データ・ファイル, 5-9
 - 説明, 5-9
- crlogdr ユーティリティ, B-16
- CTXSYS
 - データベース・ロール, 5-5
 - ユーザー名およびパスワード, 5-5
- custom.rsp ファイル
 - 説明, D-2
- cwmlite01.dbf データ・ファイル, 5-9
- CWMLITE 表領域
 - Oracle Real Application Clusters, B-4
- CyberSafe サポート
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-8

D

- Database Configuration Assistant
 - listener.ora ファイルの構成, 3-9, 3-11
 - Oracle Real Application Clusters の構成, 3-9
 - インストール時に自動的に起動する, 4-11
 - 「カスタム」データベース・タイプの作成, 3-7
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-11
 - 定義, A-16

データベース環境の作成, 3-4, 3-5
データベースの作成方法の選択, 3-5
同一インストール・セッションで Oracle Database
Upgrade Assistant とは同時に起動しない,
4-12

Database Verify Utility, A-33
DB_DOMAIN パラメータ, 5-7
DB_NAME パラメータ, 5-7
dbca.rsp ファイル
説明, D-3
DBSNMP
データベース・ロール, 5-5
ユーザー名およびパスワード, 5-5
DBUI, A-16
DCE サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
DeleteDisk ユーティリティ, B-15
DES40 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
DES56 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
drsys01.dbf データ・ファイル, 5-9
DRSYS 表領域
Oracle Real Application Clusters, B-4
説明, 5-9
DSS
データ・ウェアハウス・データベース環境と同じ,
3-4

E

emca.rsp ファイル
説明, D-3
「Enterprise Edition」インストール・タイプ
インストールされるコンポーネント, A-2
定義, 1-6
enterprise.rsp ファイル
説明, D-2
Entrust サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
EWT, A-16
example01.DBF データ・ファイル, 5-9
EXAMPLE 表領域
example01.DBF データ・ファイル, 5-9
説明, 5-9
ExportSYMLinks ユーティリティ, B-16

F

FAT
システム要件, 2-3

G

Generic Connectivity
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-11
定義, A-17

I

ICE Browser, A-16
ImportSYMLinks ユーティリティ, B-16
indx01.dbf データ・ファイル, 5-9
INDX 表領域
indx01.dbf データ・ファイル, 5-9
Oracle Real Application Clusters, B-4
説明, 5-9
installActions.log ファイル, 2-2, 4-33
Inventory ディレクトリ, 4-33
IPC
構成, 3-9
iSQL*Plus
使用可能なインストール・タイプ, A-2
定義, A-17

J

Java Runtime Environment
Oracle バージョン, 1-5
定義, A-17
変更の制限事項, 1-5
要件, 2-3
Java Swing Components, A-16
Java Virtual Machine
使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
JDBC, A-25
JRE, 「Java Runtime Environment」を参照
JSDK
使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
JVM Accelerator
使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
定義, A-35

K

Kerberos サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
Kodiak, A-16

L

LBACSYS

データベース・ロール, 5-5
ユーザー名およびパスワード, 5-5

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバー

ディレクトリ・サーバーでクライアントを構成,
3-11
ディレクトリ・サーバーでデータベースを構成,
3-10

LetterDelete ユーティリティ, B-15

listener.ora ファイル

Database Configuration Assistant を使用した構成,
3-9, 3-11
Oracle Net Configuration Assistant を使用した構
成, 3-9, 3-10

LogPartFormat ユーティリティ, B-15

LU6.2 プロトコル・サポート, xxiv

M

MD5 Integrity サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8

MDSYS

データベース・ロール, 5-5
ユーザー名およびパスワード, 5-5

Microsoft ODBC 仕様

Oracle ODBC ドライバが準拠する, A-29

Microsoft 管理コンソール用の Oracle Snap-In

Oracle との統合のためのインストール前の要件,
2-13

MIG, 「Migration Utility」を参照

Migration Utility, A-33

使用可能なインストール・タイプ, A-14
使用方法, 2-15, 2-16
データベース・リリース 7.3.4.0.0 以上が必要, 2-15

MS-DOS モード

NLS_LANG パラメータの設定, E-5

N

Net Services

「カスタム」インストール・タイプによるインス
トール, 4-13, 4-16

構成に必要なユーザー入力, 3-2

削除, 4-36

サポートされる構成方法, 3-2

ディレクトリ・サーバーでデータベースを構成,
3-10

ネットワーク構成ファイルの場所, 3-8

netca.rsp ファイル

説明, D-3

NLS_LANG パラメータ, E-2

MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの設定,
E-5

地域およびキャラクタ・セットのデフォルト, E-3

NTFS

システム要件, 2-3

ファイル・システム権限の設定, 6-2

O

Object Link Manager, B-15

Object Type Translator

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8,
A-11

定義, A-17

OCI

使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9,
A-12

定義, A-18

ODBC, 「Oracle ODBC ドライバ」を参照

ODM 表領域

Oracle Real Application Clusters, B-4

oem_repository.ora

データ・ファイル, 5-10

OiD Configuration Assistant

Database Configuration Assistant の自動的な起動,
4-24, 4-31

インストール時に自動的に起動する, 4-24, 4-31

使用可能なインストール・タイプ, A-13

定義, A-25

OiD Upgrade Assistant

インストール時に自動的に起動する, 4-26

OIDCTL ユーティリティ

Oracle Internet Directory Server の停止, 4-35

- OIDMON ユーティリティ
 - Oracle Internet Directory Windows サービスの削除, 4-35
- oid.rsp ファイル
 - 説明, D-2
- OLAP, 「Oracle OLAP」を参照
- OLAPSYS
 - データベース・ロール, 5-5
 - ユーザー名およびパスワード, 5-5
- OLTP
 - 定義, 3-4
 - データベース環境, 3-4
- omicustom.rsp ファイル
 - 説明, D-2
- OMSNTSRV ユーティリティ
 - Oracle Management Server サービスの削除, 4-36
- oms.rsp ファイル
 - 説明, D-2
- Online Transaction Processing, 「OLTP」を参照
- OP\$
 - 構成, 3-9, 3-10, 3-12
- Optimal Flexible Architecture
 - インストールの問題および制限事項, 1-2
- Oracle Administration Assistant for Windows NT
 - インストール後の構成タスク, 6-8
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2
 - 定義, A-17
- Oracle Administrative Assistant for Windows NT
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-8
- Oracle Advanced Security
 - Oracle Enterprise Login Assistant, A-3, A-8, A-11
 - Oracle Enterprise Security Manager, A-3, A-9
 - Oracle Wallet Manager, A-3, A-9
 - SSO サポートの定義, A-18
 - Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート, A-3, A-9
 - 暗号化と整合性のサポート, A-2, A-8
 - 暗号化と整合性のサポートの定義, A-18
 - インストール後の構成タスク, 6-8
 - インストール前の要件, 2-9
 - エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ, A-8
 - エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポートの定義, A-18
 - エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポートの認証, A-3
 - 概要の定義, A-17
- 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8, A-11
- 認可サポートの定義, A-18
- 認証サポート, A-2, A-8
- 認証サポートの定義, A-18
- Oracle Call Interface
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-12
 - 定義, A-18
- Oracle Change Management Pack
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9, A-12
- Oracle Cluster Configuration Assistant
 - インストール時に自動的に起動する, 4-11
- Oracle COM Automation
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3
 - 定義, A-19
- Oracle Connection Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-12
 - 定義, A-19
- Oracle Data Gatherer
 - Oracle Intelligent Agent とともにインストールされる, A-23
- Oracle Database Demos
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-15
 - 定義, A-19
- Oracle Database Upgrade Assistant
 - Oracle Universal Installer でのアップグレード, 4-9
 - インストール時に自動的に起動する, 4-11, 4-13, 4-26
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-12
 - 定義, A-19
 - データベース・リリース 7.3.4 以上が必要, 2-15
 - 同一インストール・セッションで Database Configuration Assistant とは同時に起動しない, 4-12
- Oracle Database Utilities
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3
- Oracle Diagnostics Pack
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9, A-12
- Oracle Directory Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-12
 - 定義, A-20
- Oracle Dynamic Services
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3

- Oracle Dynamic Services Server
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-12
- Oracle Enterprise Login Assistant
 - Oracle Advanced Security の機能, A-3, A-8, A-11
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8, A-11
 - 定義, A-20
- Oracle Enterprise Manager
 - Oracle Enterprise Manager Paging Server の要件, 2-12
 - Oracle Management Server の要件, 2-10
 - Web ブラウザの要件, 2-11
 - インストール後の構成タスク, 6-8
 - インストール前の要件, 2-10
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-12
 - 定義, A-21
- Oracle Enterprise Manager Client
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-12
 - 定義, A-21
- Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant
 - 新しいリポジトリの作成, 2-10, 4-20, 6-8
 - インストール時に自動的に起動する, 4-19
 - 既存のリポジトリの使用, 2-10, 4-20, 6-8
 - サイレント・モードでの実行, D-3
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
 - 定義, A-21
- Oracle Enterprise Manager Integrated Applications
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-12
 - 定義, A-22
- Oracle Enterprise Manager Migration Assistant
 - 新しいリポジトリへのアップグレード, 4-18
- Oracle Enterprise Manager Paging Server
 - インストール要件, 2-12
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-12
 - 定義, A-22
- Oracle Enterprise Manager Quick Tours
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-12
 - 定義, A-22
- Oracle Enterprise Manager Web Site
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
 - 定義, A-22
 - ブラウザの要件, 2-11
- Oracle Enterprise Manager コンソール
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-12
 - 定義, A-21
- Oracle Enterprise Security Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-11, A-12
 - 定義, A-22
- Oracle for Windows NT Performance Monitor
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5
 - 単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
 - 定義, A-29
- Oracle Forms Server Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-12
 - 定義, A-19
- Oracle Help for Java, A-16
- Oracle Home Selector
 - 定義, A-23
- Oracle HTTP Server
 - Oracle Enterprise Manager Web Site の要件, 2-11
 - インストール後の構成タスク, 6-9
 - インストール時にサービスを自動的に起動する, 4-11, 4-19, 4-23, 4-31
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4
 - 定義, A-23
- Oracle Intelligent Agent
 - Oracle Agent Extensions をインストールできない, A-23
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
 - 定義, A-23
- Oracle *interMedia*
 - インストール後の構成タスク, 6-9
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4
 - 定義, A-23
- Oracle *interMedia* Annotator
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-9, A-13
- Oracle *interMedia* Audio
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-5, A-13
 - 定義, A-23
- Oracle *interMedia* Client Option
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9, A-13
 - 定義, A-24
- Oracle *interMedia* Image
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-13
 - 定義, A-24

Oracle *interMedia* Java Client

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10,
A-13

Oracle *interMedia* Locator

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-13
定義, A-24

Oracle *interMedia* Video

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-13
定義, A-24

Oracle *interMedia* Web Client

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10

Oracle Internet Directory

MS-DOS モードでのコマンドライン・ツールの実
行, E-5

Oracle Internet Directory での 9.2 データベースの構
成, 2-12

UNIX エミュレーション・ユーティリティの要件,
6-9

インストール, 1-7

インストール後の構成タスク, 6-9

インストール前の要件, 2-12

「カスタム」インストール・タイプによるインス
トール, 4-29

機能, 1-7

グローバル化・サポートの問題, E-6

最初のインストール, 4-22

削除, 4-36

ダウングレード要件, 2-12

ツールに必要な環境変数 NLS_LANG, E-6

定義, A-25

Oracle Internet Directory Client

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10,
A-13

定義, A-25

Oracle Internet Directory Client Toolset

使用可能なインストール・タイプ, A-13

Oracle Internet Directory Configuration Assistant,

「OiD Configuration Assistant」を参照

Oracle Internet Directory Server

Oracle サービスの削除, 4-35

使用可能なインストール・タイプ, A-13

定義, A-25

停止, 4-35

「Oracle Internet Directory」インストール・タイプ

インストール, 4-21

インストールされるコンポーネント, A-11

定義, 1-7

Oracle INTYPE File Assistant

定義, A-25

Oracle Java Tools

使用可能なインストール・タイプ, A-10

Oracle JDBC ドライバ

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10,
A-13

定義, A-25

Oracle JVM

Oracle9i データベース・タイプのネーミング規則,
A-26

使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14

定義, A-26

Oracle Management Pack for Oracle Applications

使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9,
A-12

Oracle Management Server

Oracle NT サービスの削除, 4-36

新しいリポジトリの作成, 2-10, 4-18, 6-8

アップグレードの制限, 4-18

インストール前の要件, 2-10

「カスタム」インストール・タイプによるインス
トール, 4-13

既存のリポジトリの使用, 2-10, 4-18, 6-8

使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13

定義, A-26

「Oracle Management Server」インストール・タイプ

インストール, 4-18

定義, 1-7

Oracle Migration Workbench

Oracle 以外のデータベースからの移行がサポートさ
れる, A-27

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10

定義, A-27

Oracle Mod PL/SQL Gateway

使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13

Oracle Names

使用可能なインストール・タイプ, A-5

定義, A-27

Oracle Net

構成方法の選択, 3-8

サーバー環境の構成, 3-8

Oracle Net Configuration Assistant

listener.ora ファイルの構成, 3-9, 3-10

sqlnet.ora ファイルの構成, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12

tnsnames.ora ファイルの構成, 3-9, 3-10, 3-11

- インストール時に自動的に起動する, 4-11, 4-19, 4-23, 4-31
- クライアント環境の構成, 3-11
- 定義, A-27
- ディレクトリ・サーバーでクライアントを構成, 3-11
- ディレクトリ・サーバーにアクセスするようデータベースを構成, 3-8, 3-10
- ディレクトリ・サーバーへのクライアント・アクセスの構成, 3-11
- Oracle Net Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-5, A-14
 - 定義, A-28
- Oracle Net Services
 - インストール後の構成タスク, 6-13
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10, A-14
- Oracle Net リスナー
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-14
- Oracle Object Service, 用語集-2
- Oracle Objects for OLE
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10, A-14
 - 単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
 - 定義, A-29
- Oracle ODBC ドライバ
 - Microsoft ODBC 仕様に準拠, A-29
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10, A-14
 - 定義, A-29
- Oracle OLAP
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5
 - 定義, A-29
- Oracle OLAP API
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5
- Oracle Open Database Connectivity ドライバ, 「Oracle ODBC ドライバ」を参照
- Oracle OSD
 - Oracle Real Application Clusters, B-3
 - 削除, B-17
- Oracle Partitioning
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-14
 - 定義, A-29
- Oracle Perl Interpreter
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
- Oracle Procedural Gateway for APPC
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5
- Oracle Procedural Gateways for IBM MQSeries
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5
- Oracle Programmer
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-10
- Oracle Protocol Support
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-7
- Oracle Provider for OLE DB
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10, A-14
 - 単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
 - 定義, A-30
- Oracle Real Application Clusters
 - CWMLITE 表領域, B-4
 - Database Configuration Assistant を使用した構成, 3-9
 - DRSYS 表領域, B-4
 - INDX 表領域, B-4
 - ODM 表領域, B-4
 - Oracle Object Service, 用語集-2
 - REDO ログ・ファイル, B-4
 - SID, 4-10
 - SID の割当て, 4-10
 - SYSTEM 表領域, B-4
 - TOOLS 表領域 (tools01.dbf), B-4
 - UNDOTBS 表領域, B-4
 - USERS 表領域, B-4
 - USERS 表領域 (users01.dbf), B-4
 - XML 表領域, B-4
 - アップグレード要件, 2-13, 2-16
 - インストール後の構成タスク, 6-13
 - インストール前のタスク, B-3
 - 「カスタム」インストール・タイプによるインストール, 4-13
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5
 - シンボリック・リンクの作成, B-15
 - 制御ファイル, B-4
 - ソフトウェアをインストールするクラスター・ノードの選択, 4-6
 - 定義, A-30
 - 「ディスクの管理」の使用, B-8
 - データ・ファイル, B-4
 - 投票ディスク, B-4
- Oracle Remote Configuration Agent
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-14
 - 定義, A-30
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server

- Microsoft Transaction Server のインストールが必要, 4-13, 4-17
- インストール後の構成タスク, 6-14
- 「カスタム」インストール・タイプによるインストール, 4-13, 4-17
- 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-10
- 定義, A-31
- Oracle SNMP Agent
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-14
 - 定義, A-31
- Oracle SOAP Client
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
- Oracle SOAP for JServ
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
- Oracle SOAP Server
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
- Oracle Spatial
 - インストール後の構成タスク, 6-9
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6
 - 定義, A-31
- Oracle Spatial Index Advisor
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9, A-12
 - 定義, A-31
- Oracle SQLJ
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-10, A-14
 - 定義, A-31
- Oracle Standard Management Pack
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9, A-12
- Oracle Syndication Server
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-10, A-14
- Oracle Text
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6
 - 定義, A-32
- Oracle Text Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9, A-12
 - 定義, A-32
- Oracle Trace
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
 - 定義, A-32
- Oracle Transparent Gateway
 - Microsoft SQL Server
 - インストール・ワークシート, C-8
 - システム要件, C-3
- Sybase
 - インストール・ワークシート, C-9
 - システム要件, C-4
- Teradata
 - インストール・ワークシート, C-9
 - システム要件, C-5
 - インストール, C-10
 - インストール・ワークシート, C-8
 - 削除, C-10
 - システム要件, C-2
 - ソフトウェア要件, C-2
 - ハードウェア要件, C-2
- Oracle Transparent Gateway for IBM DRDA
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6
- Oracle Transparent Gateway for Microsoft SQL Server
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6
- Oracle Transparent Gateway for Sybase
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6
- Oracle Transparent Gateway for Teradata
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6
- Oracle Tuning Pack
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9, A-12
- Oracle Ultra Search Middle Tier
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-10, A-14
- Oracle Ultra Search Server
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
- Oracle Universal Installer
 - 8.1.5 より前のホームへのインストールの制限事項, 1-5, 4-5
 - Database Configuration Assistant の実行, 3-5
 - Net Services 環境の構成, 3-2
 - Oracle Net Configuration Assistant の実行, 3-8
 - Oracle Net 構成方法の選択, 3-8
 - インベントリ, 4-33
 - 異なる言語での実行方法, D-8
 - コンポーネントの削除, 4-36
 - コンポーネントを異なる言語で実行, D-9
 - サイレント・モードでの実行, D-2
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-10, A-14
 - 使用方法のドキュメント, 1-5
 - 定義, 1-4, A-33
 - データベースの作成, 3-2
 - 非対話形式モードでの実行, D-2

- ログ・ファイル, 4-33
- Oracle Utilities
 - Database Verify Utility, A-33
 - Migration Utility, A-33
 - MS-DOS モードでの設定, E-5
 - Recovery Manager, A-33
 - SQL*Loader, A-33
 - インポート・ユーティリティ, A-33
 - エクスポート・ユーティリティ, A-33
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-10, A-14
 - 定義, A-33
- Oracle Wallet Manager
 - Oracle Advanced Security の機能, A-3
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9, A-11
 - 定義, A-33
- Oracle Workflow
 - Oracle との統合のためのインストール前の要件, 2-14
 - インストール後の構成タスク, 6-14
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-14
 - 定義, A-33
- Oracle Workflow Builder
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-10
 - 定義, A-34
- Oracle Workflow Configuration Assistant, 4-32
 - インストール時に自動的に起動する, 4-32
- Oracle Workflow Mailer
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-10
 - 定義, A-34
- Oracle Workflow Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
- Oracle Workspace Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-14
- Oracle XML Developer's Kit
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-10, A-14
 - 定義, A-35
- Oracle XML SQL Utility
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-10, A-14
 - 定義, A-35
- ORACLE_HOME
 - 環境での設定の制限事項, 4-5
- ORACLE_HOME 環境パラメータ
 - パスに設定しない, 4-5
- Oracle9i
 - 概要, 1-2
 - 「カスタム」インストール・タイプによるインストール, 4-13
 - 機能, 1-2
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-15
 - 定義, A-36
- Oracle9i Development Kit
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6
- Oracle9i Enterprise Edition
 - 定義, 1-6
- Oracle9i Globalization Support
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-10, A-15
- Oracle9i Management and Integration
 - インストールされるコンポーネント, A-11
 - 使用可能なインストール・タイプ, 1-7, A-11
 - 定義, 1-7
- Oracle9i Standard Edition
 - 定義, 1-6
- Oracle9i Windows Documentation
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-10, A-15
 - 定義, A-36
- Oracle9i クライアント
 - 使用可能なインストール・タイプ, 1-6, A-2, A-8
 - 定義, 1-6
- Oracle9i 最上位コンポーネント
 - 使用可能なインストール・タイプ, 1-6
- Oracle9i データベース
 - 使用可能なインストール・タイプ, 1-6, A-2
- OraclePGMSService, B-17
- Oracle インベントリ
 - ログ・ファイル, 4-33
- Oracle サービス
 - 停止, 4-4, 4-35
- Oracle ホーム
 - 単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
 - 単一ホーム・コンポーネントの 2 回目のインストール, 2-2
- Oracle ホーム名
 - 最大長, 4-6
- ORADIM ユーティリティ
 - 使用方法, 2-16
 - ドキュメント, A-33
- ORDPLUGINS
 - データベース・ロール, 5-5
 - ユーザー名およびパスワード, 5-5

ORDSYS

データベース・ロール, 5-5
ユーザー名およびパスワード, 5-5

OTT

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8,
A-11
定義, A-17

OUTLN

データベース・ロール, 5-6
ユーザー名およびパスワード, 5-6

P

Performance Monitor, A-29

Personal Edition

定義, 1-6
「Personal Edition」インストール・タイプ
定義, 1-6

personal.rsp ファイル

説明, D-2

PL/SQL

使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-7,
A-10, A-15
定義, A-36

PL/SQL Embedded Gateway

使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-15
定義, A-36

PL/SQL 外部プロシージャ

インストール後の構成タスク, 6-15

PL/SQL モジュール

妥当性チェック, 6-6

Pro*C/C++

使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-10,
A-15
定義, A-37

Pro*COBOL

インストール後の構成タスク, 6-15
使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-10,
A-15
定義, A-37

R

RADIUS サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8

RAW パーティション

DRSYS 表領域, B-4

INDX 表領域, B-4

SYSTEM 表領域, B-4

TOOLS 表領域, B-4

UNDOTBS 表領域, B-4

USERS 表領域, B-4

データ・ファイル, B-4

RC4_128 Encryption サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8

RC4_256 Encryption サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8

RC4_40 Encryption サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8

RC4_56 Encryption サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8

Recovery Manager, A-33

REDO ログ・ファイル, 5-11

Oracle Real Application Clusters, B-4

初期データベース, 5-11

Replication Management API

使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-11,
A-15
定義, A-16

S

Sample Schema Demos

使用可能なインストール・タイプ, A-7

SCOTT

データベース・ロール, 5-6
ユーザー名およびパスワード, 5-6

Server Management (SRVM)

定義, A-37

Service Pack, 2-4

Service Pack 要件, 2-4

SERVICE_NAMES パラメータ, 5-7

SHA-1 Integrity サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8

SID

Oracle Real Application Clusters, 4-10

SQL*Loader, A-33

SQL*Plus

MS-DOS モードでの NLS_LANG パラメータの設
定, E-5

使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-11,
A-15

定義, A-37

SQL*Plus Worksheet

定義, A-37
SQLJ Runtime
定義, A-37
SQLJ Translator
使用可能なインストール・タイプ, A-14
定義, A-38
sqlnet.ora ファイル
Oracle Net Configuration Assistant を使用した構成, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12
SSO サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
定義, A-18
「Standard Edition」インストール・タイプ
インストールされるコンポーネント, A-2
定義, 1-6
standard.rsp ファイル
説明, D-2
Sun SDK
使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-13
SYS
データベース・ロール, 5-4
ユーザー名およびパスワード, 5-4
SYSTEM
データベース・ロール, 5-4
ユーザー名およびパスワード, 5-4
system01.dbf データ・ファイル, 5-9
SYSTEM 表領域
説明, 5-9
SYSTEM 表領域、Oracle Real Application Clusters, B-4

T

temp01.dbf データ・ファイル, 5-9
TEMP 表領域 (temp01.dbf)
Oracle Real Application Clusters, B-4
説明, 5-9
Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-9
tnsnames.ora ファイル
Oracle Net Configuration Assistant を使用した構成, 3-9, 3-10, 3-11
tools01.dbf データ・ファイル, 5-9
TOOLS 表領域 (tools01.dbf)
Oracle Real Application Clusters, B-4
説明, 5-9

Transparent Gateway, 「Oracle Transparent Gateway」を参照

U

undotbs01.dbf データ・ファイル, 5-10
UNDOTBS 表領域
Oracle Real Application Clusters, B-4
UNDOTBS 表領域 (undotbs01.dbf)
説明, 5-10
UNDO セグメント
初期データベース, 5-12
UNIX
Windows での Oracle のインストールとの相違, 4-2
users01.dbf データ・ファイル, 5-10
USERS 表領域 (users01.dbf)
Oracle Real Application Clusters, B-4
説明, 5-10
utlrlp.sql ファイル, 6-6

W

Web ブラウザ
Oracle Enterprise Manager の要件, 2-11
Web ベースのインストール, D-10
Windows
UNIX での Oracle のインストールとの相違, 4-2
Windows 2000 の Terminal Services Client
Oracle Real Application Clusters, B-18
Windows 98
最初の Oracle インストール後の再起動, 4-15, 4-17
Windows Terminal Server
サポートされないコンポーネント, 2-7
Windows XP
サポートされないコンポーネント, 2-8
Windows の Oracle サービス
停止, 4-4, 4-35
WINSOCK2 サポート
定義, A-38

X

XDB 表領域 (xdb01.dbf)
説明, 5-10
XML
Oracle XML Developer's Kit, A-6, A-10, A-14, A-35

Oracle XML SQL Utility, A-6, A-10, A-14
XML 表領域
Oracle Real Application Clusters, B-4

あ

アップグレード

Oracle Database Upgrade Assistant を使用, 4-9
Oracle Real Application Clusters の要件, 2-13, 2-16
Oracle のコマンドライン・ツールの使用, 2-15
アップグレード前のバックアップ, 4-4
インストール時に Oracle Database Upgrade Assistant を自動的に起動する, 4-11
要件, 2-14

暗号化と整合性のサポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
定義, A-18

い

異機種間サービス, 「Generic Connectivity」を参照 移行

7.3.4 および 8.0.6 より前のリリースからの, 2-15
Oracle 以外のデータベースから, A-27
必要な Oracle7 Server SQL*Net パッチのリリース, 2-16

意思決定支援システム, 「DSS」を参照

インストール

8.1.5 より前のホームへのインストールの制限事項, 1-5, 4-5
Oracle Internet Directory, 1-7
「Oracle Internet Directory」インストール・タイプ, 4-21
「Oracle Management Server」インストール・タイプ, 4-18
UNIX と Windows での Oracle のインストールの相違, 4-2
Web ベース, D-10
インストール・セッションのログの確認, 4-33
インストール前, 4-4
「カスタム」インストール・タイプ, 4-12, 4-16, 4-28
旧 Oracle Installer 使用上の制限事項, 1-5, 4-5
最上位コンポーネント, 1-5
使用可能なインストール・タイプ, A-1
使用可能なコンポーネント, 1-5, A-1

単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
単一インストール・ステージ, 4-5, D-3
手順, 4-5
非対話形式モード, D-2
要件, 2-3

Optimal Flexible Architecture, 1-2

インストール後

NTFS ファイル・システムの権限の設定, 6-2
Windows レジストリのセキュリティの設定, 6-5
個々のコンポーネントの構成要件, 6-7
パスワードの変更, 5-3
無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック, 6-6

インストール後の構成手順

ネットワーク・ソフトウェア, 6-13

インストール・タイプ

Enterprise Edition, A-2
Oracle9i Management and Integration, 1-7, A-11
Oracle9i クライアント, 1-6, A-2, A-8
Oracle9i データベース, 1-6
Personal Edition, A-2
Standard Edition, A-2
各最上位コンポーネントで使用可能, 1-5

インストール前

Active Directory と Oracle9i の統合の要件, 2-14
Microsoft 管理コンソール用の Oracle Snap-In の要件, 2-13
Oracle Advanced Security の要件, 2-9
Oracle Enterprise Manager の要件, 2-10
Oracle Internet Directory の要件, 2-12
Oracle Management Server の要件, 2-10
Oracle Real Application Clusters の要件, B-3
Oracle Workflow の要件, 2-14
個々のコンポーネントの要件, 2-9
サービスの停止, 4-4
タスク, 4-4
データベース・バックアップの実行, 4-4
インストレーション・ガイド
使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-10, A-15
定義, A-36
インポート・ユーティリティ, A-33

え

エクスポート・ユーティリティ, A-33
エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポ
ート
使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
定義, A-18

お

オペレーティング・システム, サポート, 2-4
オペレーティング・システム認証による接続
構成, 3-9, 3-10, 3-12

か

外部プロシージャ
インストール後の構成タスク, 6-15
構成, 3-10
概要
Oracle9i for Windows, 1-2
拡張されたセキュリティ, 6-2, 6-5
拡張パーティション
Real Application Clusters の構成, B-5
「カスタム」インストール・タイプ
インストール, 4-12, 4-16, 4-28
定義, 1-6, 1-7
環境
ORACLE_HOME 設定の制限事項, 4-5
管理コンテキスト
構成, 3-10
「管理者」インストール・タイプ
インストールされるコンポーネント, A-8
定義, 1-6

き

機能, 新機能, xv ~ xxiii
共通マニュアルの参照先
Windows 固有の NLS_LANG の値, E-3
Windows 固有の REDO ログ・ファイルの場所,
5-11
Windows 固有の REDO ログ・ファイルのファ
イル・サイズ, 5-11
Windows 固有のパラメータ・ファイルのファ
イル名と場所, 5-11
共有サーバー

インストール後の構成タスク, 6-15
作成, 3-7

く

クライアントのインストール
手順, 4-15 ~ 4-17
レスポンス・ファイル, D-2
グローバリゼーション・サポート, E-3
グローバル・データベース名
定義, 5-7

け

ゲートウェイ, 「Oracle Transparent Gateway」を参照
言語
異なる言語での Oracle コンポーネントのイン
ストール, D-8
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用, D-9

こ

コンポーネント
Windows 98 上での手動による削除, 4-40
Windows NT/2000/XP での手動削除, 4-38
インストール, 4-5
インストール後の構成ガイドライン, 6-7
インストールに使用可能, 1-5, A-1
インストール前の必須要件, 2-9
互換性マトリックス, 2-7
異なる言語で使用, D-9
サポート, 2-7
単一 Oracle ホーム, 2-2
単一 Oracle ホーム・コンポーネントの 2 回目の
インストール, 2-2
単一 Oracle ホーム・コンポーネントのインス
トール, 2-2
データベース、Oracle Internet Directory および Net
Services サービスとレジストリ・エントリの削
除, 4-36

さ

サービス
停止, 4-4, 4-35
最上位コンポーネント
システム要件, 2-3

- 定義, 1-5
- サイレント・インストール
 - 概要, D-2
- 作業を始める
 - 概要, 1-8
- 削除
 - Oracle OSD, B-17
 - Oracle コンポーネント, 4-38, 4-40
 - Windows 98 上で Oracle を手動で, 4-40
 - Windows NT/2000/XP 上で Oracle コンポーネントを手動で, 4-38
 - データベース、Oracle Internet Directory および Net Services サービスとレジストリ・エントリ, 4-36
- サポート, 2-7
- サポートされないコンポーネント, xvii ~ xviii, xxiv
 - Windows Terminal Server, 2-7
 - Windows XP, 2-8
- サポートされるオペレーティング・システム, 2-4

し

- システム識別子
 - 複数 Oracle ホーム, 5-7
- システム要件
 - FAT および NTFS ファイル・システム, 2-3
 - 最上位コンポーネント, 2-3
- 初期化パラメータ・ファイル
 - init.ora, 5-11
 - 説明, 5-11
 - データベース, 5-11
- 初期データベース・パスワード, 5-4 ~ 5-6
- 初期データベース・ユーザー名, 5-4 ~ 5-6
- 新機能, xv ~ xxiii
- シンボリック・リンク
 - Oracle Real Application Clusters, B-15
 - 既存の構成, 用語集-2

せ

- 制御ファイル, 5-12
 - Oracle Real Application Clusters, B-4
- 製品サポート, 2-7
- 接続記述子
 - 定義, 3-9

そ

- 相違
 - Windows と UNIX での Oracle のインストール, 4-2

た

- 大容量メモリー (VLM) のサポート, xvii
- 単一 Oracle ホーム
 - コンポーネント, 2-2
 - 単一ホーム・コンポーネントの 2 回目のインストール, 2-2

て

- ディレクトリ・サーバー
 - 「カスタム」インストール・タイプによるアクセスの構成, 3-9
 - ディレクトリ・サーバーへのクライアント・アクセスの構成, 3-11
 - ディレクトリ・サーバーへのデータベース・アクセスの構成, 3-10
- データ・ウェアハウス
 - DSS データベース環境と同じ, 3-4
 - 定義, 3-4
 - データベース環境, 3-4
- データ・ディクショナリ
 - 初期データベース, 5-13
 - 説明, 5-13
- データのコピー
 - 論理パーティション, B-20
- データ・ファイル, 5-9 ~ 5-10, B-4
- データベース
 - REDO ログ・ファイル, 5-11
 - UNDO セグメント, 5-12
 - アップグレード要件, 2-14
 - 「カスタム」インストール・タイプ, 3-7
 - 構成タイプ, 3-5
 - 削除, 4-36
 - 作成に必要なユーザー入力, 3-2
 - 作成方法の選択, 3-5
 - サポートされる作成方法, 3-2
 - 使用可能なデータベース・タイプ, 1-6
 - 初期化パラメータ・ファイル, 5-11
 - 制御ファイル, 5-12
 - 制限付き SYS ロール権限の付与, 5-4

- 大容量メモリーのサポート, xvii
- ディレクトリ・サーバーで構成, 3-10
- データ・ディクショナリ, 5-13
- データ・ファイル, 5-9
- データベース環境の作成, 3-4
- デフォルト・パスワード, 5-2
- デフォルト・ユーザー名, 5-2
- 表領域, 5-9
 - ロール, 5-4 ~ 5-6
 - ロールバック・セグメント, 5-12
- データベース・タイプ
 - Oracle9i データベース, 1-6
- デフォルト REDO ログ・ファイル, 5-11
- デフォルト・キャラクタ・セット, 4-10, 4-24, 4-31
- デフォルト・データ・ファイル, 5-9 ~ 5-10
- デフォルト・ドメイン
 - 構成, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12
- デフォルトの初期化パラメータ・ファイル
 - init.ora, 5-11
- デフォルトの制御ファイル, 5-12
- デフォルト表領域, 5-9 ~ 5-10
- デフォルト・ポート, 4-20

と

- 投票ディスク
 - Oracle Real Application Clusters, B-4
- ドキュメント
 - Oracle Universal Installer の使用方法, 1-5
 - 単一インストール・ステージの作成, D-3
 - レスポンス・ファイルの使用方法, D-3
- トラブルシューティング
 - Inventory ログ・ファイル, 4-33
- トランザクション処理, 「OLTP」を参照, 3-4

に

- 認可サポート
 - 定義, A-18
- 認証サポート
 - インストール前の要件, 2-9
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-8
 - 定義, A-18

ね

- ネーミング・メソッド
 - 構成, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12
- ネット・サービス名
 - 構成, 3-9, 3-10, 3-11
- ネットワーク
 - Oracle Net 構成方法の選択, 3-8
 - ネットワーク構成ファイルの場所, 3-8
- ネットワーク・プロトコル
 - Oracle のサポート, A-7

は

- パスワード
 - 変更, 5-2, 5-3
- バックアップ
 - アップグレード前の実行, 4-4
- パッチ・セット情報, 6-5
- パッチ・モード
 - NLS_LANG パラメータの設定, E-5

ひ

- 非対話形式のインストール
 - 概要, D-2
- 必須、個々のコンポーネントの要件, 2-9
- 必須 Service Pack, 2-4
- 表領域, 5-9 ~ 5-10
 - TEMP, 5-9
 - TOOLS, 5-9
 - USERS, 5-10
 - XDB, 5-10
 - 大規模なソート処理のための拡張, 5-9
 - データベース, 5-9

ふ

- ファイル
 - Oracle Universal Installer ログ・ファイル, 4-33
 - ファイル権限, 6-2 ~ 6-5
 - ファイル・システム
 - システム要件, 2-3
 - 複数 Oracle ホーム
 - システム識別子, 5-7
 - プロトコル
 - Oracle のサポート, A-7

ほ

ポート 1521, 4-20

ゆ

ユーザー名

パスワードの変更, 5-3

よ

要件

Java Runtime Environment, 2-3

Oracle Enterprise Manager, 2-10

Oracle コンポーネントのインストール後, 6-7

Service Pack, 2-4

インストール前, 4-4

個々のコンポーネント, 2-9

個々のコンポーネントのインストール前の要件,
2-9

最上位コンポーネント, 2-3

データベースのアップグレード, 2-14

ら

「ランタイム」インストール・タイプ

インストールされるコンポーネント, A-8

り

リスナー

インストール前の停止, 4-5

クライアント・ソフトウェアでディレクトリにデー
タベースをインストール, 4-7

構成, 3-9, 3-10

作成, 3-10

リポジトリ

新しいリポジトリの作成, 2-10, 4-18, 6-8

アップグレードの制限, 2-10, 4-18

既存のリポジトリの使用, 2-10, 4-18, 6-8

専用の表領域とデータ・ファイルの作成, 5-10

リリース・ノート

使用可能なインストール・タイプ, A-7, A-10,
A-15

定義, A-36

れ

レジストリ

使用時の注意, 4-38

セキュリティの設定, 6-5

レスポンス・ファイル

CD 上, D-2

インストール時の指定, D-4

クライアント・ファイルの説明, D-2

使用方法, D-2

単一インストール・ステージ, D-3

ドキュメント, D-3

変更, D-3

ろ

ロール, 5-4 ~ 5-6

ロールバック・セグメント

初期データベース, 5-12

ログ・ファイル

インストール・セッションの確認, 4-33

論理パーティション

CWMLITE 表領域, B-4

ODM 表領域, B-4

Real Application Clusters の構成, B-5

REDO ログ・ファイル, B-4

XML 表領域, B-4

互換性の問題, B-19

制御ファイル表領域, B-4

データのコピー, B-20

投票ディスク, B-4